

塩川・須坂・小山遺跡群

# 須坂園芸高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

—須坂創成高等学校建設Ⅰ期工事・工業棟建設に伴う発掘調査—

2015.3

須坂市教育委員会

塩川・須坂・小山遺跡群

# 須坂園芸高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

—須坂創成高等学校建設Ⅰ期工事・工業棟建設に伴う発掘調査—



## 序

本書は、平成 23 年度から平成 25 年度にかけて長野県須坂園芸高等学校内で行った発掘調査によって記録された遺跡・遺物の調査報告書であります。

少子化にともない長野県教育委員会による高校再編計画の一環として、須坂園芸高等学校と須坂商業高等学校を統合し、新課程（工業科）を新設する須坂新校・須坂創成高等学校が設置されることになりました。

須坂園芸高等学校は、校庭から出土した弥生土器が長野県内でも例のない稀少な遺物であり、早くから須坂市内の貴重な遺跡として周知されています。この他にも千曲川に流れ込む鮎川・百々川・八木沢川・松川によって形成された扇状地上に立地する須坂市内には、古代以来、多くの人々が生活を営んできました。そうした先人の営みも埋蔵文化財として、地下に残されています。新課程設置に伴う新たな校舎建築や温室移転に際して、遺跡の内容や様子を後世に残すため、記録保存の発掘調査を実施することとなり、ここにその成果を公表・刊行することになりました。

調査の結果、調査地点では約 1000 年前（奈良・平安時代）の土器類が多く出土しました。それらの中にはほぼ完全な形で残ったものもあり、昔の人々がどのように生活していたのかを今後明らかにする重要な資料も含まれています。

また、近年の須坂市内における埋蔵文化財やその調査に対する諸方面の理解の深化もあり、1990 年ごろ、園芸高等学校内で食品加工実習棟建築に伴い発掘調査を行った成果も、この機会に整理し公表することとなりました。整理調査を通じて出土した土器群が、須坂市内はもとより北信地域でも数少ない遺物の可能性が明らかとなりました。約 2,000～1,500 年前、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて須坂の歴史の一端を示す歴史資料が、壊れることなく保存され明らかになったことは、重要な意義あることと思われまます。

発掘調査と整理調査によって、先人が形作った文化財や歴史が、少しずつ明らかになりつつあります。今後、この報告書が地域文化を考え、発展させる一助となることを期待します。

最後となりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、長野県教育委員会・須坂園芸高等学校をはじめ、地元地域や工事施工の関係者の方々など、埋蔵文化財調査へのご理解とご協力をいただきました皆様に、感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

須坂市教育委員会  
教育長 小林 雅彦



## 例 言

1. 本書は、平成 23 年度から平成 26 年度にわたって、須坂創成高校の 1 期工事・工業棟建築工事に伴って、長野県須坂園芸高校内で行った埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点の所在地及び、遺跡名は以下の通りである。  
長野県須坂市須坂 1616 番地他 塩川・須坂・小山遺跡群（遺跡№.19）
3. 発掘調査は、須坂市教育委員会が主体となり須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課（以下生涯学習スポーツ課）が行った。
4. 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成 26 年度に行った。
5. 出土遺物および調査に係る諸資料は、一括して生涯学習スポーツ課で保管・管理している。
6. 遺跡略号は、「EN」と表記し、注記作業を行った。
7. 本書に掲載した遺物番号は遺構ごとに通し番号とし、本文・遺物観察表・図版・写真においてすべて一致している。
8. 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
9. 遺構図のスクリーントーンは [ ] が焼土、[ ] が炭化物集中域を示す。  
遺物図は須恵器の断面は黒塗り、黒色処理が [ ]、赤彩が [ ] である。
10. 各遺跡の遺構の記述にあたり、以下の通り略記号を使用した。SI は堅穴住居跡、SB は掘立柱建物、SK は土坑、P はピット（柱穴等）、SD は溝状遺構・自然流路（河川）跡、SC は炭化物集中域、SF は焼土集中域、SX は不明遺構である。なお、長径 60 cm 未満をピット（P）とし、60 cm 以上のものを土坑（SK）として区別した。
11. 遺構の形状分類は、次ページの挿図 1 に従って記述した。
12. 土器の時期決定の基準となった編年資料は、各章の冒頭部分に記載した。古代の器種分類は挿図 2 の通りである。なお、黒色処理された土器は、便宜上、「内黒」とも記載した。
13. 遺物の残存率については、口縁部や上部部の残存率を記載した。
14. 調査地点及び遺構等の測量と、ラジコンヘリによる空撮は、(株)共栄測量に委託した。
15. 引用文献は著者および発行（西暦）を文中に[ ]で記し、巻末に一括して記載した。
16. 整理作業も、生涯学習スポーツ課文化財係で行った。遺物水洗・注記は発掘作業員で行い、接合作業は樋口典子・関郁子・甲田邦子・坂田順子の 4 名で行った。遺物実測は樋口・甲田・坂田（順）、遺物トレースは関が行った。遺構トレースは高橋千穂・新井香織・坂田智恵・宮崎良美、遺物写真撮影は石原崇・田中が行った。
17. 本書の執筆・編集は田中一徳が行った。

18. 調査体制は以下の通りである。

**調査主体** 須坂市教育委員会

渡邊 宣裕 (教育長 H23～25)・小林 雅彦 (教育長 H26)  
春原 博 (教育次長 ～H25)・中島 圭子 (教育次長 H26)

**平成 23～25 年度 発掘調査** 須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課文化財係

**管 理** 黒岩紀志雄 (部長 H23)・勝山昇 (部長 H24～)  
**統 括** 吉田 孝 (課長 H23)・丸山裕範 (課長 H24～)  
**庶 務** 丸山裕範 (課長補佐兼文化財係長 H23)・田中賢一 (課長補佐 H24～)・  
中澤和久 (係長 H23)・千葉剛成 (主査 H23～H24・係長 H25～)  
杉山健一 (主査 H25・企画員 H26～)  
山下佳代子 (事務員 H23～H24)・袖山めぐみ (事務員 H25～)  
**調査担当** 田中一徳 (学芸員 H23～)  
**調査職員** 中村拓誠 (学芸員 H23～H24)・富田 慈 (学芸員 H24～)

**平成 26 年度 整理調査** 須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課文化財係

**管 理** 勝山昇 (部長)  
**統 括** 丸山裕範 (課長)  
**庶 務** 田中賢一 (課長補佐)・千葉剛成 (係長)・  
杉山健一 (主査 H25・企画員 H26～)・袖山めぐみ (事務員)  
**整理担当** 田中一徳 (学芸員)  
**整理職員** 富田慈 (学芸員)

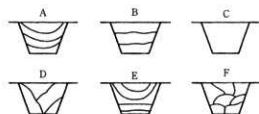
**発掘・整理参加者**

新井香織 石原崇 上田美帆 北沢美穂 甲田邦子 坂田順子 坂田智恵  
篠田千代子 清水春雄 白井弓子 関郁子 高橋千穂 永井明美 原伸・  
樋口典子 宮崎良美 山岸弥生 山田哲夫 (以上、文化財係臨時職員)  
川村直城 川村静枝 久米一郎 関谷日出男 高橋輝夫 玉井秀子 傳田久  
徳永陸雄 (以上、(社)須高広域シルバー人材センター)

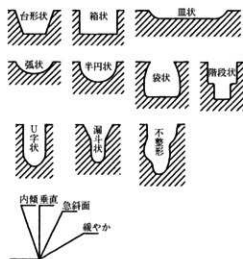
発掘調査の実施に際して、長野県教育委員会(高校教育課高校改革係)及び長野県須坂板垣芸高校、須坂創成高校の建築工事の施工業者のみなさまには、埋蔵文化財保護に対してのご理解を頂き、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。



遺構 平面分類図



遺構 堆積形状分類図



遺構 断面分類図

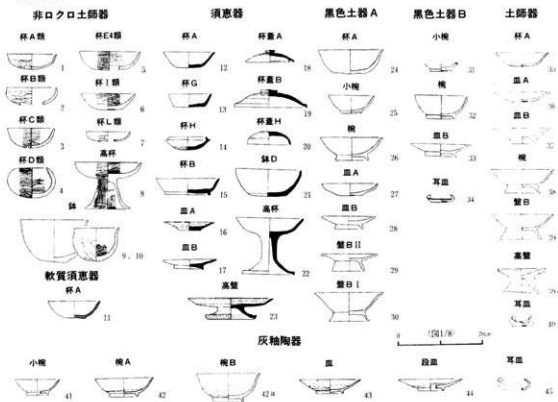
### 断面形状

台形状	底部に平坦面をもち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
皿状	溝を除いた平面長径が深さの10倍以上で、底部に平坦面をもち、緩やかに立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面をもたない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面をもたない碗状で、急斜度に立ち上がるもの。
袋状	検出面の径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの。
階段状	階段状の立ち上がりをもつもの。
U字状	平面長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
不整形	凸凹で一定の断面形をもたないもの。

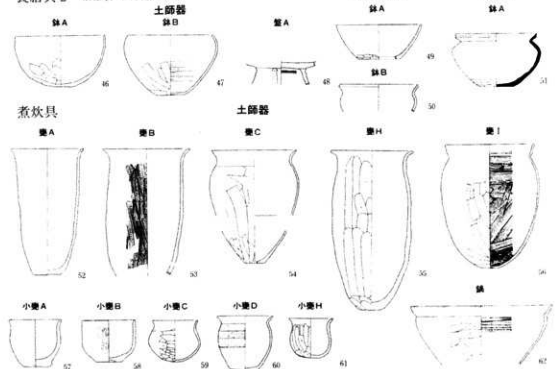
遺構 断面分類表

挿図1 遺構の平面・断面形状分類図 (加藤・荒川1999より転載)

食膳具 1



食膳具 2 (鉢類等、やや大型のもの)



挿図 2 土器器形分類図 (鳥羽英継 2000a より転載)

# 目次

序	
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	
1 事業の概要と協議	1
2 試掘調査	1
3 温室(ガラスハウス)解体 立会調査	4
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	
1 地理的環境	5
A. 山地部	
B. 平地部	
2 歴史的環境	8
第Ⅲ章 工業棟 本発掘調査	
1 調査の概要	13
2 土層堆積状況	14
3 検出遺構	14
4 出土遺物	16
5 渡り廊下 本調査	17
第Ⅳ章 温室緊急調査	
1 調査の概要	19
2 土層堆積状況	19
3 検出遺構と出土遺物	20
第Ⅴ章 食品加工実習棟 本発掘調査	
1 調査の概要	27
2 土層堆積状況	28
3 検出遺構と出土遺物	28
A. 竪穴住居跡と関係遺構(ピット類など)	
B. 土坑類と遺物集中域	
第Ⅵ章 結語・まとめ	41
1 工業棟 本発掘調査	41
2 温室緊急調査	41
3 食品加工実習棟 本発掘調査	42
引用・参考文献	44
遺物観察表(1)～(3)	46
図版	
写真	
抄録	

## 挿図・挿表目次

- |     |                           |     |                            |
|-----|---------------------------|-----|----------------------------|
| 挿図1 | 遺構の平面・断面形状分類図             | 挿図4 | 工業棟本調査グリッド設定図              |
| 挿図2 | 土器器形分類図                   | 挿図5 | 須坂市の地質分布図                  |
| 挿図3 | 試掘対象範囲及びトレンチ位置図<br>・土層柱状図 | 挿図6 | 須坂市内の遺跡分布図<br>遺物観察表(1)~(3) |

## 図版・写真目次

- |      |                                |
|------|--------------------------------|
| 図版1  | 調査位置図                          |
| 図版2  | 工業棟本調査 全体図                     |
| 図版3  | 工業棟本調査 遺構拡大図(1)                |
| 図版4  | 工業棟本調査 遺構拡大図(2)                |
| 図版5  | 工業棟本調査 遺構個別図(1)                |
| 図版6  | 工業棟本調査 遺構個別図(2)                |
| 図版7  | 工業棟本調査 土層断面図                   |
| 図版8  | 温室緊急調査 全体図・遺物拡大図・遺物出土状況        |
| 図版9  | 温室緊急調査 土層断面図                   |
| 図版10 | 食品加工実習棟本調査 全体図・遺構個別図(1)        |
| 図版11 | 食品加工実習棟本調査 遺構個別図(2)            |
| 図版12 | 工業棟本調査・温室緊急調査 遺物図版(1)          |
| 図版13 | 温室緊急調査 遺物図版(2)                 |
| 図版14 | 温室緊急調査 遺物図版(3)                 |
| 図版15 | 食品加工実習棟本調査 遺物図版(1)             |
| 図版16 | 食品加工実習棟本調査 遺物図版(2)             |
| 図版17 | 食品加工実習棟本調査 遺物図版(3)             |
| 図版18 | 食品加工実習棟本調査 遺物図版(4)・渡り廊下全体図・断面図 |
| 図版19 | 工業棟本調査 全景・遺構個別写真(1)            |
| 図版20 | 工業棟本調査 遺構個別写真(2)               |
| 図版21 | 工業棟本調査 遺構個別写真(3)               |
| 図版22 | 工業棟本調査 遺構個別写真(4)               |
| 図版23 | 工業棟本調査 遺構個別写真(5)               |
| 図版24 | 工業棟本調査 遺構個別写真(6)               |
| 図版25 | 工業棟本調査 遺構個別写真(7)               |
| 図版26 | 工業棟本調査 遺構個別写真(8)               |
| 図版27 | 工業棟本調査 遺構個別写真(9)・断面写真(1)       |
| 図版28 | 工業棟本調査 断面写真(2)                 |

- 図版 29 工業棟本調査 断面写真 (3)
- 図版 30 温室緊急調査 全景・遺構個別写真 (1)
- 図版 31 温室緊急調査 遺構個別写真 (2)
- 図版 32 温室緊急調査 遺構個別写真 (3)・断面写真 (1)
- 図版 33 温室緊急調査 断面写真 (2)
- 図版 34 温室緊急調査 断面写真 (3)
- 図版 35 食品加工実習棟 遺構個別写真
- 図版 36 遺物写真 (1)
- 図版 37 遺物写真 (2)
- 図版 38 遺物写真 (3)
- 図版 39 遺物写真 (4)
- 図版 40 遺物写真 (5)

# 第 I 章 調査に至る経緯

## 1 事業の概要と協議

平成 16 年度以降、生徒数の減少や高等学校の適正な規模・配置などを目的に、「高等学校再編計画」が検討され実施されてきた。平成 20 年 9 月には「長野県高等学校再編計画の骨子案」が長野県教育委員会（以下、県教委と略す）で決定され、計画の基本的な考え方が示されたことを受けて、市町村教育委員会や学校関係者などの協議・提言を踏まえて、平成 21 年 2 月「第 1 期長野県高等学校再編計画（案）」が決定された。その後平成 22 年 10 月の長野県教育委員会定例会において、長野県須坂園芸高等学校（以下園芸高校）と須坂商業高等学校（以下商業高校）を統合し、新課程（工業科）を新設する須坂新校実施計画が策定されるに至った。

これに従い、I 期工事として工業棟の建設とそれに先行する温室の一部移転新築が具体化された。須坂園芸高校校内が埋蔵文化財包蔵地に含まれることや、校内に須坂園芸高校校庭遺跡という県内では著名な遺跡が所在し近接するため、須坂市教育委員会及び同市市民共創部生涯学習スポーツ課と協議が行われた。その結果、遺跡の有無と今後の協議資料を得ることを目的に試掘調査を行うこととし、平成 23 年、文化財保護法第 94 条に従って、「開発行為に伴う埋蔵文化財の届出」が須坂市生涯学習スポーツ課に提出された。

後述する試掘調査の結果、工業棟予定地に対しては本発掘調査が必要と判断された。また、それに先行する温室（ガラスハウス）移転予定地である畑地部分に対しては工事立会と、取扱いが確定したことを受けて、平成 23 年 11 月温室移転の工事立会を行ったところ、残存率の高い土師器長胴甕が出土したため、園芸高校及び施工業者の須坂土建株式会社・伊藤設計事務所と緊急の協議が行われた。協議の結果、文化財の重要性を十分に理解頂き、12 月 20 日までを期日として緊急発掘調査を行うこととなった。

さらに平成 25 年 4～5 月には工業棟建設に先行する本調査に向けて、県教委・園芸高校と協議を重ね、夏休業期間中となる 8 月以降に本調査を行うこととなった。こうした協議の中で、工業棟と現在ある農業経営棟とを結ぶ渡り廊下建設とその工事内容が明らかとなり、本調査と併行して発掘調査（試掘・本調査）を実施することとなった。

この他に、I 期工事にともなう電気・水道等の配管の新設や移転工事や電柱の建て替え、小型貯水槽の埋設などの現状変更に対しては、逐次、県教委（高校改革係）や施工業者から連絡を頂き、立会調査を実施した。

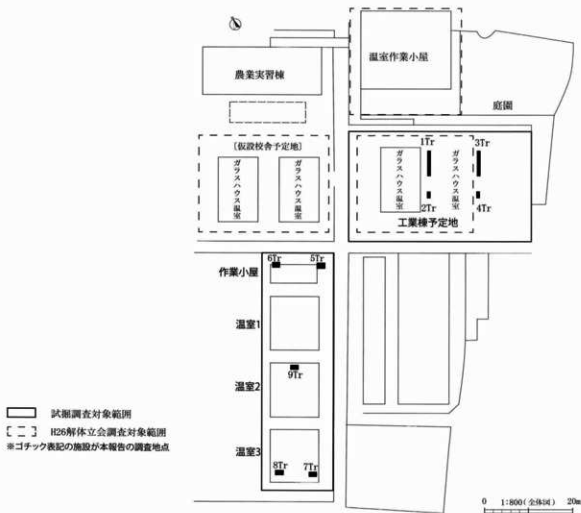
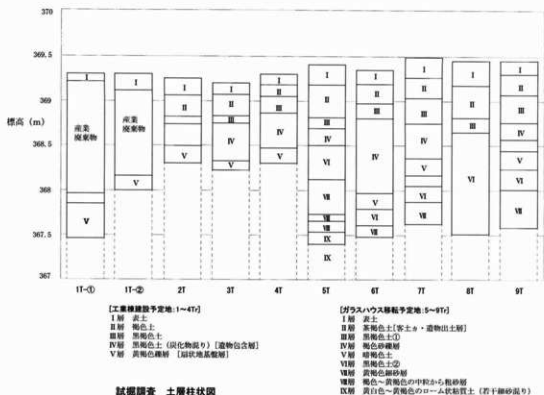
## 2 試掘調査

須坂市が平成 23 年 7 月 4 日付で提出した 23 生字第 3-16 号文書に対する県教委文化財・生涯学習課の平成 23 年 7 月 28 日付 23 教文第 8-75 号の発掘調査の通知に従い、平成 23（2011）年 8 月 8 日から 12 日にかけて 5 日間、試掘調査を行った。調査対象地は工業棟予定地と温室移転予定地の 2 地点である（挿図 3 参照）。ただし、工業棟予定地には既存の温室（ガラスハウス）が 2 棟あったため、この 2 棟の間と東側にある空地に対して試掘トレンチを設定し調査を行った。

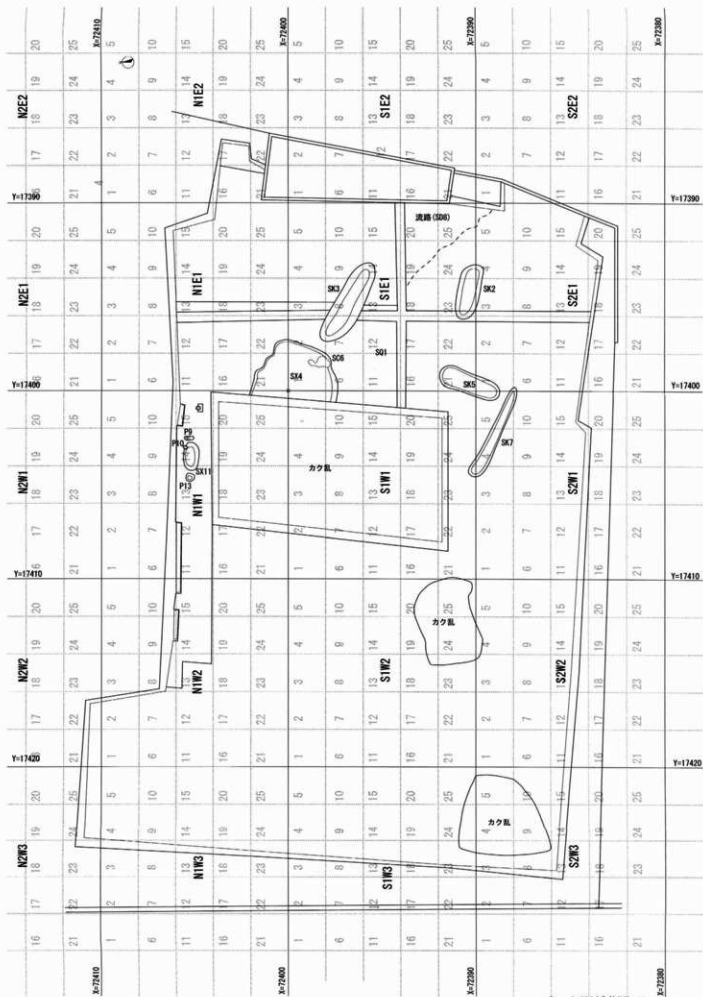
調査は、建設・移設予定地内において重機（0.25 級バックホー）および人力によって慎重に掘削・精査し、遺構・遺物の有無を確認した。その後、掘削した部分を各々トレンチ（試掘坑、以下 Tr と略）としてその位置や土層の堆積状況等を写真等に記録した。トレンチ総面積は約 91.74 m<sup>2</sup>で、対象地面積 855 m<sup>2</sup>に対して約 1.1%の試掘達成率である。

試掘調査の結果は、既存のガラスハウスに挟まれた 1Tr・2Tr では表土直下に、以前に所在したと思われる建





挿図3 試験対象範囲及びトレンチ位置図・土層柱状図



挿図4 工業株本調査グリッド設定図

0 1:200 (全体図) 5m

物のコンクリート基礎や、その解体時に発生したと思われる産業廃棄物が埋納され、遺物・遺構は検出されなかった。土層も基盤層（黄褐色砂礫層）まですべてが破壊されていた。

その東側に当たる 3Tr・4Tr では古墳時代後期と思われる土師器や須恵器片が出土した。遺構では、3Tr において性格不明の集石状遺構や柱穴の可能性が考えられるビット類が数基検出され、4Tr では黄褐色砂礫層（基盤層）を約 20 cm 掘り込む長さ約 2 m の溝状の落ち込みが確認された。本調査で検出された SX5 に該当すると思われる。黄褐色砂礫層（遺構確認面）の直上には、上述の遺物を出土し遺物包含層の可能性が高い黒褐色土が厚層約 20 cm で堆積する状況が確認された。

一方、ガラスハウスの移転予定地である畑地内（5～9Tr）では、II 層茶褐色土から土師器を主体とする遺物の出土が確認された。しかしながら、こうした遺物は近世以降の陶磁器片なども混入する状態で出土しており、茶褐色土とその下、黒褐色土との境目付近ほど大きめの破片が出土するもの掘り込む遺構がなく、二次堆積にともない埋没した遺物と推測した。

以上の調査結果にもとづき、以下のような取扱いを須坂園芸高校と決定した。

工業棟建設予定地（1～4Tr）では、遺跡が所在する可能性が高く、本発掘調査が必要と判断した。これを受けて県教委高等教育課・須坂園芸高校を含めた協議の結果、平成 25 年度に本発掘調査を行うこととなった。また、今回の調査では試掘できなかった既存のガラスハウス部分に対しては、平成 24 年度の、ハウス移転後に再度、試掘確認調査を行うこととした。再試掘後に、本調査対象面積を決定することとなった。

ガラスハウス移転予定地（5～9Tr）では明確に遺跡の所在を確認することはできなかったが、それぞれの試掘トレンチで一定量の奈良平安時代の土師・須恵器片が出土していることは軽視できない。近隣の建設に伴う試掘調査でほぼ同時期の土師・須恵器片が出土したようなので、出土した遺物は、付近から流入した可能性もあるが、今後周辺の歴史や発掘調査を行う上では貴重な資料となる可能性が考えられたため、移転工事に工事立会を行って工事・掘削で出土する遺物を採取する必要があると判断した。

### 3 温室（ガラスハウス）解体 立会調査

上述のとおり、試掘後の協議では、工業棟予定地内の温室（ガラスハウス）の解体後、改めて再度、試掘調査を行う予定であったが、工期の都合上などのため、それが困難となってしまった。そこで、解体に伴って立会調査を実施することとした。平成 25 年 4 月に解体施工業者（株）鹿間組）と協議し了解のもと、作業員を同行して立会うこととなった。

上述のとおり、本来ならば温室解体後に工業棟予定地の本調査必要範囲を絞り込むことになっていたが、それもあわせて困難な状況となったため、本調査必要範囲を狭めることなく、工業棟建設予定地の全てを本調査対象地とすることも解体工事に先立つ事前協議において、確認・決定した。

立会調査対象範囲は、上記の工業棟予定地だけでなく、構内道路を挟んだ西側隣接地の温室も解体の対象となっていたため、これも含めた。調査は温室建物を撤去後、埋設された建物基礎の除去と温室に関わる埋設管の撤去にもなって実施した。この他に、関連する管理施設や隣接する作業小屋の部分も含めた。撤去作業が 0.7 級のバックホーで基礎部分の両側を幅約 1 m、深度約 50～120 cm でトレンチ状に長く掘削するため、基礎施工時以上に地山が大きく掘削されることとなった。こうした除却の方法のため、元々の土層が失われカク乱されてしまった部分も少なくない。調査時には土層が残存している部分を見つけ出し、写真などを記録し、仮設校舎予定地の西側隣接地において土師・須恵器片が出土し、他の対象地でも同様の破片がわずかに出土した。

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

### 1 地理的環境

長野県北東部に位置する須坂市は、地理的には山地・丘陵部と平野部に二分される。山地部は第三紀層とそれを突き抜く火成岩類を基盤とする。この上に第四紀の噴出物が覆う地質となっている。火山地と少ない丘陵部によって形作られた山地形であり、総じて河東山地とも称される。

平野部は扇状地段丘地形による台地と、千曲川とその支流によって形成された沖積地に大別される。山地部が多くの火山による火山活動によって隆起しつづけているのに対して、千曲川の流れる盆地沖積部は沈降をつづけている。そのため、市域全体が北西方向に下降し、千曲川に流れ込む支流は北西方向に流下する地理的特質を現象する。

#### A. 山地部

須高地域の地形形成の始まりは約2,000万年前に始まる。第三紀に入って起こった地殻変動によって、大陸から分断されたことで日本列島の原形ができあがり、それに伴う日本海北部における海底火山の造山活動によって堆積し形成されたのが、河東山地の火山の第三紀層の主体となるグリーンタフ（緑色凝灰岩層）である。こうして基盤地形となる第三紀層が形成された。

河東山地を含めた中部山地の山々は、第四紀（約180万年前）以降、伊豆半島の衝突など東西から圧力を受けようになり、急激に隆起した。この隆起現象は現在でもつづき、一年間で約2～4mm、100万年で2000～4000mの隆起につながって、群馬県に接する四阿山、浦倉山、土鍋山、御飯岳など標高2000m越えの山地が形成されることとなった。

隆起と火山活動による造山形成のため、山頂部付近は急傾に下行する地形となっている。山頂に近い地形でも部分的に緩斜面が形成され、高原として利用されている。四阿山の西方向に広がるのが峰の原・菅平高原であり、破風岳付近が破風高原である。高原部分は山頂付近に発する小河川によって分断され、火山麓の先端部付近は別荘地として、さらに高い地点は牧場やゴルフ場として利用されている。

市内を流れる主要な河川は、この山頂以下を源流部とする。隆起活動地帯から発するため河床が急傾で、流下しながら岩石を削り取るので、上流部ではV字谷地形を形成する。隆起帯の端部、すなわち、隆起から脱する地点では滝が形成される。地形も緩傾斜へと転換し、この滝を境に河床も緩やかに下るようになる。この一例が米子川である。四阿山カルデラの山頂付近を源流とするこの河川は、カルデラの外輪山を突き破って平野部へ下流する。カルデラから出て河床の傾斜角が転換する地点が権現滝・不動滝といわれる滝であり、いわゆる「米子の大瀑布」である。これまでの急な勾配から一転して、この滝を落ちた後は緩やかな傾斜となる。他の河川も同様の傾向があり、こうした滝が河川における山地部と平野部の転換点が見て取れる。

須坂の地理的な特徴の一つとして、山地と平野部が接している地点が多く、その間の丘陵部がないことがある。わずかな丘陵が、臥竜山と豊丘の離山である。臥竜山は第三紀中新世の堆積岩である頁岩と、それに貫入した玢岩で構成されている。若干、玢岩の質に相違があるものの、基本的には共通する地質が坊主山や鎌田山にも延伸していたと考えられている（『須坂市誌』自然編）。第四紀になって急激に河東山地が隆起したために、それに伴って河川上流の方が地形の削削が激しく、大量の上砂が生成された。これが中・下流域に流下り、扇状地堆積の原質となり、臥竜山の場合はこうした土砂で山地との間が埋没し分離された結果、現況のように丘陵化した地形となっている。

同様に分離丘陵化したのが豊丘の離山である。豊丘地区は米子山系と奈良山系の末端の山々に挟まれ、南部

を流す灰野川が形成した扇状地と、北部を流れる奈良川が形成した小規模な複合扇状地で形成される。この両扇状地の扇頂部の接合点が所在するのが離山丘陵である。長さ約 350m、扇状地面との比高約 30mをもって残存している独立丘陵である。この分離丘陵は両輝石安山岩の古い溶岩で形成されている。両河川によって丘陵を浸食した痕跡を丘陵及びその西側にも確認できる。元々は大きな岩体であったこの丘陵の一部が浸食されつつ、扇状地の形成過程の中で同時に周辺に上流からの土砂が堆積された結果、現状では分離した地形を形成したと考えられる。それ故、西へ向かって低下する地表下にこの丘陵を構成する岩体が埋没していると推測されている。

## B. 平地部

山地から流出した河川の流れる平地部は、地形・地質上、市の中心部の大半を、扇状地段丘地形上に立地する。扇状地形や河成段丘を形成する主因となったのが、山地部の小河川を統合して平地部上を流れる河川である百々川（市川）・鮎川・松川である。これらの河川は最後に千曲川へ流入し、日本海へ向けて北流する。

扇状地段丘面は、数万年前から現在に至るまで、山地部から流入した土砂・剥落岩石などが運搬・堆積・侵食され、さらにその後の環境変化によって離水（陸地化）して形成された地形である。形成要因である環境変化とは、気候変化や突発的な土石流、河川の堰き止めなど様々な要因による。この扇状地段丘地形は平面分布上では、市城南半に広がる百々川・鮎川扇状地段丘面と、北に位置する松川扇状地段丘面に二分される。いずれの扇状地でも分布高度やその連続性から上位・中位・下位段丘面の3種類に区分される。この内、上位段丘面は松川上流の高山村内に見られるだけで、須坂市内には確認されていない。よって、須坂市内では、分布の高い方から中位段丘面と下位段丘面だけが確認される。

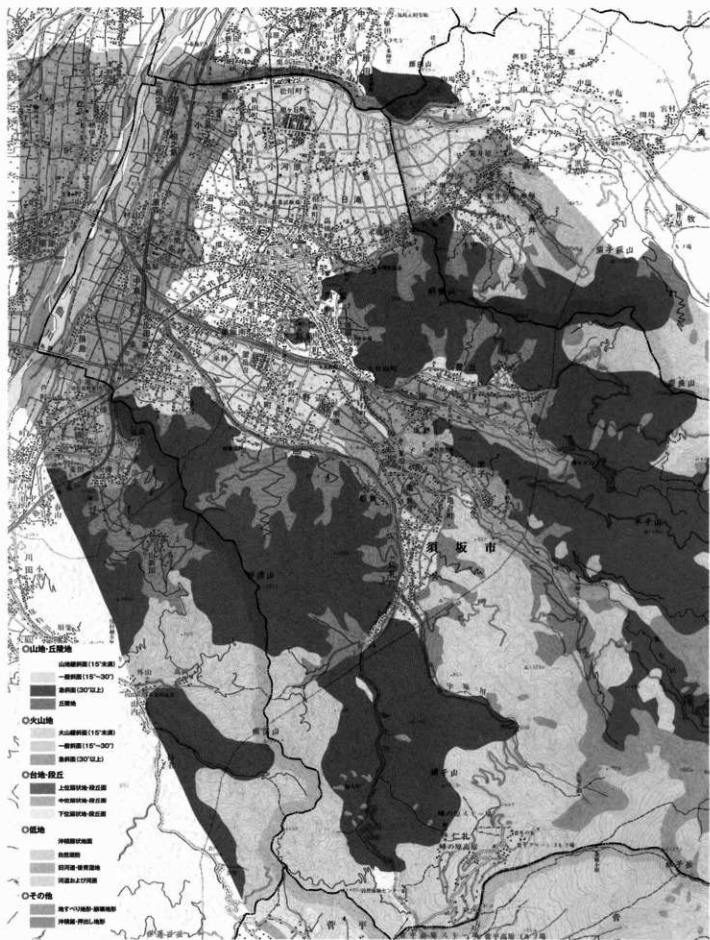
百々川・鮎川扇状地段丘面は、中位段丘面が百々川上流の米子川・灰野川・奈良川に沿って広く分布し、下位段丘面は百々川中流から下流域の左岸などに見出せる。比較的標高の高い地点である大字亀倉付近では中位段丘面と下位段丘面とは 10m以上の比高差があるが、下るに従い比高差は少なくなり、下位段丘面と接する大字野辺付近ではわずかな差しか観察できない。段丘面を構成する土層状況は、礫を主体とする扇状地らしい堆積状況を確認できる。具体的には、10～20 cmの中礫が主体の層と、5～30 cmの小礫や明褐色の細砂層を主体とする土層の互層となっている。

下位段丘面を構成する土層は、粒径が5～10 cm程度の歪円礫や歪角礫が主体となる砂礫層で、中位段丘面と比べ、礫石が小粒になるとともに、中粒砂や細砂などさらに粒子の細かい砂層が多く含まれるようになる。

こうした扇状地堆積の土層の中に、所々、黒褐色の極細砂層が約 20～40 cmほど堆積する場所が見られる。保水量が多く若干粘性をもつ土層で、中位・下位段丘面ともに検出される。必ずとは限定できないが、この土層に古代や縄文晩期の遺物が混入することが近年の発掘調査等によって明らかになっており、扇状地段丘面の地形・土層と遺跡との関係を考慮する上で特徴的な土層である。

扇状地段丘面地形の西側に千曲川に沿って展開するのが沖積部である。沖積部は千曲川まで約 2kmの幅をもち、広義にいえば、千曲川の氾濫原と解される。さらに細分すれば千曲川が形成した自然堤防と、その後背湿地に二分される。福島や村山などが自然堤防上に立地し、周囲の后背湿地よりも約 1mほど高い地形となっている。確認できる範囲内では、中世以降にこれらの自然堤防上が集落として利用されはじめ、小規模な増水などに備えやすい微高地として、利用・形成されたと考えられる。

ただ、いずれの地点でも沖積部の詳しい土層の調査はないため、地質に関するデータに乏しく、具体的な内容は明らかでない。一般的な河川堆積状況から推測すると、おそらくは粒子の細かい砂やシルト、粘土で形成され、その互層状態と思われる。木成堆積による形成土質と思われる状況は、「沼目」「相之島」「西沖」「砂田」など水に関係する地名（小字名）がこの地帯に散見することでも推察される。



挿図 5 須坂市の地質分布図

## 2 歴史的環境

須坂市内で最も古い時代の資料は、仁礼の宇原遺跡(70)から出土とされている尖頭器1点である。採取資料のため詳細は不明であるが、旧石器時代の遺物である。ここから須坂の歴史がはじまるが、旧石器時代の発掘調査等はほとんど行っていないため、これ以上の詳細は不明である。また、旧石器時代と縄文時代の境界期の遺物として、小河原地籍内で神子柴型石斧が発見されている。しかしながら、こちらも表採資料のため、詳細は明らかでない。

縄文時代に入ると、約1万2千年前の縄文草創期の土器片がまとまって出土した遺跡として、石小屋洞穴遺跡(68)がある。宇原川左岸の仁礼山中腹、標高約1,010mに位置する。昭和56年8月22~23日の台風15号による土石流によって地形が改変されるまでは、眼前を大笹街道が通っており、北国臨往還を往来する旅人や、山中で作業を行う入道が一時的な休息や宿泊に利用するキャンプ場として使われていた。昭和29年に林道の開削工事で弥生中期の土器片が出土したことが契機となって発見され、昭和38年に國學院大學の永峯光一氏を中心とした発掘調査により、微隆起線土器や石器などが出土した。近年、日本の各地でこれより古い年代の草創期遺跡が発見されているが、当時は日本最古級の遺跡の一つであった。

縄文早期の遺物を出土したのが仙仁山山麓の葛蒲沢岩陰遺跡(71)である。巨石と巨石の間のわずかな隙間で土器片や石器(石織)などが採取されており、地元ではこうした遺物が拾える場所として知られていた。他の縄文早期の遺跡や、次ぐ縄文前期の遺跡は市中には確認されていないが、中期後葉になると、2遺跡が包蔵地として周知化されている。ひとつが、八木沢川右岸の河岸段丘上に立地する橋場遺跡であり、昭和56年広域農道新設に先立つ発掘調査では敷石遺構などが検出された(須坂市教委1982)。この遺跡では縄文前期の遺物も出土しており、未確認の前期の遺跡が付近に所在する可能性も考えられる。もう一つが上八町の鮎川左岸の段丘上に所在する三入道遺跡である。昭和46年に発掘調査が行われており、配石状遺構などが検出された<sup>2</sup>(永峯光一1957、同1965、同1967、同1968、同1982)。

これまで縄文晩期の遺跡は長らく確認されていなかったが、近年の発掘調査により明らかとなりつつある。平成23年大字八幡の屋敷下遺跡内の個人住宅の工事立会調査によって後期末葉~晩期(佐野I式)の粗製土器の深鉢口縁部片が8点出土した。さらに北西に約300m離れた八幡の墨坂神社の南前でも晩期の土器が出土した。国道403号拡幅工事に先立つ平成26年の八幡前遺跡本調査において、古代の聖穴住居跡を検出した下層から、縄文晩期末葉の粗製土器や精製土器の深鉢などが出土した。米I式に相当する浮線網状文の土器の他に、土製円盤(土盤)や黒曜石の石織・石器片などが出土し、付近に縄文晩期の遺跡が存在する可能性が一層高まった。

弥生時代の遺跡は少なく、これまでに調査された遺跡は塩川・須坂・小山遺跡群の須坂園芸高校校庭遺跡だけである。昭和38年校庭内のグラウンド整備に伴い、現在のバックネット付近から弥生中期の土器(栗林I式)や菅玉などが出土したとされている(桐原健1961)。近年では平成25年、八幡の墨坂神社西側隣接地において、賃貸住宅建築に伴い本発掘調査を行ったところ、園芸高校校庭遺跡よりも少し新しい時期の栗林I式の土器片が遺物包含層より出土した。遺構類は検出されていないので集落跡ではないが、一定量の遺物が出土したことに注目すれば、付近に弥生中期の遺跡が所在し残存する可能性を示唆する。なお、上述した縄文晩期の八幡前遺跡とは約100mしか距離がないので、縄文晩期頃から、扇端部付近に遺跡が形成・立地する可能性が明らかになりつつある。この他、須坂園芸高校内には弥生時代末期から古墳時代初期の集落跡と思われる遺跡も確認され、扇端部付近の弥生時代の様相が今後さらに明らかになる可能性がある。

古墳時代に関しては、墓である古墳そのものは、市内に約100基が確認されているが、一部の古墳を除き、

<sup>1</sup> 近隣住民の聞き取り調査による。

<sup>2</sup> 中期後葉~後期前葉(加曾利E3式~堀之内I式を中心)の土器片や打製石斧などが出土している。



挿図6 須坂市内の遺跡分布



その多くが積石塚古墳とされている。その中で最古の積石塚古墳が4世紀末の築造とされる大字八町の観塚1号墳である。昭和32年と平成5年の発掘調査の結果、径25.5m、高さ3.5mの円形の積石塚で、鉄鎌や直刀片、方格規矩鏡片などの金属製品や石釧・勾玉・管玉など石製品、埴輪片の他に南海産のゴホウラ貝製の貝釧などが出土した。時期・埴輪規模ともに東日本の積石塚では最大級の墳丘をもつ古墳である。また、鮎川右岸の段丘上に形成された他の古墳とともに鮎川古墳群を形成し、中でも上流部に位置して、盟主墓の可能性を示唆する。これに隣接して5世紀後半の鍔銀銅製獅噴文鈿板を出土したのが観塚2号墳である。昭和32年と昭和60年・平成5年に発掘調査が行われ、埴輪端部に敷石帯を検出し、朝顔型円筒埴輪片や鉄斧などが出土した。昭和51年に農道整備事業に先立って確認調査が行われたのが天神1号墳である。東西約30m、南北約35m、高さ約3mの方形の埴輪側面に葺石を敷く。トレンチを数カ所設定しただけの確認調査であるが、5世紀中葉の家形埴輪や椅子形埴輪などを出土した。このように中期以降から古墳が確認されているが、それ以前の前期古墳は発見されていない。

後期古墳は、小規模な積石塚古墳が主となる。八木沢川流域では日滝原古墳群が形成され、7世紀初頭の主頭太刀や馬具を出土した本郷大塚古墳や行人塚古墳、立石塚古墳(通称:境塚古墳)が残存する。また松川流域には現存する古墳は希薄であるものの、松川古墳群が確認されている。

他方、現在までにこれらの古墳の被葬者の支配下にあった集落跡は検出されていない。数少ない古墳以外の遺構としては小河原遺跡群で堅穴住居跡が検出されているだけである(長野県立歴史館2002)。集落跡ではないが、国道403号拡幅改良に伴う井上幸高遺跡群の調査では、古墳時代の祭祀場(河川左岸における水辺の祭祀カ)と思われる遺跡の発掘調査を行った。甕甕類の他に赤彩された高杯、土玉や器台なども出土しており、近隣にこの祭祀に関わった人達とその居住域(集落)が推測される。

奈良・平安時代(古代)になると、市域に関する文献史料も散見し、その様相が多少は明らかになるとともに、遺跡の数も増加する。まず文献史料では、10世紀に成立した『和名類聚抄』に市内に比定される2つの郷名が記載される。周知の通り、市域は信濃国高井郡に所属していたが、その内の「稲向郷」が大字日野付付近、「日野郷」が大字日野付付近に比定されている(須坂市史編纂委員会1981)。同じく10世紀代の『延喜式』神名帳には郡内にあった6つの式内社が記載され、その内2つの延喜式内社が、墨坂神社と小坂神社に比定されている。特に墨坂神社に関しては、『新抄格勅符抄』という史料の天応元(781)年十月十四日条にも記載が見出され、8世紀後半～末には所在していた可能性が高い。この高井郡に関する資料として藤原宮出土木簡に「高井郡大黄ノ十五斤」と書かれた荷札木簡が出土しており、郡の成立が7世紀末から8世紀初頭にさかのぼることが確実である。

一方、この時期の遺跡は扇状地の扇端部を中心として展開する。一例が小河原遺跡群や塩川・須坂・小山遺跡群(19)であり、井上・幸高遺跡群(30)もこれに該当する。中でも特筆されるのが小河原遺跡群内にある左願寺跡(2)である。元々、この付近は土器片が出土する地点として知られており、過去には試掘調査が行われている。調査の結果、平瓦や軒丸瓦片が出土し、寺院跡か官衙跡かと推定されてきた(原田和彦2007)。重弧文を基調とする軒丸瓦片から7世紀後半ごろの創建とされている。なお、遺跡の西端付近では金銅製の小仏像なども検出されている(個人蔵)。近年、隣接する県道新田春木線の改良工事に伴って発掘調査が継続しており、重弧文の軒丸瓦片が出土した。左願寺跡からは約200mほど離れた地点でも円面硯の破片が出土し、寺院などの可能性は確実に高まっている。なお、発掘調査では左願寺跡に隣接する地点で周辺域において、9・10世紀代の堅穴住居跡や焼失家屋と考えられる遺構などが検出されているので、左願寺跡に関連する集落跡も明らかになりつつある。他にも平成23年度に市道改良に伴う発掘調査では、7世紀代の可能性のある遺構(住居跡カ)が検

出され、塚部付近の集落とその開発が、左願寺跡創建期と同じ頃まで遡る可能性も見出されつつある（須坂市史編纂委員会 1981、原田和彦 2007）。

他にも寺院・官衙に関連して、市域の中心部に近い八幡地区に長者屋敷伝説が残っており、これを示唆するかのように平瓦が出土している。また、市役所北側の金井原遺跡（19-6）内でも円面硯が出土している。これらの他に、上述した八幡地区の墨坂神社南前の発掘調査では、石組みカマドをもつ竪穴住居跡が検出された。この調査で見出された縄文晩期の遺物はこの地域の歴史の始まりに関連し、竪穴住居跡は墨坂神社が史料上の初見時期とも近いと見られ、その関係性が注目される。

古代の集落跡は小河原遺跡群や八幡地区以外にも市内の各地で確認されつつある。その中でも仁礼地区の道祖神原遺跡の調査では、山地に隣接する標高の高い地点であるにもかかわらず、古代の石組みカマドの竪穴住居跡が検出された（須坂市教委 2014）。遺物の中には土器片の他に、硯に転用された灰釉陶器の皿片なども出土し注目される。高い標高から推測するに、当時は現在よりも生活環境が厳しかったと思われるが、平野部と同じような生活・住環境にあったことが推測される。

古代集落については他に国道 403 号北側に伴う井上幸高遺跡群の発掘調査で古代の竪穴住居跡の他に隣接して1間×2間以上の掘立柱建物も確認された。これら住居跡は地表下約2mから検出されており、竪穴住居跡の壁付近には礫石が溜まっているのが断面観察から確認され、その裏側に洪水が大きく関わったとみられる。この付近の遺跡が大量の洪水堆積土層に被覆されている可能性も見出された。鮎川と百々川に挟まれ古代の稲向郷の推定地でもある米持遺跡（29）においても、須恵器・土師器片の出土が確認される。最近の調査では掘立柱建物の可能性がある柱穴列や竪穴住居跡と思われる落ち込みなども検出されている。こうした調査成果から、現在では2つの河川に挟まれる地理環境にあるが、古代では一つの大きな集落群を形成していた可能性が考えられる。その祭神（村社）としての式内・小坂神社との関係なども想起される。この他に千曲川の自然堤防上の東畑遺跡をはじめ各遺跡では平安時代の土器とともに灰釉陶器なども共存している。

このように、古代の集落遺跡は扇状地頂部を中心に市内に分布する。集落に係る祭祀・祭礼を式内社など近隣の神社などで行っていた様子が窺取される。その一方で、円面硯やなど寺院や官衙を示唆する遺物も散見し、高井郡内でも一つの中心地を展開していた歴史が明らかになりつつある。

北信濃中世史の黎明は平安時代の後半、国司として下向したと思われる井上（源）満実が、井上地域に土着したことから始まり、井上氏とその支族を中心に展開してゆく。米持・村山・須田・高梨氏などが須坂市内に関わる代表的な一族であり、各氏族の根拠地が、そのまま現在では小字名（地名）として遺存する。こうした地方武士成長の背景には、伝統的に古代から高井郡は、名馬の産地として知られたことがあるのかもしれない。『延喜式』には信濃十六牧の一つとして高井牧が記載されている。馬は軍事物資としても農耕・開発の原動力としても、重要な資産であり、馬の特産化が須高地区の経済力の一つであり、政治的に有力化する要因の一つであった可能性が推測されている（ふるさと須坂歴史と文化財編纂委員会 1988）。

これらの氏族の一部は、鎌倉幕府の成立過程といえる治承・寿永の乱に関わり、村山七郎・高梨次郎などの名が史料に見出せる。1221年（承久元）の承久の乱後までに、鎌倉幕府の御家人となり、畿内周辺に地頭職を恩賞として賜って井上一族が西国に発展する基盤を形成した。これら井上氏を中心とする北信濃の源氏は高井源氏を称す。彼らが公領を基盤としていたことから、北信を統治するための国府出先機関として、後方が置かれたとされている。彼らは、北信公領の有力領主として在庁し、徴税などの国務の一端を担ったと考えられている（ふるさと須坂歴史と文化財編纂委員会 1988）。その後、南北朝期には市内で実際に武士の戦闘が行われ、1350年（観応元）6月に野辺原の戦い、9月に米子城で戦闘があった。南北朝の動乱後、高梨氏は北進をはじめ、井上

氏は水内郡の旧領を回復するとともに、須田氏は須田郷・大岩郷を固めて室町・戦国期に発展していった。

市内における中世の遺跡で、唯一調査されたのが井上氏居館跡である（須坂市教委 2004）。堀と思われる遺構の一部が検出された。井上氏に関連すると思われる中世の遺物が平成 23・24 年度の国道 403 号拡幅に伴う井上幸高遺跡群の発掘調査でも出土している。輸入鉄や青磁・白磁片など舶来品の他、カワラケ・在地系珠洲焼のすり鉢片などである。特に、古瀬戸の天目茶碗片は注目される。流通量が少ない時期の古瀬戸のため、寺院など有力者が介在しないと入手困難であったと推測され、井上氏や宝積寺といった有力者の存在を暗示する。また、武士や僧侶など一定階級以上でなければ嗜まない、喫茶（茶道）慣行を行っていたことを示す上でも重要である。他には、墨坂神社西隣における発掘調査でも瀬戸焼の瓶が出土しており、これと同時期の人骨も稀少な資料である。山城としては、城の基城跡・竹の城跡の他に井上氏の大城・小城などが点在し、郭や空堀といった遺構が確認される。中世の遺跡・包蔵地は確認されているものの、調査までは至らず、考古学的な観点からこの時代の様相は不明な点が多い。

戦国期に入ると、国衙領・須田郷の開発領主とされている須田家が、1485 年（文明 17）、須田惣領家である須田信頼系と満園系の大岩須田氏に分家する。臥竜山南峰の須田城は須田惣領家の城館跡に比定され、福島自然堤防上には須田惣領家の居館とされる福島城跡がある。この後、1598 年（慶長 3）上杉景勝の会津移封に伴い、大岩須田氏も会津に移住する。太閤検地後には、市域の大半が海津城主田丸氏領となり、一部が蔵入地となった。1615 年（元和元）堀直重が須坂藩主となり、須坂藩が成立し、明治まで藩による支配が継続する。

### 第三章 工業棟 本調査

#### 1 調査の概要

試掘結果を踏まえ遺跡が残存する可能性が推測されたことや、第IV章で報告する温室建て替えに伴う緊急調査でも一定の遺物の出土をみたことから、新校舎（工業棟）予定地の遺跡内容を明らかにする目的で発掘調査を行った。調査期間は学校が夏季休業となる平成25年7月12日～10月15日である。

第II章で詳述した通り、既存の温室（ガラスハウス）のため試掘調査が及ばなかった地点に対して、本調査に先行して平成25年5月の解体時に立会調査を行った。調査結果は以下の通りである。

古代と思われる土器片が調査対象地の工業棟の西半分の範囲で出土した。ただし、遺物の出土状況は良好なものも少なく、カク乱内から出土したものも少なくない。例えば、配管や温室基礎の下に入り込んだ遺物である。他に本来の土層内から出土したものもあるが、解体にともなう掘削により詳細な出土状況が不明となったものである。こうした遺物の出土によって遺跡が残っている可能性が見出されたため、本調査の対象範囲のままとした。

しかしながら本調査の結果、予想以上に大きく攪乱されていたため、ほとんど成果は見られなかった。当該範囲内の本調査における遺物量も極めて少なく、土層もかなり痛められていた。遺構も見出すことはできなかった。通常の人力掘削による掘削・精査にもかかわらず、大きなカク乱範囲が2カ所検出されたに過ぎない。よって、本調査を行った西半分は遺跡に関する所見を得ることは困難であった。

本発掘調査に先行して重機（0.45級バックホー）にて表土剥ぎを行い、掘削した残土は仮置き場を校内に確保できないため、すべて搬出した。その終了後に世界測地系に従って、調査区内にグリッド設定を行った。調査区中央部に国家座標 $X=72400$ 、 $Y=17400$ の交点が位置するため、これを基準にグリッドの設定を行った。すなわち、この点から東西南北の各方向に約10m四方を大グリッドとし、この大グリッド内を2m間隔で5等分、25マスに分割した。この2m四方を小グリッドとして設定した。

大グリッドの名称は上述した国家座標の交点を基準に、東西と南北の方向と、距離に応じて数字で表記をした（図版2、参照）。具体的にはN1S1、N1S2などである。小グリッドの記載は、大グリッドの後に「-」をはさんで、小グリッドのナンバーを記入した。出土遺物は、集中出土でない限り、小グリッドで取り上げた。

試掘調査によって、予見された中央部分のカク乱を挟んで、東側の調査区は、層厚が厚くないものの遺物包含層V層が残り、遺物の出土が見られた。それでも建物以前の痕状のカク乱が散在し、良好とはいえない部分もある。こうした状況もあって、検出された遺構は、大きな土埃（SK4）が1基と性格不明の溝状の落ち込みが4基だけである。遺物の集中的な検出（SQ1）も1カ所だけである。また、V層以下地山までの土層堆積観察用東西ベルトにより、歪曲する自然流路（SD8）が最下層に検出された。この流路跡からの出土遺物は多くないため、流路跡については部分的な掘削に止めた。その埋没覆土内に遺構（SX2など）が掘削されていることも判明した。

包含層V層自体がカク乱・削平されていたため、調査区全体でも出土遺物は多いとはいえない。出土遺物の総量は1,001点約9.0kgである。上述した調査区内の国家座標（ $X=72400$ 、 $Y=17400$ ）交点を基準に東西を分割すると、東側で古代の土師器片488点2,887g、須恵器片103点1,481g、黒色土器36点183g、灰軸陶器9点55g、中近世陶磁器片25点80g、弥生土器8点73g、その他48点940g、合計717点5,699gである。一方、カク乱が著しい西区では古代の土師器片201点1,621g、須恵器片45点1,229g、黒色土器19点192g、中近世陶磁器片10点105g、その他9点229g、合計284点3,376gである。上記のガラスハウス解体立会調査の結果を反映してか東区は点数で西区の約3倍、重量で約2倍となっている。整理調査によって出土遺物の接

合・復元作業を行ったところ、器形復元できた遺物は少なく、掲載できるものは9点にとどまった。

時期的には奈良平安時代の遺物に集中する傾向が見られ、須恵器片よりも土師器片が多い状況からは、平安期が主体の可能性が高い。他の時期の土器片などが少なからず混入するが、本校の校庭遺跡で著明な弥生中～後期の土器片はほとんど見出せなかった。

なお、遺物の時期決定について、古代に関しては鳥羽英雄氏の量代編年に従った（鳥羽英雄 1999）。中世の遺物については器種ごとに各々本文中に記した。

## 2 土層堆積状況

上記の通り、調査区の中央部には以前の校舎に関する廃棄物を埋納したカク乱が確認され、西区も温室（ガラスハウス）解体に伴うカク乱のため、土層の記録をとることはむづかしい。それ故、土層に関する調査も主に東区に限って、調査区の壁面で確認することとした。

東壁と北壁を中心に基本層序を確定したのが、以下の通りである。なお、試掘調査時の分層とは若干異なる部分もある。

### 《基本層序》

- I層 表土
- II層 盛土・客土・碎石
- III層 暗褐色～茶褐色砂質土
- IV層 暗褐色～灰黄・黄褐色砂質土（所々礫混じり）
- IV'層 灰黒色砂質土（礫混じり）
- V層 黒灰褐色砂質土〔古代の遺物包含層〕
- V'層 灰黒～灰黄色砂礫層〔漸移層〕
- VI層 黄褐色砂礫層

試掘においても調査区東側の4Trでは、カク乱土層が深い深度まで入り込んでおり、元々の土層の残存状況が良好ではなかったが、本調査でもそれが確認された。すなわち、北壁や東壁、南壁では包含層直上までカク乱土層が入り込む。

追加調査となった渡り廊下部分でも土層の堆積状況は、工業棟本調査と同様である。また、ここでも以前の建物基礎に伴うカク乱が深くまで入り込む。渡り廊下に限らず工業棟でも土層の残存状況が良好な場合にはIV層暗褐色～灰黄褐色砂質土砂質土が見られる。

## 3 検出遺構

### S01

調査区東側のS1E1-6・7・11・12グリッドにかけて検出した唯一の遺物の集中出土である。検出土層はV層に相当するが、橙褐色から赤褐色を呈すマンガン混じりの鉄分を多く含む。精査の結果、これに伴う掘込や落ち込みは検出されなかった。付近には準大や人頭大程度の大きな礫石が散布しており、これに止められるように土器片が出土した可能性もあるように思われる。遺物は上下に分かれて2度取り上げたが、1個体が潰れたようなものではなく、上下ともに散在状況である。

出土遺物は土師器片を主体とし、この破片が26点25g、内面黒色処理の土師器片が2点6gである。この他に須恵器片3点28gが出土している。

土師器片はいずれも土師器壺の体部片である。一定の接合は行ったが、時期などが判明できるほどは復元に至らず、詳細を明らかにできない。それ故掲載に至っていない。他の遺物は破片資料ばかりで掲載できる遺物はない。出土状況や遺物の内容を考慮した上で、南東には自然流路跡と思われる土層が堆積断面で確認されていることや接合・復元が十分にできない出土状況も考え合わせて、河川による二次堆積遺物の可能性が推測される。

#### SK2

S1E1-23・24 グリッドで検出した長楕円形の土坑である。VI層黄褐色砂層を確認面として検出した。長径約298 cm短径約119 cm深度約39 cmである。長軸方向を若干北方向に振り、北へ約14°傾くが、ほぼ東西方向に長い。断面観察から覆土は4層で構成され、砂質土を中心とする覆土形成である。断面形状は台形状に近く、ほぼレンズ状の自然堆積(A)と判じられる。なお、この遺構も後述する自然流路跡(SD8)の埋没土を地山として構築されている。

この遺構から出土した遺物は、10点116 gである。土師器の小片が8点48 gと、須恵器片2点66 gが出土している。小破片が主体で、時期や器種が判明する遺物はない。ただ、これらの出土遺物から古代に構築された遺構の可能性が見出せる。

付近には同じような法量の土坑が検出されたが、それらとの関係や土坑の性格や使用目的等に関して不明である。

#### SK3

S1E1-7～9 グリッドで検出した溝状の長楕円形土坑である。VI層黄褐色砂層で検出した。長径約483 cm短径約139 cm深度約42 cmである。長軸方向は東西方向であるが、南に32°ほど振れる。SK2とは約5～6 m離れるが、長軸方向はほぼ同じである。断面観察から覆土は3層で構成され、砂質土を中心とする覆土もSK2と類似する。断面形状は不整形に近いが弧状の断面形をベースとする。覆土の堆積状況は、レンズ状の自然堆積(A)に近く、この遺構も後述する自然流路跡の埋没土を地山として構築されている。

出土した遺物は、土師器の小片が1点2 gが出土したのみである。出土遺物が乏しく時期を詳しく決定することは困難であるが、出土遺物やSK2との類似性などから古代に構築された可能性は推測される。ただし、遺構の詳しい性格については不明である。

#### SK4・SC6

N1E1-21 グリッドとS1E1-1・2・6 グリッドにわたって検出した。遺構の西半分は調査区中央のカク乱によって壊されている。検出(残存)した平面形態は不整形な半円形に近い。遺構検出面はVI層黄褐色砂層である。検出した範囲内での法量は、長径約446 cm短径約307 cm深度約37 cmである。断面観察から覆土は7層で構成されるが、主な埋没土は4層で埋没していた。主たる覆土はIII層に相当すると考えられる暗褐色砂質土で埋没土の上半部を構成する。下半にはIV層黒灰褐色砂質土と地山VI層黄褐色砂層が混じった土層が漸移層的に堆積する。覆土の堆積状況は自然堆積であるが、一部水平堆積を含み分類上(E)に近い。断面形状は皿状近く、緩やかな立ち上りである。

この遺構の南半部の最下層付近に炭化物の集中検出が見られた。これがSC6で、遺構平面図中にトーンをかけて図示した部分である。長径112 cm短径58 cmの不整形な形状で検出され、炭化物の厚さは約1～3 cmである。周辺に焼土を考えさせる赤褐色土はなかったので焼成に伴うものとは考えがたい。この炭化物集中域からの遺物もなく、その性格は不明であるが、植物遺体等が炭化した可能性が推察される。

SK4から出土した遺物の総数量は19点166 gである。土師器片が13点76 g、須恵器片6点90 gが出土した。小破片ばかりで、時期や器種が判明する遺物がなかったため、掲載できた遺物はない。ただ、出土遺物の内容が

ら古代に構築された可能性があり、さらにいえば、黒色処理された土器が見られないので、古代でも早い段階の可能性はある。なお、詳細な遺構の性格に関しては明らかにできていない。

#### SK5

S1E1-21、S2E1-1、S2W1-5グリッドで検出した溝状を呈する長楕円形の土坑である。VI層黄褐色砂層で検出し、法量は長径約 334 cm短径約 107 cm深度約 24cm である。長軸方向は南北方向だが、東へ21° 振れる。後述する SK7や SX2 とはほぼ直交する長軸方向である。しかし、SK7と切合関係をもつまで延伸していない。断面観察から覆土は2層で構成されるが、ほぼ暗茶灰褐色砂質土を主体とする単層埋没でその堆積状況は(C)と見なされる自然堆積である。断面形状は台形である。検出位置は試掘 4 Tr 付近にあたり、このトレンチで検出した溝状の落ち込みはこの遺構に当たると推測される。

この遺構から出土した遺物は、総量で6点55gである。土師器片が4点12gと須恵器片2点43gが出土した。小破片が主体で、時期や器種が判明する遺物はない。出土遺物の撮相からは、他の遺構と同様に古代に構築された遺構の可能性が推測される。

#### SK7

S2W1-3～5グリッドで検出した溝状の土坑である。VI層黄褐色砂質土で検出し、長径約 522 cm短径約 57 cm深度約 24cm を測る。長軸方向をほぼ東西方向に取り、北へ27° 振る。上述のとおり、SK5とほぼ直交する長軸方向である。断面観察から覆土の形状は台形状で、2層で構成される。IV層相当の暗茶褐色砂質土を主体とする単層の一括埋没(C)と思われ、自然堆積か人為堆積かは判別しがたい状況である。

この遺構から出土した遺物はなく、遺構の時期や性格は不明である。

#### SDB

S2E1の東端から蛇行して S1E1、S2W1 方向にわたって検出された自然流路である。流路の全幅を確認できる地点がなく、その法量は不明である。調査区外まで川幅が延長していた可能性が高い。おそらく、旧地形等もあわせて考慮するに本来は北西方向に流れ下っていたと考えられる。遺構精査等によって遺構の平面形状を確認することはできなかったが、東西ベルトの断面観察で落ち込みを確認した。緩やかな底面の傾きをもつ遺構であり、出土遺物が極めて少ないため、覆土を全掘することなく、S2E1グリッドを中心に覆土を掘削し、遺物の包含状況を確認した。

検出面はVI層黄褐色砂礫層で、深度は約 15～70cm である。覆土は4層で構成された自然堆積である。砂質土を主体とするため、水成堆積の可能性を推測した。

出土遺物として確実に流路内から出土した遺物はない。検出状況から流路の底部に近い深度約 10～60 cm であったため、このレベルで出土した遺物は確実な遺構内遺物であるが、検出できなかった。土層堆積でも言及したように、これにより上層部はカク乱が深く入り込んでいるため、遺物はほとんど見出せなかった。

遺物があつたとしても既に耕作等により覆掩された可能性があり、流路の時期などを詳細には明らかにすることは困難である。

## 4 出土遺物

工業棟の本調査で出土した遺物の中で掲載できるものを以下にまとめた。土器類を主体とし、金属類では鉄貨が1枚だけ出土した。保存処理の都合のため、金属器に関しては後日、別に報告したい。他に黒曜石と思われる石礫1点が出土したが、遺構外のため掲載していない。また、動物遺体として獣骨が検出されたが、園芸高校内では以前に豚を飼育していたので、これに関連する可能性があり、深く考察に及んでいない。

接合の結果、掲載できたものは以下の9点である。カク乱が深く入り込むことや、遺構内からのまとまった出土がなかったため、掲載できた遺物は少ない。大半の遺物が包含層と思われるIV層黒灰褐砂質から出土し、古代以前の遺物が主に出土している。包含層の上層からは中世以前の遺物も見出されたので、ここでまとめて、報告しておきたい。

№1は、N1E1-21グリッドのV層で出土した弥生土器（箱清水式）の壺片である。おそらく、頸部付近の破片と思われる。器面外面には、櫛描波状文が見られ、内面にはハケ目調整とヨコ方向のミガキが確認される。詳しい時期は明らかにできないが、櫛描文から弥生後期であることは確実である。

№2は、S1E1-15グリッドのIV層で出土した須恵器杯Aの底部小片である。底部回転糸切を採用し、焼成が不良であることを考慮すると、古代7～8期（9世紀中葉～後半）ごろの土器片でないかと推測される。

№3は、N1E1-21グリッドのV層で出土した須恵器杯Aの底部小片である。色調は灰色を呈し焼成は良好である。底部回転糸切以外に調整・耀年上の特徴は看取できない。古代5期（8世紀末～9世紀初頭）以降であり、焼成からいえば古代7期以前の可能性が高い。

№4は、S2E1-2グリッドの南北ベルト内のV層で出土した須恵器杯Aの底部小片である。№2・3と同様に、底部しか破片がないため、詳細は不明である。

№5は、S1E1-20グリッドのV層で出土した手づくね土師皿の小片である。体部に手づくねが確認され、段ナデ成形が行われている。佐々木耀年に従うと、12～13世紀前半のものと判じられる（佐々木満 2005）。

№6は、S1E1-20グリッドのV層で出土した山茶碗の底部小片である。胎土から東濃型山茶碗と考えられる。藤澤良祐耀年によると、9型式～10型式に相当し、14世紀第2四半期～15世紀第2四半期ごろと考えられる（藤澤良祐 2008）。

№7は、S1E1-17グリッドのV層で出土した珠洲焼のすり鉢底部片である。海面骨針など海成物質の混入が看取される。よって、北信地域で模倣品として製作された製品とは考え難く、珠洲で焼成された製品の可能性が高い。内面の磨耗は著しく一定期間の使用痕跡が認められる。吉岡康暢耀年、珠洲焼Ⅲ・Ⅳ期（13世紀中葉～14世紀第3四半期ごろ）と推測される（吉岡康暢 1995）。

№8は、S2E1-1グリッドのV層で出土した瓦質土器のすり鉢片である。器面内外面にクロコナゲ調整が見取れる以外には、外面にヘラケズリ調整が確認される。小片のため時期は不明である。

№9は、N1E1-21グリッドのV層で出土した珠洲焼の壺片である。器面外面には珠洲焼壺の特徴的な平行タキ目が確認される。内面にはそれに伴うと思われる当て具痕が確認される。小片のため、時期は不明である。

## 5 渡り廊下部分 本調査

当初、発掘調査対象地には含まれていなかったが、本調査の協議に伴って新校舎（工業棟）と第一農場本館を結ぶ渡り廊下に関係する工事が明らかとなった。工事内容を確認したところ、既にある渡り廊下を農業科棟の北側から枝分かれさせ、新校舎へ到達させる幅約2m全長約55mの工事である。廊下の下には配線施設を埋納するため、深さ約1.5mまで掘削する。この深度で工事を行った場合、保護層を確保することが困難だけでなく、遺物包含層（V層）も一部掘削する可能性が高かったため、協議の結果、緊急で本調査を行うこととし、工業棟の本調査終了直前に実施することとなった。ただし、調査対象範囲内には一部植栽（竹や杉木2本など）があり、調査終了後でないといこれを伐採・移植できないため、この部分は調査対象から除外した。それ故、杉木2本を挟んで調査区を東区と西区に分割することとした。

発掘調査は、10月5日（土）～13日（日）まで9日間行った。0.1級重機（バックホー）で表土を除去・搬



出後、人力等でV層包含層を掘削・精査して遺構の有無を調査した。調査を開始すると直後に、既存の第一農場本館の建物に沿って雨水排水管などが埋設されていることが判明し、調査範囲が概ね半減した。こうした埋設物もあり、トレンチ状の非常に狭い範囲の調査である（図版18参照）。

調査の結果、出土遺物の総量は12点116gである。その内容は土師器片8点87g、須恵器片4点29gである。出土地区で分けると、東区が土師器片3点18g、須恵器片1点4gあり、西区は土師器片5点74g、土師器片3点25gである。この他に陶磁器片も見られたが、土層の上半部にあるカク乱層から落下等をしたものと判断した。狭小な範囲に対して一定量の出土遺物を確保したと思われるが、いずれも小破片のため、掲載する遺物はなかった。

東区・西区ともに壁面は第一農場本館南側の調査区の建築により土層の堆積状況を喪失しているため、元々の土層堆積が残存する北側壁面で土層観察を行った。工業棟の土層堆積と同様に、上半では校舎改築などに伴うと思われるカク乱が著しく、本来の土層を失っていた。下半分には工業棟の遺物包含層に対応すると思われるV層黒灰褐色砂質土が安定的に確認できた。遺物もこの土層からの出土遺物である。その下にあるVI層黄褐色砂質土を確認面とし、遺構精査を行ったが、明確な遺構は検出されていない。

ただ、東区の東端部では地山VI層が落込む状況が検出された。北壁の断面観察でもそれが確認され落込むことは確実であるが、掘削幅が狭小なため、遺構であるかは判断できず、落ち込みの性格も不明である。

渡り廊下は第一農場本館の西端にて、工業棟へ向け屈曲する。曲がった南側においても表土を除去し、発掘調査を試みたが、以前にあったと思われる校舎のコンクリート基礎が地表下約25cmで検出された。これが廊下予定地外にも延伸するため、これを除去することは不可能と判断し、調査を中断した。

このようにやむを得ない状況で本調査を実施できなかったため、工事時に立会調査にて記録を試みたものの、既に旧建物基礎はVI層砂礫層（基盤層）以下にまで入り込んでおり、結果的には立会調査でも良好な記録を取ることはできなかった。もちろん、西区南端部付近からの出土遺物はない。

## 第四章 温室緊急調査

### 1 調査の概要

試掘調査とその後の協議の結果に従って、平成28年11月下旬に新しく移転する温室（ガラスハウス）の基礎工事の掘削にともない立会調査を行った。ところが、まもなく温室2の東側側壁面中央部付近において、赤灰白色土の中から土師器壺1個体が出土した。カマドとそれをもつ住居跡の可能性が推測されたため、緊急に須坂土建(株)や伊藤設計事務所など建築に関わる工事業者と協議を行い、今後の調査・取り扱いについて決定した。出土した土師器壺の周辺に住居跡が残存する可能性を考慮して、従来の方針を変更することとなった。すなわち、12月20日までの期限として、温室1～4と作業小屋の建築に伴って掘削するすべての範囲を対象に緊急で本調査を実施することとなった。

温室の基礎部分となる掘削が幅約80cmで一辺が約10m四方の溝状による狭小な範囲であったため、緊急調査の範囲内では明確な遺構は検出されなかった。後述する土層観察の結果や一定量遺物が出土したことを踏まえて、調査地点が集落跡のような環境にあったとは考えがたく、土器を中心に遺物が集積し包蔵地する地点であったと推測される。調査面積が少ないにもかかわらず、後述するように遺物は一定のまとまりをもって出土したので、これを中心に報告を行いたい。

掲載した主要な遺物は、磨滅をほとんど見出すことなく、むしろ、接合すると一定の形状に復元できるほど残存率が良い。これら器形を残存する遺物の出土状況も考慮すると、仮に二次堆積遺物としても供給源となった遺跡（集落跡力）はそれほど遠方とは考えがたい。遺物に損傷が少ない出土状況や、VI層基盤礫層に流路と思われる落ち込みが確認できることなどを考えあわせて、自然流路の岸辺付近が調査地点と推察される。

なお、この緊急調査で出土した遺物の総量は713点約19.8kgで、種別によれば、須恵器片147点4,627g、土師器片472点約13.7kg、内面黒色処理片86点1,660gである。他に灰釉陶磁器片1点29g、中・近世陶磁器片6点28g、弥生土器片1点39gである。この中で、集中検出された遺物を中心にその内容を報告しておきたい。

なお、古代の遺物の時期決定については、第三章工業棟本調査と同様に、鳥羽英雄氏の墨代編年に従った（鳥羽英雄1999）。

### 2 土層堆積状況

温室基礎工事（調査地点）はそれぞれの建物の基礎工事が近接して掘削するため、すべての土層を観察・記録するのではなく、各温室の東壁と南壁を主たる対象として記録した。この2面を選出した理由は西壁に比べ東壁側の方が遺物の出土状況が良好な上、土層も削平が少なく、よく残っているためである。また、東壁で土層の南北方向を揃えて連続的に記録・報告し、直交する南壁で東西方向を記録するためである。これにより、層状地上の南北方向の地形傾斜とその土層堆積状況、及び直交方向の襟相も明らかにできると考えたためでもある。

#### 《基本層序》

- I層 表土
- II層 暗茶褐色土
- III層 暗褐色土
- IV層 褐色～黄褐色砂層もしくは礫層（所々礫混じり）
- IV層 暗黄褐色小礫層

#### V層 黒灰褐色砂質土〔古代の遺物包含層〕

#### VI層 黄褐色砂礫層

緊急調査における温室移転予定地の土層の堆積状況は、砂質土と粘質土を主体として構成されている。ただし、試掘時に確認できたI層表土(耕作土)や現地表面は緊急調査以前に削平されたため、部分的にしか残ってなく、一部しか固化・記録はできていない。さらにその下層にあって耕作などでかく乱されていたII層暗茶褐色土も同じく削平され、同様の状況である。

安定的に検出され記録できたのはIII層暗褐色土からである。この土層が形成された要因や状況などは明らかに出来なかった。しかしながら、温室3で古代以降の流路跡が埋没した後にこの土層が堆積しているので、I・II層と同様に時代が下って形成された可能性が推察される。

IV層黄褐色砂層は一部に準大の礫石が混入する。これが混入するのに必要な条件と細砂を主体とする土質も合せて考慮し、水成堆積による可能性が高く、河川堆積土層と判断した。

その下層にあるV層黒灰褐色砂質土が古代の遺物を保有・検出した土層である。一部粘質土が混入する。V層以下基盤層と思われるVI層までの堆積は南側(森上小側)の方が浅く、現地表下約80cmで到達する。逆に、北側(校舎側)に行くほどV層以下の堆積状況が厚くなり、それが温室1に遺物集積域が多くなった一因となっている可能性もある。

最下層として確認された礫層がVI層黄褐色砂礫層である。試掘調査時にこれ以下の土層を部分的に深掘した調査結果も参考として現状地基盤層と見なした。

上述の通り土質的に砂質土と粘質土が主体であったことや、温室3の東・南壁セクションで定期的に新しくなる可能性があるものの流路跡が確認され、こうしたものが流れやすい地形であったことも考慮して、水を伴う堆積状況を考える方が妥当と思われる。よって、出土遺物は水成堆積に伴って搬入した二次堆積遺物の可能性が考えられる。ただ、土層内に多くの礫石を含まないことから激しい水流による土層形成を想定することはむづかしく、粒子の小さい粘土質や細砂とも言いうる砂質土で土層が構成されていることはその堆積状況が緩やかな水勢の中で形成された可能性を示唆するものと推測される。

### 3 検出遺構と出土遺物

#### 温室1 S01

調査地点の北東隅のIV層下層付近で検出した。精査と壁面の土層観察の結果、これに伴う掘込や落ち込みは検出されなかった。周辺にあった準大から人頭大を超えるような大きな礫石とともに、これに引掛かるように土器片が集中的に出土したものである。上下に分かれて2度にわたり、取上げを行った。1個体が壊れたようなものではなく、2回ともに散発的な出土状況である。周辺土層が砂質土であり、基盤礫層の直上に近いことも考慮して、上述したように河川による二次堆積遺物の可能性が推測される。

出土遺物の総量は41点3,312gで土器器片を主体とする。内訳は土師器32点3,044g、黒色土器4点195g、須恵器5点73gである。これらの中で、接合・復元により時期等が判明した遺物7点を掲載し、詳述する。

№10は上層(1回目)で出土した破片3点が主体となり接合した土師器無台杯である。全体的に歪みが顕著な杯で大ききからAⅡ類に分類されるものである。底部回転糸切痕がわずかに残る。口径13cm、器高4cmを超え、AⅡの中でも大型の器形に注目すれば、特に古代8期後半(9世紀末)近くの可能性が考えられる。

№11は、下層(2回目)で出土した破片2点が主体となり接合した黒色土器Aである。口径が15cmを超えるので杯Aの中でもAⅠ類に分類される土器である。内面のミガキ調整は丁寧に行われているが、ミガキの方

向は判然としない。光沢も口縁部付近には良好に残るが、底部付近は確認しがたい。黒色土器杯 A の 7 期以前にみられる底部や腰部のヘラケズリ調整が見られないので、糸切無調整が多くなる古代 7 期後半～8 期前半（9 世紀後半）の可能性が高い。

№12 は、下層（2 回目）で出土した須恵器杯 B の破片である。小破片のため言及できる特徴は少ないが、高台に関しては外端接地を採用しながらも高台底面に窪みが見られない。他に底部ヘラ切りが採用されていると思われることなどから古代 5 期（8 世紀末～9 世紀前葉）以降の可能性が高い。上半を欠損し、口径等が明らかでないため、これ以上の詳細な時期については不明である。

№13 は、下層（2 回目）で出土した土師器壺 I（砲弾型）の破片である。器面外面は口縁部から頸部までがロクロナデ調整、肩部以下にはヘラケズリ調整がロクロナデ後に行われる。口縁部には面取り調整が確認できるので壺 I の中でも B タイプに該当する。本報告の中では土師器壺 I は面取りがない A タイプが多いので、数少ない B タイプの例である。外面のヘラケズリ調整は底部から口縁部方向に施されやや長く、頸部直下まで及んでいる。内面のハケ目も口縁部まで行われているのが特徴的である。口縁部の外反がある程度認められ、肩部が大きく張り出すことなく体部への真っ直ぐ下行する器形などからも古代 5～6 期（8 世紀末～9 世紀前半）が適当な時期と考えられる。暦代編年上、壺 I B タイプの盛期が古代 5～6 期にあるのと整合する可能性も推測される。

№14 は、下層（2 回目）で出土した破片である。外面をロクロナデ調整後にヘラケズリ調整を行う土師器壺 I で、口縁部が「く」形に外反するものの面取りのない A タイプである。内面調整は№13 と同じく口縁部からハケ目調整が行われる。口縁部がやや直立する傾向にあるので、時期が少し新しくなり古代 7・8 期の可能性が推測される。特記しておきたいのは№15 と共存しているのも、この土器と同じ時期と考え得る。

№15 は№14 と共存し、下層（2 回目）で出土した破片である。土師器壺 I に相当し、他の壺 I と同様にヘラケズリ調整が肩部の直下付近まで施されている。内面のヨコハケ目調整が、口縁部まで施されている点も、他の壺 I と共通する。ただ、№13・14 の土師器壺 I が下から上（底部→口縁部）にヘラケズリを行うのに対して、この壺は上から下（口縁部→底部）に向けて行う。また、内面の下半がヨコハケ目調整後にタテ方向のハケ目調整を行っていることももう一つの相違点である。土器の時期は口縁部がやや直立しつつあり、肩部の張りや全体的に丸味が少なく、体部へ真っ直ぐ垂下する器形から古代 7～8 期（9 世紀中葉～末葉）ごろと見なされる。

№16 は、下層（2 回目）で出土した土師器壺の口縁部片である。口縁部に面取り調整が確認され、壺 I の B タイプと考え得る。ただし、面取りの中に窪みが見られ、他の B タイプには見られない特長といえる。小破片のため、器形に関しては不明である。口縁部が直立気味で口縁部外面に膨らんでいることから暦代編年の、古代 8 期（9 世紀後半～末）ごろの可能性が推測される。

#### 遺室 1 SQ2

南東隅の IV 層で検出した。SQ1 と同様に掘込や落ち込みは検出されていない。SQ1 のような直立する土器片はなく、すべてその場で押し潰れたように平らな状態で検出された。

出土遺物は総量で 5 点 745 g である。SQ1 と同じく土師器が中心で、須恵器片 1 点 118 g に対して、土師器は 4 点 627 g である。これらの内、接合・復元により時期等が判明した遺物 3 点を掲載し、記述する。

№17 は、接合により約半分部程度が残存する須恵器杯 A である。大きな特徴はなく、底部直上の腰部にわずかに窪みが見られる。胎土には小礫石が混入し、底部回転糸切を採用する。上述した腰部の窪みや逆台形に近い器形も合わせて考慮して、時期的に新しくなる要素が少なく、未だ焼成の粗悪化が認めたいことも考えあわせて古代 5～6 期（8 世紀末～9 世紀前半）ごろのものと思われる。

№18は、破片2点が接合した土師器壺Ⅰ・Aタイプである。SQ1で出土した壺Ⅰと異なりヘラケズリ調整は体部以下に行われている。一方、内面調整はロクロナデ調整以外には見られない。口縁部の外反が認められるので、古代4～6期（8世紀前半～9世紀前半）ごろと見なされる。

№19も№18と共伴した土師器壺片である。小破片で遺存率はよくないが、口縁端部の面取り調整が確認されるので、壺Ⅰ・Bタイプと判じられる。内面にはタテ方向のハケ目調整が確認される。口縁部が強めに外反しており、体部の張り出しが大きいので古代4期（8世紀後半）の可能性もあるが、共伴した№18の時期も参照して古代4～6期（8世紀後半～9世紀前半）と報告しておきたい。

#### 温室1 SQ3

東辺中央部のV層で検出した。他のSQと同様に掘込や落ち込みは検出されていない。密集度合がうすく遺物の散布に近い状況なので、遺物包含層V層の遺物出土状況に近い。

出土遺物の総量は14点368gである。須恵器片6点237g、土師器片6点41g、内面黒色処理された土器が2点80gである。接合・復元により時期等が判明した遺物4点を掲載し、記述する。

№20は、黒色土器Aの底部片である。小破片であるが、杯Aの破片と思われる。腰部外面には横方向のヘラケズリ調整が確認される。また、底部外面の縁辺部には回転糸切が残るが、その中心部はヘラケズリ調整が行われた可能性が観察される。内面の黒色処理は良好に残存し、ミガキ調整も若干ではあるが確認できる。黒色処理による光沢も確認される。ミガキ調整の丁寧さや光沢の残り具合から古代6～7期（9世紀前半～中頃）の破片と思われる。

№21も、腰部に窪みが確認できる須恵器杯Aの底部破片である。回転糸切が採用されており、灰白色の色調から明らかなように焼成が既に粗悪化している可能性がある。これらの特徴から古代6期（9世紀前半）頃の可能性がある。

№22は、出土した破片2点が接合した黒色土器である。口径22cmを超えるので器種としては鉢類ではないかと推測した。外器面の特徴として、輪積痕が外面の一部に確認される。他に、外面にはロクロナデ調整後にヘラケズリ調整が見取れる。内面の黒色処理は丁寧に行われており、ヨコ方向のミガキ調整とそれに伴う光沢が現状でも確認できるほど残存状況は良好である。墨代編年など既報告の中では、鉢類に関して器面調整など特徴について詳述されず、具体的な時期を報告するのは困難なため不明としておきたい。

№23は、須恵器壺の口縁部片である。時期など土器の詳細は不明である。

#### 温室1 SQ4

SQ2の近くで土師器片がまとまって出土したものである。検出層位はV層である。約7点の土師器壺片などがまとまって出土したが、接合の結果、壺の体部片のみで、詳細を明らかにできるものではない。

出土遺物は、全部で2点100gにまとまった。土師器・須恵器各1点、土師器が96g須恵器4gである。

#### 温室1 遺物包含層V層出土 一括遺物

遺物集中域（SQ）として出土した遺物以外に、温室1の包含層から出土した遺物をまとめて記載した。温室1のV層から出土した遺物の総量は384点4,455gである。土師器252点2,051g、黒色土器50点529g、須恵器77点1,857g、中近世陶磁器片4点16gである。

この中から復元実測等により、時期や器種が判明した15点について掲載し、記述する。

№24は、東壘付近で出土した黒色土器Aの底部片である。器面外部には腰部に横方向のヘラケズリ調整が行われており、底部にもヘラケズリが確認される。底部の手持ヘラケズリ調整後に「X」のヘラ書が記される。黒色処理された内面にもミガキ調整が確認され、黒色処理の残存状況は良好である。但し、光沢の方は既に失われ

ており、ほとんど見られない。腰部と底部の手持ヘラケズリや丁寧な内面の黒色処理から古代6期(9世紀前半)以前の土器片と推測される。

№29は、東壁付近で出土した須恵器杯Aの完形である。器面外面の凹凸が著しく、輪襖をそのまま遺したようにナデが施されているのが非常に特徴的である。内面のナデ調整が一般的な須恵器杯Aのように滑らかに成形されているのは対照的である。特殊な器形で類例を見出し得ないが、良好な焼成と逆台形的な器形から古代6期(9世紀前半)か、新しくても古代7期前半(9世紀中葉)と考えられる。

№31は、東壁付近で出土した須恵器杯片である。杯Aの底部片と思われるが、詳細は不明である。

№37は、東壁付近で出土した土師器甕片である。内外面にクロコナデ調整が見られる。外反が著しいので土師器甕Iでも古代4～5期(8世紀後半～9世紀初頭)ごろという比較的古い可能性が推測される。

№25は、西壁付近で出土した黒色土器Aの体部片である。底部外面はほとんど残っていないが、腰部も含めて手持ヘラケズリの調整は確認できない。内面の黒色処理は丁寧に行われ、ミガキ調整と光沢も十分に確認される。時期については内面の黒色処理を見る限りでは、古代6～7期(9世紀前半～中葉)の可能性がある。

№26は、西壁付近で出土した須恵器杯Aの小破片である。色調から焼成が良好とはいえない。器壁の立ち上りが開き気味で、逆台形に近い器形等を考慮して古代6期(9世紀前半)ごろの製品ではないかと思われる。

№27は、西壁付近で出土した須恵器杯A片である。底部はほとんど残っていないが、腰部にナデ調整による窪みが明瞭に観察される。底部切り離し技法が不明なため時期を明らかにしがたいが、腰部の特徴などから古代6期(9世紀前半)以前の可能性が考えられる。

№32も、西壁付近で出土した須恵器杯A片である。底部から体部付近が残存した破片である。これにも腰部にナデ調整による窪みが観察される。底部切り離しに回転糸切が採用されており、器壁の立ち上り角が他の須恵器杯Aと類似するため、古代6～7期(9世紀前半～中葉)の可能性が考えられる。

№33は、西壁付近で出土した須恵器杯A片である。底径がやや大きい、底部片のみのため、時期などは不明である。

№34は、西壁付近で出土した須恵器杯Bの底部片である。底部だけしか残存せず、口径や器高などは不明である。本報告内で出土する須恵器杯Bは、主に古代6・7期までに限られる中で、平面接地の高台と高台径などから推測すると、この底部片は古代3～4期(8世紀中葉～後半)の可能性がある。

№35は、西壁付近で出土した須恵器杯B片である。外端接地の貼付高台で中に窪みを作る。器形も高台径も小さくなっている。底部中央には直径約5mmの孔が開孔されている。円形に開孔されているので、人為的に開けられ何らかに転用されたと推測される。古代5期(8世紀末～9世紀初頭)ごろの土器片と推測した。

№36も、西壁付近で出土した須恵器杯B片である。平面接地の貼付高台で高台の中央部に窪みをもつ。底部外面はヘラ切りで、高台径がかなり縮小化していること、さらに焼成不良の赤褐色で還元不良な粗悪化なども含めて考慮すると、古代6期(9世紀前半)ころの須恵器片と判断される。

№28は、南壁付近で出土した破片と、北壁V層で出土した破片が接合した須恵器杯A片である。器面全体に摩滅が著取され荒れている。白色を帯びた器面は焼成不良であることも示す。摩滅した底部外面にはわずかに回転糸切が確認される。器形が箱形に近く逆台形を呈さないのが古代6期(9世紀前半)以前のものと推測される。

№30は、北壁付近で出土した須恵器杯A片である。胎土に小礫石がいくつか混入し、焼成も良好と言えない。体部片だけのため、時期などは詳述できない。

## 温室2 遺物包含層V層出土 一括遺物

立会調査時に検出した土師器甕2点の集中出土以外に、遺物集中域(SQ)として出土した遺物がないため、

包含層V層から出土した遺物をまとめて記載した。

その出土遺物の総量は104点7,064gである。土師器61点4,908g、黒色土器21点778g、須恵器22点1,378gである。

この中から復元実測等により、時期や器種が判明した13点について掲載し、記述する。

№38は、東壁付近で出土した黒色土器Aの杯Aの破片である。残る器高や口径から厩代編年で分類されるA形態に相当する。底部外面は手持ヘラケズリが良好に残り、底部外縁から腰部外面にまで及ぶ。内面には丁寧な黒色処理が行われ、ミガキ調整が確認されるとともに、光沢も良好に残存する。底径の大きさも参考として判断すると、古代6期（9世紀前半）ごろの可能性が高い。

№39は、東壁付近で出土した黒色土器Aの杯Aの破片である。体部片だけで底部は残存していない。口径などから推測してA形態に分類される。内面にはミガキ調整が極めて丁寧に施され、黒色処理に伴う光沢も非常によく残存している。口径が14cm程度で、黒色処理が丁寧に行われていることなどを考慮すると、古代6期～7期前半（9世紀前半～中葉）のものとして推測される。

№40は、東壁付近で出土した黒色土器A・杯AのA形態に当たる破片である。底部外面は回転糸切痕がわずかに残るがヘラケズリ調整が施される。腰部にもヨコ方向のヘラケズリ調整を行っている。内面の黒色処理は口縁部でヨコ方向、体部ではタテ方向にミガキ調整痕が残る。口縁部には光沢が良好に残る。底径が小型化していることと、腰部手持ヘラケズリから古代7期前半（9世紀中葉）ごろのものと判じた。

№41は、№40と同様に東壁付近で出土した黒色土器A・杯AのA形態の破片である。№40と異なり、手持ヘラケズリが底部や腰部には確認できない。接合した3点の内、1点だけに黒色処理が良好に残りミガキ調整や光沢が確認されるが、他の2片には黒色処理が全く残存せず、ミガキ調整と光沢は残存していない。底部外面の調整が回転糸切後未調整であることなどから、古代7期後半（9世紀後半）以降、特に8期（9世紀後半）以降の可能性も考えられる。

№42は、東壁付近で出土した須恵器杯Aの完形土器である。逆台形の器形と、焼成が不良といえる成形状況から、古代7期（9世紀中葉）以降に下がる可能性がある。

№43は、東壁付近で出土した須恵器杯Aである。約3/4が残存する。全体的に歪みがある無台杯である。底部回転糸切りで、全体が白色化しており、焼成不良のため、古代7期（9世紀中葉）以降の可能性が考えられる。

№44は、東壁付近で出土した須恵器杯Aの底部片である。腰部にはナデ調整に伴う窪みがわずかに認められる。胎土は良好とはいえず、所々に小礫石が混じる。時期を決定する要素に乏しいが、焼成も良好とはいえない特徴から推測すれば、古代6期～7期（9世紀前半～中葉）ごろと考えられる。

№45は、東壁付近で出土した土師器小壺D（ロクロ小壺）の上半部である。内外面ともカキ目調整などはなくロクロナデ調整しかない。下半部が欠損し編年上の特徴となる調整等が、口縁部の外反する角度と最大径との関係から推測すると、古代8期（9世紀後半）ごろの可能性が見いだされる。

№46は、東壁付近で出土した土師器壺I・Aタイプの破片と思われる。口縁部片のため内外面のロクロナデ調整しか確認できていない。口縁部の外反がやや立ち気味なので、古代8～9期（9世紀後半～10世紀前半）ごろの土器片と推測される。

№47は、温室2東壁の包含層V層出土片と温室1SQ1の下層（2回目）で出土した土器片が接合した土師器壺である。遺存率が高く、所々欠損しているが、器形全体が分かるほど完形に近い残存状況である。体部外面をヘラケズリによって非常に薄く仕上げられた、所謂武蔵壺といわれる壺Cである。体部下半にヘラケズリを行うのは土師器壺Hや壺Iと同じであるが、体部上半から頸・肩部に横方向にヘラケズリを行うところが異なる。

器形上では頸部から口縁部にかけての形状が「く」形に屈曲するのではなく、「コ」形になっており、その直立部分がやや長く直線的に形に作られている。肩部も少し張り出し、口縁部への外反点や頸部から肩部への結節点それぞれ明瞭な形状に作られていることから、古代6期（9世紀前半）ごろの製品と考えられる。

№48は、東壁で出土した土師器壺Ⅰ・Aタイプである。体部外面の上半部はロクロナデ調整を行い、下半部は底部へ向けて斜方向にヘラケズリ調整が施される。内面の上半部もロクロナデ調整で、下半部にハケ目調整が行われる。内面の上半部にはわずかであるが、輪痕が観察される。ただ、内外面ともに上半部には一部だけヘラケズリ調整が看取されるのが特徴的である。№49と器形が類似することを考慮すると、古代5～6期（8世紀末～9世紀前半）頃の土器と見られる。

№49は、東壁の包含層Ⅴ層出土片とその排土内から出土した土器片が接合した土師器壺Ⅰである。遺存率が高くほぼ完形に近い。ヘラケズリは上→下（口縁部→底部）方向に施されている。口縁部に面取りのない「く」形に外反するだけのAタイプである。ある程度外反する器形や、肩部が少し張り出しつつも丸味がなくほぼ真っ直ぐ体部へ下行する器壁の形状から古代5～6期（8世紀末～9世紀前半）頃の土師器壺と思われる。

№50は、東壁で出土した土師器壺Ⅰ・Aタイプである。口縁部で約半分が残存している。壺Ⅰの外面は一般的に上半部にロクロナデ調整を、下半部にヘラケズリ調整を行うが、この壺は体部中央付近でロクロナデ調整を行った後にハケ目調整を一度はさんでヘラケズリ調整を行うという特徴がある。口縁部の外反がある程度認められ、まだこれが直立してゆく段階には至っていないので、古代5・6期（8世紀末～9世紀前半）頃の土器と判じた。

№51は、東壁付近で出土した土師器壺Ⅰ・Aタイプの破片である。体部下半には口縁に向けてヘラケズリ調整が見られる。口縁部の立ち上りの傾斜角がやや緩やかで、ほとんど張りのない肩部、体部下半に最大径がある可能性を考慮すると、厩代編年の古代9期（10世紀前半）の可能性もある。

#### 温室3・作業小屋 遺物包含層Ⅴ層出土 一括遺物

温室3も遺物集域（SQ）はなく、すべての出土遺物を包含層出土遺物として取り上げた。その出土遺物の総量は134点3,751gである。土師器98点2,768g、黒色土器10点229g、須恵器24点742g、中近世陶磁器片2点12gである。

この中から復元実測等により、時期や器種が判明した8点について掲載し、記述する。

№52は、東壁付近で出土した黒色土器A・杯AのA形態の破片である。体部片だけで底部が残っていない。器面外面は磨滅により荒れており、調整はロクロナデ調整しか確認できない。内面は黒色処理にヨコ方向のミガキ調整が確認され、光沢も一応確認でき、黒色処理自体も良好に残っている。黒色土器Aの編年要件である底部外面や腰部の調整が不明なため、時期を確定することは困難であるが、器壁の立ち上り傾斜角から推測すると、古代5期～8期（8世紀末～9世紀後半）ごろの土器片と推測した。

№55は、東壁付近で出土した須恵器杯Aの破片である。色調が土師器に類似する橙色（赤褐色）を呈し、全く還元焼成されていないような色調である。ただ、器面のロクロナデ調整は良好に残り、堅固な焼成の仕上がりである。この点を重視すれば、器面の色調は鉄分の多い胎土による可能性も推測され、焼成状態とは無関係かもしれない。底部切離し技法が回転糸切のため、一緒に出土した№57や58とは時期を異にする可能性がある。逆台形を志向する器形や焼成が良好でないことから古代6期（9世紀前半）以降の可能性を示唆しておきたい。

№56は、東壁付近で出土した土師器壺の上半部である。器面外面には、口縁部まで底部方向からヘラケズリ調整を行う壺Ⅰ（ケズリ壺）である。ただ、ヘラケズリの一部は磨滅し、その調整痕跡を喪失する部分もある。内面にはナデ調整を確認できる。口縁に最大径があるものと思われるが、胴体部がやや膨らむような器形なため



壺ⅡのBタイプの可能性も考えられる。口縁端部の外反は№57や№58のように反り返ることなく、胴部が膨らむため、古代0期～2期（7世紀前半～8世紀前半）と考えられる。特に胴部のふくらみを考慮すると、古代1期後半（7世紀末）から古代2期（8世紀前半）に限られる可能性もあるが、厩代編年で指摘されるように、形態変化が乏しく単品では0期～2期での時期を限定しがたいため、明言は避けておきたい。

№57は、東壁付近で出土した土師器壺の口縁部片である。胎土に直径約3mmの小礫石が混入するなど良好ではない。外器面にはヘラケズリ調整が行われ、内面にはナデ調整が見られる。調整技法だけでなく、口縁端部が大きく外反する形状も合わせて考慮し、壺Ⅱの上半部と推測される。下半がないため確定はできないが、口縁端部が最大径をもち底部に向けてほぼ直線的に下行するCタイプの可能性が高いと思われる。残存する破片から考慮すると、古代0期～1期（7世紀後半～末）と判断される。

№58は、東壁付近で出土した土師器壺片である。外器面にナデ調整だけが確認されるが、クロロナデではない。頸部下（肩部）以下の外器面はヘラ先などで削り取られたかのように、器面を荒く成形・焼成する。口縁端部が外反することから、壺Ⅱ（ナデ壺）か壺Ⅲ（ケズリ壺）の口縁部片と思われる。これらの土師器壺は古代0期～2期（7世紀前半～8世紀前半）までしか見出されていないので、掲載した土器片の中では古い時期の部類に入る資料と考えられる。破片が小さいため、詳細な時期を絞り込むことはできない。

№53は、北壁付近で出土した黒色土器A・杯AのA形態の小破片である。底部外面はヘラ切り後に外縁部を中心に手持ヘラケズリを行う。手持ヘラケズリは腰部まで及ぶ。内面の黒色処理は磨耗も認められるが、ミガキ調整も確認され、光沢も口縁部付近に見出される。底径・器高など法量と底部外面を中心とする器面調整技法などを考慮して古代6期～8期（9世紀前半～9世紀末）であることは確実である。この内、古代6期～7期前半（9世紀前半～中葉）の可能性が高いように思われる。

№54は、作業小屋のⅢ層で出土した破片と埋室1の北側で出土した破片が接合した須恵器杯蓋Bである。杯蓋端部が欠損しているため、断定はできないが、端部なしで口径が15cmを超えているためⅠ類もしくはⅡ類の可能性が高いと考えられる。厩代編年の部類に従えば、杯蓋Bの中でも平らにつぶれる器形に分類されるものと思われる。天井部の回転ヘラ削りの範囲は、ツمامミ周辺に限られ、広がりがほとんどない。内面のツمامミ下・中央部付近は非常に滑らかに磨耗しており、何らかに転用された可能性がある。ヘラ削りの範囲やつまみ部分の形態などで時期決定を試みるが、詳細な時期を明らかにすることはできず、古代6期（9世紀前半）以前としか報告しがたい。

№59は、調査区の一括遺物として出土した須恵器杯Aの底部片である。残存率は良くないが、他の須恵器杯Aが回転未切りであるのに対して、底部ヘラ切りを行っており、杯Aの中でも時期的に古い可能性があることと、内面に刮り面が確認され、内底部が二次利用された可能性が高いため、掲載した。転用に伴う磨痕は確認できないので転用項とは考え難い。砥石代わりに使用された可能性も推測される。

## 第V章 食品加工実習棟 本調査

### 1 調査の概要

遺物に残った札類や注記から推測するに、平成2(1990)年に実施されたと推察される現在の食品加工実習棟の建築に伴う発掘調査に関して報告しておきたい。

既に発掘調査が行われてから約25年以上が経過しており、発掘調査の内容については不明となった点も少なくないが、整理調査によって明らかになった事実関係だけをここで公表し、報告することとした。

最初に、ここで報告するに至った経緯について記しておきたい。ここで報告する遺構の資料や遺物類は、長らく須坂市博物館の倉庫にて保管されていた。図面数枚と写真などの記録である。遺物に関しては、園芸高校内で出土したものであることを記したカードがテン箱の側面に差してあるだけである。しかしながら、№98などテン箱内に入っている遺物内には注目されるものが少なく、未公表・未報告のまま保管しておくのは不相当と思われる。そこで未報告となった経緯は不明であるが、今回の報告書作成に先行する協議において、県教委及び園芸高校の寛大なご理解のもとに整理調査を行い、合せて報告書に掲載して資料として刊行・公表する承諾を得た。

整理調査においては、一部の遺物(土器片)で、水洗が十分でなく土泥が残存していたため、これを洗い落とすことから始めた。水洗後、未注記の遺物に対しては、各土器片などに注記を行い、出土に関する情報を記録した。ただ、ビニール袋の中に入れられて保管されていた遺物の中には、出土地点が不明なものもあり、こうした遺物については、園芸高校内の遺跡を示す注記記号である「EN」とその年数だけ記載することに決めた。

接合・復元・実測は、工業棟や温室緊急調査の作業が終了後に行った。遺物に関する図化・資料化と併行して、須坂市博物館に残る発掘調査時の平面図や写真を合せて精査し、可能な限り、出土地点やその状況が明らかになるように努めた。また、90年の発掘調査当時調査担当者として発掘を主導し、その状況を知る小林宇一氏(メセナホール次長)にも聞き取り調査を行い、発掘調査の状況・内容等の確認を図った。

それでも発掘に関して明らかになった知見は少く、特に本調査の契機になった試掘調査関係の記録類はほとんどなく、写真類が残っているだけである。それ故、試掘坑(トレンチ)の具体的な位置などは不明である。遺物に残された注記には「シ」と記されたものが散見し、試掘の略記号と思われるが、その出土地点は明らかにできなかった。さらに、試掘注記の中には「1号落」など遺構の可能性を示唆するものもあるが、トレンチ内の具体的な状況については写真記録さえないため、全くこれらの注記の内容は理解できていない。よって、これらの遺物については試掘出土一括もしくは、出土地点不明の遺物として資料化することとした。なお、試掘の土層に関する記録も写真のみであり、それも逆光で撮影されたプリントであったため、土層堆積状況についても全く不明である。

以上のように、試掘も含めて調査時の状況については不明な部分が多いため、注記等によって出土地点が明確なものはそれに従ったが、注記等が欠損するなど明らかでない場合は、出土地点を明記せず、不明遺物として一括して報告した。ただ、確実なことは園芸高校内の校舍拡張工事に伴う発掘調査で出土したことだけは間違いない。現在の食品加工実習棟付近の遺物・資料であることは確実と思われる。

遺物の時期決定について、古代の遺物は第三章と同様、鳥羽英継氏の屋代編年にもとづいた(鳥羽英継1999)。弥生・古墳時代の遺物は、時期的に近い資料が多く出土した松原編年を基準とした(長野県埋蔵文化財センター1998・2000a)。ただ、弥生・古墳時代の遺物の中には松原編年とは符合しないものもあるので、その他に牛出古窯遺跡編年・七瀬編年・篠ノ井編年・石川糸里編年・覆田編年なども参照・援用した(長野県埋蔵文化財センター1997・1998・1999・2000a・2000b他)。

## 2 土層堆積状況

残されていた図面や写真といった記録には、本調査時の基本土層や土層に関する資料がなく、表土以下の堆積状況は不明である。残された調査区全景写真から推測すると、遺構確認面までは当時の地表から約1mほど掘削したようである。また、遺構の検出（遺構確認面）が黄褐色砂層と思われる土層で行われ、これを地山とする遺構であると考えられる。調査地点の基本層序が不明なため、食品加工実習棟周辺の現況と合わせて推測すると、遺構確認面となっている黄褐色砂層は工業棟予定地の発掘調査で判明した層序で推測すると、VI層黄褐色砂礫層（基盤礫層）の上面でないかと考えられる。聞き取り調査によれば、緊急調査であったため確認面まで重機によって掘り下げた後ということである。遺物包含層については詳細に調査できなかったため、全く不明である。

なお、この調査で出土した土器類で保管され残っていた遺物の総量は、3,652点約44.3kgである。種別によれば、弥生土器片357点5,027g、土師器（古墳）片401点約12.0kg、土師器（古代）片1,522点約21.6kg、同須恵器片121点3,383g、黒色土器130点2,057gなどである。これらの他に園芸高校に関する遺物として骨片や石器・土製品（土鏝1点など）が若干、残されていた。これが食品加工実習棟の調査で出土したという確証がないため、今回の報告の中では取り上げなかった。

## 3 検出遺構と出土遺物

### A. 竪穴住居跡と関係遺構（ピット類など）

SI6

調査地点の南端で検出された竪穴住居跡である。調査担当者的小林氏に対する聞き取り調査でも確実な住居跡とご教示を得た。図面類から判明する法量は、長軸約6.78m短軸約6.76mの隅丸方形を呈する。断面図から分かる深さは、確認面以下約40cmである。覆土は3層で構成され、その堆積状況はIV層に相当すると思われる茶褐色土を主体とする自然堆積である。断面形状は皿状を呈し、堆積形状はBもしくはEに分類される。これに伴うカマドは記録されていない。住居跡に関連すると思われる遺構は、P8～P11である。詳しくは後述するが、平面的にはほぼ一定の間隔で構築されており、住居の柱穴の可能性が高いと考えられる。

遺物は住居跡のほぼ全面から出土しており、特定の集中域はない。出土状況の平面図をみると、一定のまとまりで遺物は取り上げられており、図面上ではそれを「P」としナンバリングが付けられていた。但し、出土層位に関する記録がほとんどないため、平面図がどのレベルの状況を示しているのかが明らかにできていない。注記の中に、特に「アク土」と記されているものもあって区別されている可能性があることや、他の遺構上にある遺物の状況を参考すると、遺物類は住居覆土としてもその下層と考えられ、ピット類が検出される住居床面近くの遺物類を平面図に記録して取り上げた可能性が考えられる。

遺構内から出土した遺物の総量は、363点9,477gであり、器種別には、弥生土器片（赤彩）91点1,392g、土師器（古墳）20点3,591g、土師器（古代）232点3,219g、黒色処理13点873g、須恵器7点402gである。平面図に「P」とある遺物を中心として接合・復元を行い、26点を掲載した。

№60は、中部高地型赤彩高杯の杯部片である。赤彩もよく残っている。杯部の底部付近に段がない丸味をもつ杯部である。口縁端部は平坦になるように面取りがなされている。外面の器面調整は赤彩後にハケ目調整を行い、さらにミガキ調整を施した後に口縁端部にはナデ調整が入る。ナデ調整が緩やかなため、ナデ調整部分にはハケ目が残る。内面の調整も基本的には外面と同様であるが、内面にはミガキ調整の痕跡がよく残っている。赤彩高杯で杯部底部付近に段がないので松原編年の中でもA類（純形口縁高杯）に当たると思われ、松原弥生編年の6段階に相当すると思われる。

№61 は、手づくねのミニチュア土器である。外面には細かいミガキ調整が全面に施される。体部から底部にかけてはタテ方向のミガキ調整であるが、口縁部から頸部にかけてはヨコ方向のミガキ調整である。ヨコ方向のミガキ調整は内面の同じ部位にも及ぶが、内面のミガキ調整の残りは良くない。完形土器のため体部の内面調整は不明であるが、頸部内面には輪痕が残り、肩部には指頭圧痕が確認される。他に内外面とも部分的に赤彩の残痕が散見する。赤彩が行われていた可能性とミガキ調整が全面に施されている特徴から、松原編年では該当する分類・類別がないが、がまん淵遺跡・牛出古竊遺跡分類の壺A類を模倣したミニチュア土器と考えられる。短期的には壺A類が盛行するがまん淵遺跡・牛出古竊遺跡の時期である新潟シンボ編年の4～6期ごろと考えられ、松原弥生編年という5～6段階にあたと推測される。

№62 は、弥生後期の甕の口縁部片である。口縁部のみ破片で、頸部から肩部へかけての屈曲状況が不明なため、器形による詳細な分類はむづかしい。口縁部は外反しつつも口縁部だけではわずかに内湾する。端部の外面には面取りが確認される。外面には櫛描波状文が施され、この波状文の上に頸部付近では7条を1単位とする簾状文が施文されている。一方、口縁端部の外面には長さ3～4mmの弧状の文様が弧を向かい合わせて2列施文されている。簾状文の右端にもわずかにその静止部が観察されるが、それ以外には見られないので、その間隔は広めに開いている段階の土器片と推測される。器形や施文上の特徴などを踏まえると、松原弥生編年の5～6段階に相当する時期の甕片と推測される。

№63 も、弥生後期の甕の口縁部片である。外面には弥生後期の特徴である櫛描波状文が施文されている。櫛描は5本を1単位とする。松原編年の分類でいう弥生後期の甕B類の破片に当たる。松原編年ではさらにプロジェクションによって細分化を図るが、頸部以下が残存していないため判明しない。内面調整は、ヨコハク調整がわずかに残り、その上からヘラミガキ調整を丁寧に行う。外面の簾状文の静止回数やその間隔、及び口縁部器壁の傾斜角度がやや開き気味になっていることから、松原編年という弥生後期の5～6期（弥生末期）頃のものだと判断した。

№64 は、高杯の杯部片である。杯部が内湾しながら緩やかに立上がる。松原古墳編年分類の高杯F類に該当する土器片である（がまん淵・牛出古竊遺跡分類の高杯B類に相当し、杯部外面には稜をもたないので、B2類に細分されると思われる）。調整では外面にはわずかにハケ目調整が見られ、その後にはナゲ調整を行う。内面調整はナゲ調整が確認される。下半の脚部は欠損し、脚部の形状・調整が不明なため、詳細な時期は不明であるが、杯部器形から推測される範囲内では松原古墳編年の撮相3段階以前の可能性が高い。

№65 は、住居跡床面付近で出土した破片と住居覆土から出土した破片が接合した高杯の杯部片である。一般的には高杯Aに部類される器形であるが、がまん淵遺跡・牛出古竊遺跡編年・分類に従えば、高杯B2類に相当すると思われる。残存率が少なく、皿の一部が帯状に残存し、高杯頸部との接合部や口縁部間で約5cm幅が残っているため復元実測した。篠ノ井遺跡群の出土遺物に類別が見出される。脚部以下が残存していないため詳細な時期は不明であるが、器形や器壁の立ち上がりなどから古墳前期であることは確かである。

№66 は、高杯脚部片である。器面全体に赤彩が良好に残る。器面外面にはタテ方向のハケ目調整が残り、内面にはヨコ方向のハケ目調整が見取れる。赤彩があるので、弥生後期箱清水式の高杯と思われるが、詳細な時期は不明である。

№67 は、SI6の床面全般に敷いて出土した土器の甕である。器形上では体部がやや丸味をもち球面化がはじまっているものの、下半部には明瞭な稜を形成しながら直線的に底部へ下行する。内面をみると、この稜の付近で上下が接合され成形された痕跡がみられ、同様の製作技法を用いる箱清水式の土器の特徴が見出せる。器面外部の調整は体部に見られるハケ調整後に、丁寧にヨコ方向を中心とするミガキ調整が確認される。ハケ調整の

痕跡(ハケ目)は体部には所々にみられるが、頸部の「く」字に曲がる屈曲部によく残っている。ミガキ調整は、口縁部付近ではタテ方向に行われている。他方、底部周辺にはミガキ調整が行われず、ハケ目調整が良好に残存している。内面の器面調整は後が形成された付近を境に異なり、これより下半部ではハケ目が明瞭に残っている。ただし、底部内面だけはハケ調整後にナデ調整が見られる。後より上の体部付近でもハケ調整後にヘラケズリ調整をやや丁寧に施す。口縁部にもハケ目がよく残っているが、口縁部だけはナデ調整が見られ、他とは異なる特徴を出している。この土器の類似例はあまり見いだせなかったが、長野市四ツ屋遺跡の30号住居跡出土の壺がその一例となるのかもしれない(長野市教育委員会他1980)。口縁部がなく、単純に頸例とはできないが、体部の球形や稜部の形成など体部に限り、近い例であろう。以上の特徴から松原古墳編年分類の壺G類(直口縁壺)に相当すると考えられる。胴部に丁寧にヘラミガキを行う技法上の特徴はそれと共通する点である。直口縁壺G類は松原古墳編年の様相1以前に出現し様相4段階には壺H類(直口壺)へ転換するという松原報告書(P247)の指摘に従えば、この壺も様相1~3段階の土器と推定される。

№68は、土師器(古墳)壺の口縁部片である。口縁部を丸く成形し、頸部は緩やかにく字に屈曲する。器面外面にはタテ方向のハケ目調整が残る。但し、口縁部はヨコ方向のハケ目調整が確認される。内面にもハケ目調整が見られ、ヨコ方向に施されている。ただ、これは頸部内面までであり、わずかに残存した体部にはナデ調整の痕跡が見出される。これらの少ない特徴から松原古墳編年分類でいう壺H類「ハケ調整く字壺」に相当することは確実である。但し、これ以上の細分は困難でH1類かH2類かは確定できない。時期としては、壺H類のみみられる松原古墳編年の様相2・3段階(新潟シンボ8期)頃と推測される。

№69は、覆土内や床面付近で出土した破片が接合して復元された土師器(古墳)の壺片である。底部付近や口縁部の半分位は喪失している。器形上の最大径は胴部の中央付近、肩部のやや下にある。頸部から口縁部は緩やかに屈曲し、極端な屈折はみられない。全体としては不均等な器形を形作る。器面成形を見ると、口縁部付近の外面にはナデ調整が見られるが、頸部付近にはヘラケズリ調整が見られる。肩部直下より下にはタテ方向のヘラミガキ調整が施される。なお、ヘラミガキ調整が行われている範囲の下半、底部に近いところでは、ヘラミガキの前のヘラケズリ調整が左上へ向かう斜方向で観察される。ほかに、外面の肩部下から口縁部にはススが残っている。一方、内面にはヨコ方向のヘラケズリ調整が肩部以下に確認される。以上の調整技法を踏まえて、松原古墳編年分類に従うと胴部下半にヘラケズリ調整を多用することから、壺G類に相当する。しかも、胴部上半に最大径を取ることでG1類に該当し、口縁部が外反するタイプに分類されると思われる。同報告が指摘するようにヘラミガキ手法が古墳前期前半の中部高地型構文系土器群の伝統の残存要素を反映したものと判じられる。この壺G1類から松原古墳編年の様相2前後(新潟シンボの8期前半ごろ)の土器と推察される。

№70は、土師器(古墳)の壺である。上半部を中心として、約7割が残存したものである。頸部付近や体部の外器面には、タテ方向のハケ目調整が明瞭に確認できる。この他、体部外面には部分的にススが付着する。口縁部の内面にはヨコ方向のハケ目調整が良好に残る。一方、体部内面にはヘラケズリを施す。これらを踏まえ松原編年で該当する器種分類を考慮しても松原古墳編年には適当なものが見出せない。この土器の器形上の特徴として、肩部の張り出しが少なく、緩やかに彎曲する程度に止まる。もう一つの特徴として、この土器の内外面には輪積痕が残り、特に体部の最大径部分で大きな段となって明確に見取れる。内面観察ではその部分で、上半と下半部を別々に成形し、作り合わせたことで、生じた様子を推測させる。内外面の調整技法や器形から古墳時代初頭(出現期)頃の土器と思われるが、編年上の詳細な時期は不明である。

№71は、黒色土器の甕形である。器形成形からみると、後述する№73と異なりほとんど外反は見られず、口

<sup>1</sup> 石川桑里古墳編年を参考とすれば、壺F類が該当する可能性が推測される。

縁部はまっすぐに立ち上る。口縁端部の内面にはナデ調整が見られ、幅広く面取りが施されたように成形されている。器面調整をみると、外面にはハケ目調整の後に口縁部に向けて斜方向にヘラケズリ調整が体部下半に施されている。但し、ヘラケズリの上部に当たる口縁部だけはナデ調整が明瞭に看取される。すなわち、口縁部外面の調整は、一部だけしか確認できないがヨコ方向のハケ目調整が行われた後に、ナデ調整が行われ、これが明確に確認される。底部外面にもヘラケズリ調整が確認される。内面は上述の端部調整のほか、肩部以下にはヘラケズリ調整が確認される。

以上のようなこの土器の事実関係を踏まえて時期などを検討すると、器面調整に使われているハケ目調整やその後にヘラケズリ調整などは壺類や甕類に行われる技法である。しかし、土器の大きさなど器形を考慮すると、壺類といった貯蔵具には該当しがたい。一方、もう一つの特徴である内面黒色処理に注目すると、壺類のような貯蔵具類には見られず、古墳時代の内面黒色処理は杯碗類に施される技法である。同じことは底部外面のヘラケズリ調整であり、杯類によくみられる調整である。当然のことながら、器形としてこれらの器種に当たるとはいいがたい。よって、特定な器種の特徴に当てはめることは困難と思われ、様々な器種の技法が混在している可能性が高いと推測される。すなわち、口縁端部の成形技法や器形から考えられるこの土器の器種は上述の通り、鉢類のB1類にみなされるが、器形が大きくないためか、杯類で行われる黒色処理が採用されると同時に、壺類に施されるハケ目調整やケズリ調整までも行われたと考えられる。このように鉢類と壺類の両方の技法・調整が合わさっているため、器種分類は事実上困難であり、当面器形だけで見れば、鉢類になろう。なお、土器の時期等であるが、黒色処理に着目するとそれが本格的に行われる本村東沖の第5・6段階(長野市教育委員会 1998)、厩代編年の古墳6期以降で、TK208~TK23・47型式が共存する可能性がある6世紀初頭以降と報告しておきたい(鳥羽英雄 2000b)。ケズリ技法が盛隆することを重視するならば、厩代古墳8期・6世紀後半~7世紀初頭まで下る可能性も推測される。

№72も№71~№74と関連する土器と思われる完形の土師器(古墳)である。器形が他の3点よりも一層小型化され、成形は手づくねによる。器面調整は、体部付近が斜め方向のヘラケズリ調整後に丁寧にヨコ方向のミガキ調整を行い、そのヘラケズリの痕跡が体部中央付近と底部付近にのみ残る。なお、ミガキ調整は底部にまで及び外底部全面にわたって行われる。口縁部付近はヘラケズリ調整後にナデ調整が行われるが、磨滅によって残存状況が良くない。内面の調整も口縁部付近はナデ調整が主で、体部付近には輪痕が残る。また、口縁部付近を除き、内面には全面的に黒色処理が見られる。成形・調整技法や器形等からミニチュア土器に該当すると思われる。時期的には№71~№74と同じ古墳後期と判断され、出土地点に近いこともこれらがセット関係にある可能性を示唆する。

№71と同様に№73は、黒色土器の完形である。器形としては鉢類に分類されるであろうか。口縁部が直立し直線的に延びるが、端部はわずかに反外する。外面の器面調整はわずかにハケ目調整が認められ、その後に底部方向へのヘラケズリ調整が行われている。ただし、口縁部だけはナデ調整が行われている。内面では、口縁端部にナデ調整が行われ、それ以下の胴体部にはヘラケズリ調整が見られる。ただ、底部外面にもヘラケズリ調整があり、杯碗類にみられるのと同じ様な調整が施されている。時期的には№71と同じ頃と思われ、№71と同じ土師器の一つとして作成されて同様に使用されていた可能性も考えられる。

№74も、№71・73と同様に成形された黒色土器の完形土器である。№71・73と比べて若干小さく成形されている。そのためか、前の2点と比較して器壁が厚い。口縁部はやや内湾して成形されており、№71・73で見られた端部の面取り状の成形は行われていない。この口縁端部にはナデ調整が確認される。ただし、ナデ調整の前にはハケ目調整が行われたと思われる、所々にハケ目も確認される。外面の器面調整は体部下半にヘラケズリ調整

が行われ、口縁部下の肩部（体部上半）を中心にヘラケズリの前に施されたハケ目調整が残る。他の2点ではこのハケ目調整があまり残らないようにヘラケズリ調整が行われるが、この土器ではハケ目調整がよく取除される。ヘラケズリ調整は底部から胴部上半まで行われており、口縁部へ向けて斜め上方向に削られている。内面の調整は肩部から胴部下半まで縦長にヘラケズリ調整が見取れる。また、他の2点が口縁部で黒色処理が止まっているのに対して、この土器は口縁部外面まで黒色処理が及んでいる。調整や器形の類似性などから、他の2点と同じ時期に製作された土器と思われる。

№75は、住居内の床面付近2地点で出土した破片が接合した土器である。器面外面はハケ目調整とナデ調整が見られる。底部外面にはヘラケズリ調整の後にナデ調整が見られる。内面には口縁部付近にナデ調整が見られ、ヘラケズリ調整が下半に確認される。口縁部をわずかに短く外反させるので、松原古墳編年分類の鉢D類に該当する可能性が高い。松原報告書でもこの器種は粗製が多いとされており（長野県埋蔵文化財センター2000a）、石川条里編年分類でいう鉢F類（粗製鉢）に該当すると思われる（長野県埋蔵文化財センター2000a）。調整や口縁部部の器形上の特徴をもつ松原古墳編年の撥相2～撥相3頃の土器と思われる。

№76は、高杯の脚部片である。脚部がハの字状に開き、いわゆる開脚高杯とされているものと思われる。掘開き状の脚部には円孔の透孔が3箇所あけられている。器面外面はハケ目調整が認められ、その後精密なミガキ調整が施される。端部はミガキ調整のみが行われている。内部の調整はハケ目調整が確認される。杯部はほとんど残っていないため確認できる範囲内に限られるが、外面はヘラケズリ調整後にミガキ調整を行う。内面にもミガキ調整が確認される。また内面のもう一つの特徴として、杯底部内面を意図的に打ち欠き器面に凸凹を作っている。これにより底部内面は非常にざらついている。如何なる意図・理由をもってこうした処置を行っているかは不明であるが、同じような器面内面の打ち欠きは屋部遺跡の平成26年（2014）12月の本調査でも高杯で出土しており（未報告）、祭祀の場で使用する非日常性を示す可能性が推測されるとともに、この地域の特徴の一端を示すのかもしれない。底部外面には変を成形していない可能性があり、器種分類としては松原編年の高杯F類とみなされる。以上のような特徴から、松原古墳編年の撥相1～3の時期が考えられる。

№77は、覆土内から出土した器台の脚部である。杯部の残存状況が良好でないため、詳細な分類が困難である。器面の調整では脚部外面にタテ方向のハケ目調整を行い、透孔3つの穿孔を行う。外面全体に赤彩が良好に残存する。内面は杯部底部付近にヨコ方向のハケ目調整が確認されるが、赤彩はない。杯部と脚部の接合部の外面にもわずかにハケ目調整が残っている。また杯部の内外面はミガキ調整が行われており、両面には赤彩が残る。杯部の底部内面にはその中央に約1cmほどの開孔が焼成前に行われている。開孔部半分は四角形のように直交する2辺で形成されるが、残り半分は弧状に丸味を持って形作られる。開孔の周辺は、№76と同じく器面が荒れており、焼成後に人為的に刺突具で刺し続けたかのようである。松原編年でポイントとなる杯部が形態が判明しないため、詳細な時期は不明である。

№78は、SI6の3地点で出土した破片が接合した壺である。外面はハケ目調整の後にミガキ調整が行われている。わずかに残った頸部にはタテ方向のハケ目が明確に残る。内面にはナデ調整が見られ、輪轆度も確認される。頸部が直立し、胴部が球筒化した器形から壺と推測される。松原古墳編年分類では壺G類（直口縁壺）の可能性があり、石川条里編年分類でいう壺B類かC類の可能性が考えられるが、口縁部や体部下半がないため、詳細は明らかにできない。詳細な時期についても明らかにできるほど編年上の観点が残っていない。

№79は住居床面付近で出土した土師器（古代）片である。器形がほぼ直立する特徴から、甔の可能性もあるが、鉢の可能性が高いと思われる。外面下端にはクロコナデ調整後ヘラケズリ調整が体部に行われたことを示す調整痕がわずかに確認される。器形以外に調整などで特徴がない器種のため、時期判別がむづかしいが、古代8

～9期（9世紀後半～10世紀前半）ごろの製品と思われる。

№80 は、黒色土器Aの杯A類の破片である。器面外面の腰部にはヨコ方向の手持ちヘラケズリ調整が行われており、底部外面の外縁部には全面的にヘラケズリ調整が行われたことが見取れる。ただ、底部全面にヘラケズリが及ぶかは残存率が少ないので不明である。内面の黒色処理にはミガキ調整が確認でき、丁寧な黒色処理が残っている。外面のヘラケズリ調整が腰部だけでなく、底部にも及んでいることや内面の黒色処理の状況等から古代6期（9世紀前半）以前の可能性が高い。

№81 は、須恵器杯Bの底部片である。残った底部には回転糸切痕がなくヘラ切りが行われており、その後には高台を貼り付ける。高台は外端接地である。外端接地の高台には溝状の窪みを形成する。底部内面には火だすき痕が1条明瞭に残っている。灰褐色系の色調で焼成はやや不良な製品である。外端接地と溝状の窪み、底部ヘラ切りから古代5期（8世紀末）以降の製品と推測される。

№82 は、住居内で出土した破片と試掘などで表面採取された遺物が接合した土師器（古代）小壺D（ロクロ小壺）である。器面外面の下半には底部に向けて斜め方向にやや細かくヘラケズリ調整が行われており、底部に近い腰部にはヨコ方向のヘラケズリ調整が行われている。一方、上半部にはロクロナデが明瞭に残っている。底部外面には、回転糸切りだけでヘラケズリ調整はない。口縁部から頸部にかけてやや立ち気味に傾き、最大径が体部上半部にあつて、底部から下半の器壁の立ち上り角度が低いことから古代6期（9世紀前半）ごろと推測される。

№83 も、土師器（古代）小壺Dの破片である。器面内外面にはロクロナデ調整が見られる。カキメ調整がないタイプである。他に器面外面には底部から口縁部方向ヘラケズリ調整が確認される。口縁部が直立に近いように立ち上がって端部のみ少々外反することや、胴部が少し張り出す器形上の特徴から古代6期（9世紀前半）頃の製品と思われる。

№84 は、土師器（古代）壺Iの口縁部片である。口縁端部に面取りのないAタイプと思われる。ロクロナデ調整後のヘラケズリ調整は口縁部方向に向かい、小さく細か目の単位で、肩部より行われている。口縁部の傾斜角が低い傾向にある一方で、肩部の張りが弱く真直ぐに底部に向けて器壁が下降する器形も考慮して、古代4～6期（8世紀後半～9世紀初頭）の可能性がる。ただ、上記の根拠を重視するならば、古代6～7期ごろまで下がる可能性も考慮される。

№85 は、SI5内の2点の破片とSI6から出土した破片が接合した土師器（古代）壺である。残存部分は約1/4程度しか残っていない。器面外面は上半部をロクロナデ調整、下半部には底部→口縁部に向けてヘラケズリ調整が施される土師器壺Iである。口縁端部に面取りが見られ、壺IのBタイプである。特徴として、底部外面の一部にタタキ痕が認められる。まず、ロクロナデ調整を行いタタキ調整を施した後に、細いヘラケズリ調整が行われており、タタキ目は部分的に行われた調整痕と考えられる。内面の上半部はロクロナデ調整だけであるが、外面にタタキ調整が行われているためか、下半部には当て具痕のような痕跡が認められる。「く」の字形の外反が直立に近いほど立っており、肩部に張り出しがなく、全体的に丸味を帯びつつ下半部へ緩やかにカーブして下行する器壁の形状から、古代8期（9世紀後半）ごろの土師器壺と判断される。こうしたタタキ目のある土師器壺の類別として、松原遺跡SB1231出土№23や篠ノ井遺跡群SB7357出土№3などが見出される。

以上のように、SI6から出土した遺物の時期を検討すると、時期が2時期以上にまたがる可能性が見出される。一つは弥生末期～古墳時代初頭である。もう一つがSI5と時的には近い、古代6期（9世紀前半）ごろの遺物が見出される。前者に該当する遺物が、№63・69・70などであり、後者は№80・82・83・86などである。



SI6 内の北隅付近で検出された柱穴である。長径約 68 cm 短径約 61 cm、深度約 39 cm でほぼ円形を呈す。断面形は台形状である。覆土に関する記録はなく、残された写真から推測すると、工業棟本調査地点などにみられた IV 層灰黄褐色砂層による単層と思われる。堆積状況は分類図の C に相当する。この遺構内の出土遺物は残されているものはない。

P9

SI6 内の東隅付近で検出された柱穴である。長径約 66 cm 短径約 53 cm、深度約 37 cm で楕円形に近い平面形状を呈す。断面形は台形状に近い。残された写真から推測するに、他の柱穴と同じく工業棟本調査地点の IV 層灰黄褐色砂層による単層と思われる。また、この遺構内の遺構確認面付近では平坦な礫石が検出されている。柱穴に関わる礫石なのか、住居跡に関わるのかは不明である。この遺構内の出土遺物はない。

P10

SI6 内の西隅付近で検出された柱穴である。長径約 63 cm 短径約 59 cm、深度約 37 cm で円形を呈す。断面形は台形状である。写真からの推測では、工業棟本調査地点などにみられる IV 層灰黄褐色砂層による単層と思われる。遺構内からの出土遺物はない。

P11

SI6 内の南隅付近で検出された遺構である。長径約 57 cm 短径約 48 cm、深度約 33 cm でやや楕円形に近い形状を呈す。断面形は台形状に近い。IV 層灰黄褐色砂層による単層の覆土と、記録写真から推測される。遺構底部には人頭大の礫石が検出されたが、その性格は不明である。ただし柱穴ともなう礫石や根固石の可能性は少ないものと思われる。この遺構内の出土遺物として残されているものはない。

SI5

調査地点の西側で検出した。住居とした場合、明確な柱穴がなく、唯一、検出したのが P7 だけである。一方、この住居跡の詳細に関しては、覆土や検出面からの深度などを記した図面・記録類がほとんど残っていないので、詳細は明らかでない。残る図面類によって判明する法量は、長軸約 4.45m、短軸約 3.76m の方形を呈した遺構であったと思われる。

遺物の出土は北東隅を中心に集中している。出土遺物の総量は 293 点 4,020 g で、土師器（古代）224 点 3,250 g、黒色処理 35 点 427 g、須恵器 4 点 119 g、土師器（古墳）1 点 12 g、弥生土器 29 点 212 g である。接合・復元して、図化できた 2 点を掲載・報告する。

№86 は、黒色土器 A の杯 A である。15 cm を超える口径から屋代彌年という杯 A I に相当し、器高から B 形態に分類される土器片である。腰部には手持ちヘラケズリ調整を確認できないが、底部外面は回転糸切り後に縁辺部にヘラケズリ調整を見取れる。底部のこうした調整は古代 7 期以降には見出しがたいので、6 期以前の可能性が考えられる。内面には黒色処理後にミガキ調整も丁寧に行われており、光沢も残る。底径が 7 cm 前後あり、やや大きめのことも考慮して、古代 6 期（9 世紀前半）頃と判断した。

№87 は、須恵器杯 A の破片である。焼成不良の軟質タイプ（C タイプ）と思われる。口縁端部は内面をやや張り出して玉状に形作り、体部の傾きがやや外へ開く逆台形に近い器形から古代 6～7 期（8 世紀末～9 世紀前半）頃の製品と思われる。

カマドの痕跡や柱穴といった遺構の性格を示す内容にも乏しく、遺物の上でもそれを明示するようなものもない。上述の通り覆土や土層などの詳細な記録からも、遺構の様相や性格を推測することも困難である。残っていた図面類に従って住居跡（SI）として記載したが、確定することはむづかしく、遺構の性格は不明として報告しておきたい。ただし、掲載した遺物からはこの調査区南側に古代 6～7 期（8 世紀末～9 世紀前半）以降に堆積

したことは確実であると思われ、他の遺構の出土遺物とも考えあわせて、付近にこうした土器をほぼ同じころ(9世紀前半頃)に使用する環境・状況があった可能性は推測される。

#### P7

SI5とされた遺構内の南東隅付近で検出された遺構である。長径約51cm短径約44cm、深度約21cmのやや不整形な円形を呈す。断面形は逆台形に近い。覆土に関する詳細な記録はないが、残された写真から推測するに、工業棟本調査地点のIV層灰黄褐色砂層による単層と思われる。この土層内の混入物は不明である。この遺構内の出土遺物として保管されているものはない。

### B. 土坑類と遺物集中域など

調査区の北東隅付近で2基の土坑を検出した。いずれの土坑でも確認面付近で土器のまとまった検出が確認された。これらの他に、上述した住居跡周辺では遺物集中域(SQ)を2箇所検出したので、合わせて4基の遺構類について報告しておきたい。

#### SQ1

調査区の南東隅で確認した遺物の集中域である。これに伴う落ち込みなどは記録として残されていないため、なかったものと判断し遺物集中域として報告する。VI層黄褐色砂質土を確認面として遺物が残存したものと思われる。これに隣接して炭化物と焼土の可能性のある赤褐色土の集中域が検出されている。炭化物の範囲は長径約92cm短径約48cmで楕円形に近い不整形を呈し、赤褐色土の方は長径約76cm短径約72cmのほぼ円形を呈する。これらの断面観察の記録はない。

この集中域からの出土遺物は総量5点1,799gで、弥生土器1点528g、土師器(古墳)2点1,222g、黒色処理1点137g、須恵器1点142gである。その中で、接合・復元作業で時期などが判明した5点を掲載し報告する。

No.88は、土師器(古墳)の小型壺である。ほぼ完形で遺存するが、平底底部の周辺だけは器面が剥落する。他に口縁部の一部を欠損している。器形上の特徴としては、頸部から口縁部に大きく外反し口縁端部を面取り状に平らかに成形する点である。器形から見た壺形土器の分類では、松原古墳編年という壺E類に該当する。それ故、いわゆる小型精製土器の小壺でなく、この器形が小型化したと判じた。器面外面には、面取りした口縁端部を除いて精密なタテ方向のミガキ調整がほぼ全面に施されている。上述したように平底底部の周辺は器面が剥落し、器面調整はほとんど不明であるが、残った部分にはハケ目がミガキ調整の下に見出されたので、ハケ目調整後にミガキ調整を行った可能性が考えられる。口縁部付近は内面にもタテ方向のミガキ調整が残る。前述の通り、ほぼ完形のため内面の調整は、口縁部付近しか確認できず、胴体部は明らかでない。松原編年でも述べられているように、他地域の弥生後期の系譜を引く土器と思われ、在地系の要素が少ない。こうした土器がみられるのが松原古墳編年では、古墳前期の撮相1段階を中心とするため、この時期の土器と推測される。

No.89は、土師器(古墳)壺の上半部片である。外面の器面調整はハケ目を主体とする。頸部付近のハケ目調整は口縁部方向にほぼまっすぐ上方向で行われている。肩部から体部のハケ目調整は底部から口縁部(右下一左上)へ向けて斜め方向にハケ目調整が行われている。頸部から体部にはハケ目調整が良好に観察できるのに対して、口縁部付近はハケ目調整の後、ヨコ方向へのナデ調整が行われているため、ハケ目の残りは口縁端部付近だけである。内面も口縁部付近はヨコ方向のハケ目調整が行われているが、肩部から体部にかけてはヘラケズリ調整が行われる。いわゆる松原古墳編年という「ハケ目調整く字壺」の上半分と判じられる。ただ、下半部がないので器種部分のポイントの一つである最大径が体部の上位か中位かが判断できないことがあり、底部形状も平底か否かも不明である。しかしながら内外面の調整技法から壺H類と判じられ、松原古墳編年というH1類かH2

類の可能性が高い。よって、松原古墳群年の撮相2～4期に相当する可能性が高く、新潟シンボ群年の8～9期前半ごろと考えられる。

№90は、箱清水式の甕である。散点の破片が結合したが、多くの破片は注記が剥落していたため、これ以外の出土地点は不明である。器高の約2/3が残存している。弥生後期の甕の特徴である櫛描康状文が外面上半部に施され、下半部にはタテ方向のヘラミガキ調整が確認される。康状文の単位は7条で構成され、頸部の水平方向の康状文を挟んで口縁部と胴部上半に櫛描波状文が充填される。胴部下半の丁寧なタテ方向のヘラミガキ調整と櫛描波状文の境目には斜右下方へのハケ目が確認され、ハケ目→櫛描波状文→頸部ヨコ方向の櫛描康状文の順序で施文されている。下半部はハケ目→ヘラミガキ調整の順序である。器内面には横方向のヘラミガキ調整が上半部を中心に確認され、口縁部の方が濃密に残存する。このような施文状況や口縁部がやや長く形作られているので、松原弥生群年のⅢ類に分類される。この土器の最大径は土器の中位にあると推測される。この最大径はほぼ口縁径と近く、若干胴部部の最大径の方が大きい程度であることから、群年上のプロポーシオンによる分類ではⅢ類に相当すると見なされる。以上のような土器の特徴点を踏まえて群年上の時期を考慮すると、松原弥生群年においてⅢ類が主体となる第5段階か第6段階と考えられる。横方向の櫛描康状文の1単位分の長さやその静止部が2単位で確認されること、頸部最小径と肩部の接点に明確な稜が見出せないことから松原弥生群年のⅢB類の第5段階ごろの土器片と推測される。

№91は、黒色土器Aの杯Aである。器高がやや高いのでA形器に分類される。器内内部には、黒色処理に伴うミガキ調整の痕跡が良好に残り、光沢も確認できる。ミガキ調整に関しては、口縁部付近はヨコ方向のミガキが確認でき、下半部はタテ方向のミガキ調整が良好に残っている。それに対して外面は器面の摩滅が著しいため、腰部付近や底部外面の外縁部に行われた手持ちヘラケズリの詳細は確認しがたくなっている。また、回転糸切の痕跡も確認できない。底部径が6cmを超えることや内面の黒色処理にともなう調整が良好であることから、時期的には古代6～7期前半（9世紀前半～中葉）、特に古代6期（9世紀前半）の可能性が高い。

№92は、須恵器杯Aである。焼成がやや不良なため、全体が灰白色系の色調を呈す。厩代群年の軟質Cタイプに分類されると考えられる。底部もやや分厚いので色調と併せて考慮するとやや新しく古代7期前半（9世紀中葉）可能性もあるが、器形全体が逆台形と断定できるほど口縁径が開いているとは見なしがたいので、古代6～7期（9世紀前半～中葉）と報告しておきたい。

※施土や炭化物の集中域に接する遺物集中域のためこれらとの関連性が考慮され、カマドや地焼炉で使用されたものが廃棄の可能性も推測されるが、断定は避けておきたい。

## SK2

調査区東端付近で検出した。長径約172cm短径約130cm、深度約46cmの楕円形を呈す。断面形は台形状に近い。写真から推測するに、工業棟本調査地点のIV層灰黄褐色砂層による単層と思われる。確認面よりやや上面で形状の残存する土器が2個体まとまって出土した。それ以外にも土器2個体が土坑の壁面付近でも出土している。しかしながら、これら図面上の土器が現存する土器のいづれに該当するかは不明となってしまっている。整理作業の開始段階では、土器に伏せられたはずの札類や注記にこれらの旧遺構番号である「2号土坑」と記されているものはなかった。器形などから該当する遺物の適合作業を試みたものの、結局判明できなかった。結論としては、いづれかの段階で「2号土坑」を「2号住」（S16）に誤った可能性が推測される。よって、上述の4点の土器はこの報告内にあるとは思われるが、具体的には不明とせざるをえない。

遺構の時期や性格など詳細については不明である。

### SK3

SK2の東側約1.5m離れて検出された遺構である。長径約138cm短径約129cm、深度約37cmの円形に近い形状を呈す。断面形は台形状に近い。この遺構だけは図面内に覆土土層説明が残っており、5層に分層される覆土で埋没する。主に、IV層灰黄褐色砂質土を主体とする土層が上層部分に堆積し、中間部にはV層に相当すると思われる黒灰褐色砂質土が挟まる。VI層黄褐色砂層までの漸移層と思われる土層が下層部分（底部付近）に堆積する。検出面で土坑の中央付近には人頭大を超える大きな礫石が残存していた。この礫石がどのような目的・理由で置かれているのかは不明である。

礫石底面と同レベル・遺構確認面付近で土器がまとまって出土した。接合の結果、2個体が復元された。これらも含めて、遺構内の出土遺物は総重量13点924gで、弥生土器片8点482g、土師器（古代）3点392g、黒色処理1点44g、須恵器1点6gが出土点数であり重量である。その中から接合・復元作業で時期などが判明した2点を掲載し報告する。

№93は、土坑内から出土した破片数点が接合した中部高地系の高杯の脚部である。器面外面にはタテ方向のミガキ調整が脚部全体に行われているが、端部にはヨコ方向のミガキ調整が施される。内面はヨコ方向のハケ目調整が明瞭に観察される。なお、脚部には4つの透孔が開孔されていたと推測され、その内の2つの開孔部が残存する。杯部やそれとの接合部等が残存していないため、時期決定は困難であるが、開脚の角度や開孔があることから松原弥生編年の5～6段階の高杯脚部ではないかと思われる。

№94は、土師器（古代）の鉢と思われる。体部の最大径よりも口縁部径が広いため、小壺とは見なしがたく鉢として分類した。ただし、編年の土師器鉢類（A・Bタイプとも）には類別が見出せず、敢えて近似的例を見出すと、黒色土器Aの鉢Bに器形に近い。また、頸部のくびれによって口縁部付近は「く」字に外反する。これを根拠にすれば、古代7期（9世紀中葉）以降と考えられる。一方、須恵器の鉢A類にも器形が類似する点もあり、須恵器模倣の土師器である可能性も推測される。この場合、古代4期（8世紀後半）以降の製品と見なされる。

これらの復元土器の他に、須恵器片や黒色処理された土器片が混入する出土遺物の様相からは、時的には古代7期（9世紀中葉）以降には廃棄された土坑の可能性が推測される。この時、№93の赤彩のある弥生後期の高杯片をどのように理解するかが、問題となるが、明確な回答を持ちえない。それ故、これらを出土した遺構の詳細な性格については不明と報告しておきたい。

### SQ4

調査区のほぼ中央部で土器2個体が隣り合って検出された遺物集中域である。図面などによればこれに伴う落ち込みなどはなかったものと思われる。VI層黄褐色砂質土を検出面として遺物を検出したものと思われる。

この集中域からの出土遺物は総量4点1,721gである。ほぼ完形で出土した№98や口縁部が逆位で出土した№104を含めた器種別では、赤彩弥生土器片1点760g、土師器（古墳）3点961gである。接合・復元作業で時期などを判明することができた4点すべてを掲載し報告する。

なお、明確な根拠はないが、残存する遺物との照合によって№104が平面図左側の土器の可能性があり、右側は№98の可能性が考えられる。

№95は、赤彩された器台である。器台脚部にはタテ方向の細かいヘラミガキ調整が行われ、杯部外面にはヨコ方向ないしは斜め方向のミガキ調整が確認される。口縁端部は丸く成形されヨコ方向のナデ調整が見られる。内面にも全面的にミガキ調整が行われている。脚部には透孔が2つ確認される。その位置から本来は4単位の開孔と推測される。杯部底部は中空で開口されている。口縁端部を丸く成形してやや内湾する器形からは、松原古

墳編年分類の器台A類に分類されるものと推察される。赤彩器台の編年上では適合する類別資料が見られなかったため、詳細な時期は不明であるが、赤彩土器が展開する弥生後期から古墳時代初頭以降とだけ報告しておきたい。

№98も、中部高地型赤彩高杯である。松原弥生編年に従って、脚部の形態を分類すると、脚部Ⅱ類に当たるとのと思われる。一方、杯部は、口縁部が№97のように屈曲・水平でないことや杯部に段がないことをみれば、杯部A類になるとと思われる。ただし、脚部に二等辺三角形の透し孔があることや脚部端部が少し外反する点などはC類に近い。他に、口径が23cmもあって大型の部類に入ることや、脚部もA類としては長脚化しているのがC類に近いといえる。いわば、C類の脚部の上に一般的な杯の器形であるA類がのっているように思われる。外面の調整として細密なミガキ調整が確認され、杯部と脚部の接合部にはハケ目調整もわずかに残っている。器面内面にもタテ方向に緻密なミガキ調整が確認される。脚部には二等辺三角形透孔が2つ開孔している。完全に成形・開孔しているのは1つだけで、不完全なものも1つ、開口を意図したものの開口されていないものが1つあり、本来は3つの開口を意図していたと思われる。詳細な時期は明らかにできないが、ⅡC類の皿形の高杯とすれば、これが出現し三角形の透し孔が始まる弥生後期中葉、松原弥生後期編年の第3段階以降であることは確実である。他の遺物との時期関係を考慮して脚がやや開き気味であることを考慮すれば、第5～6段階のⅡC類にA類の杯部が接合されているとも見られる。いづれにしても三角形透し孔が未完成であることや、C類にするには杯部に有段を作らない反面、ミガキ調整や赤彩は丁寧に行うなど、未熟な実験的な器形・調整がこの土器の特徴といえる。

№104は、上述のとおり図版10のSQ4の平面図で左側の遺物に当たると思われる。完形で出土した土師器(古墳) 壺である。器面外面にはヨコ方向のハケ目調整が見られ、下半部にはミガキ調整が行われている。完形土器のため内面調整に関しては不明な点が多いが、頸部にはヨコ方向に水平なハケ目調整が見られる。口縁部がやや垂直に立つことや頸部が緩やかな「く」の字に屈曲をする器形、胴部下半に最大径が形作られる平底底部などの成形技法などから松原古墳編年分類の壺H類に相当すると推測される。松原報告書(古墳)では、壺H類が広く汎用されるようになるのが、撮相3段階以降とされているので、この土器の時期も同時期と考えられる。

№105は、土師器(古墳)の小型壺の破片である。器面の内外にはナデ調整を行い、内面の頸部以下にはさらにミガキ調整が確認される。この器種の分類基準の一つである最大径が判明するほど残存してないため細分は困難であるが、口縁径がすでに約12cmを超えるので、小型土器A類もしくはB類に相当すると考えられる。さらに肩部が張らない器形から体部に最大径があることが推測され、A類に当たる可能性が高いと思われる。不明な点が多いため、他の出土遺物も参考として古墳時代前期という以上に詳細な時期を明らかにすることはできない。

#### 試掘調査出土遺物

注記の中に「シ」と記された遺物が残されていた。こうした注記のあるものは試掘調査で出土した遺物と推測し、ここにまとめておいた。これらの中には「pit8」や「2号帯」など遺構と思われる内容を記したのもあるが、試掘トレンチの位置やトレンチ内の検出遺構平面図などが全くないため、試掘調査時の遺構に関しては不明とせざるを得ない。

試掘と思われる遺物は総点数で628点重量8,803gとなるほど多量である。土師器片が509点6,994g、黒色土器片が26点135g、須恵器片26点489g、弥生土器片65点1,085g、その他4点100gである。これらの中で、復元・接合の結果、時期などが判明した5点を掲載し、報告することとした。

№96は、試掘調査時のPit6で出土した須恵器杯Aである。灰色を呈した部分は全くなく、器面全体が椀系の

色調である。還元焼成まで至っていないと思われ、焼成不良な破片である。その上、器面全体に摩滅が激しく、底部外面の切離し技法は全く確認できない。内面にはわずかにクロコナデ調整が確認できる。外面も同様で、粗悪な残存状況である。編年上の時期決定要因を失っているが、墨代編年でいう軟質 C タイプに相当し、器形全体が逆台形と見なされること、口縁端部がやや丸味を帯びて成形されていることから、古代 6 期（9 世紀前半）ごろの須恵器片と思われる。

No.97 は、試掘調査で表土から出土した高杯杯部の口縁部小片である。屈曲して口縁部が水平に外反する鐮状口縁高杯（B 類）と思われる。器面外面にはハケ調整後、ミガキ調整が行われる。残った破片の外面には赤彩が全面に確認され、良好な残存状況が確認される。脚部が残っていないため断言しがたいが、杯部全体がやや浅くなる傾向が見られることや、他にこの時の調査で出土した土器類と時期的に近いとすれば、松原弥生編年の 6 段階ごろの可能性が高く中部高地型箱清水式高杯の終末期段階に当たると推測される。

No.99 は、試掘の表土から出土した弥生土器の壺の口縁部片である。外面には櫛波状文が残っている。櫛波は 5 条を単位として構成されている。頸部に櫛波状文はなく、肩部までその波状文が施文される。内面にはヨココナデ調整後にミガキ調整を施す。口縁端部は明確に面取りが行われ後が形作られている。肩部以下の器形が不明のため、時期は確定できないが、松原弥生編年の 5～6 段階の可能性が口縁部から頸部の器形によって推測される。

No.100 は、試掘調査出土した土師器（古墳）の器台脚部である。松原古墳編年で詳細な器種分類の基準となっている口縁部形態や杯脚部との器形関係が不明なため、さらに細かい分類はできない。上部を除く脚部外面にはハケ目調整の後、タテ方向の細密なミガキ調整が確認できる。内面にも脚部端部にヨコ方向のハケ目調整が残る。他に円形の穿孔が 3 カ所行われている。脚部がやや外反気味に開脚する器形や、外面のタテ方向ミガキ調整、円形の穿孔などから推測すると松原古墳編年分類の器台 B 類の可能性が高いと考えられる。よって、松原古墳編年で器台 B 類が見られる様相 2・3 の時期と推測される。

No.101 は、試掘調査の表土内で出土した土師器（古代）である。口縁部径や器高が約 20 cm あり、小壺という器種分類には相当しがたいので、古代の鉢類に入る土師器と考えられる。外面は底部から腰部にかけてヘラケズリ調整が施される。底部付近はほぼヨコ方向であるが、体部に近いほど斜め方向（左上→右下）のケズリとなっている。内面は下半にカキメ調整が確認される。器形や調整技法からみると土師器鉢の分類（A・B 類）には相当しがたく、黒色土器鉢 B 類に類似する。これが須恵器鉢 A 類との対応関係の中で分類されているため、この模倣に当たる土師器鉢とも考えられる。調整の他に肩部が張り上がらない器形から時期的には、古代 6～7 期（9 世紀前半～中葉）頃の製品と思われる。

#### 出土地点不明遺物

上述したように長年の保管や資料の散逸等により、出土地点が分からなくなった遺物が少なくない。そうした中でも一定の器形を残し、特徴や時期が判明するものを抽出し、図化して報告しておきたい。

No.102 は、台付土器の底部から高台部にかけての土器片である。高台部の内面だけでなく、壺壺の底部の内面にも黒色処理が残る。底部と高台部の取付部の外面には帯状に赤彩が残る。底部以外は残っていないが、外器面全体に赤彩が及んでいた可能性を推測させる。器形の大半が残存していないため、時期は不明である。

No.103 は、高杯の脚部片である。杯部は残存していない。器面外面には縦方向と斜方向のミガキ調整が観察される。透孔は 4 箇所開孔されている。内面（脚部上部）には輪痕度が確認されるが、下半部はミガキ調整が確認される。石川桑里編年ではこれに近い器種である高杯脚部 A 類に施される外面調整はタテ方向もしくはヨコ方向ミガキ調整であり、これに該当する可能性が見出される。松原古墳編年の高杯 B 類・開脚碗形高杯に該当する可

能性がある。これを参考にすれば、松原古墳編年の様相3に相当すると思われる。

№106は、古墳時代後期の土師器甕である。長年の保管により注記が不鮮明となってしまう。土器全体の残存率は高いが、上半部と下半部の接合点は確認できず、図面上で合致させたものである。上半部は口縁部から体部までの器高の約2/3に当たる。下半部は残る約1/3で底部までである。器面外面には口縁部から底部へ向けてヘラケズリ調整が行われる。内面にもヘラケズリ調整が施されている。上半部内面には調整が不十分なためか、輪痕が顕著に確認される。一つの顕著な特徴として、胴体部の一部分を大きく開口している。開口部の割口を観察したところ、角が丸まっているところが多い。開口部に相当する部分の破片が全く見出せないことから、二次利用として体部を人為的に開口したと推察される。具体的な開口の目的としては、U字型の開口状況などから甔などと一緒に使われ、カマドのような利用状況が想定される。胴部が丸味をもって張ることなくエゴシに近い形状や土器全体の器形として長胴化していることから、榎田編年で古墳Ⅳ・Ⅴ期（6世紀中・後葉～7世紀前葉）、墨代編年でいう古墳7期（MT15・TK10型式共伴の6世紀前葉）頃と判じられる。

№107は、須恵器杯Aである。体部の全般的な色調は灰色（2.5Y）系で焼成もやや不良であり、さらに口縁部付近は還元不良による淡橙色を呈する。こうした色調上の特徴の他に、底部からの器壁の立ち上がりやや直立気味で外湾する傾向があることも合わせて、古代6～7期（8世紀末～9世紀前半）頃の製品と思われ、特に7期に近い時期と判じられる。

№108は、須恵器杯Aの破片だが、約3/4ほどが残る。色調が灰白色の2.5Y系で墨代編年でいう焼成不良の軟質タイプ（Cタイプ）と思われる。体部の一部は橙色を呈し、還元不良が看取される。器壁の立上りの傾き角や口縁端部がやや外反する特徴から古代7期（9世紀前半～中頃）の製品と思われる。

№109は、須恵器杯Aで約半分が残存する。これも灰白色（2.5Y）系の色調で、焼成が良好とは言いたく墨代編年の軟質タイプ（Cタイプ）と見なされる。体部には逆位（倒位）で「刀」という文字が墨書され肉眼で判読できるほど良好に残る墨痕である。ただ、土器が軟質なため全体的な磨滅に伴って若干薄くなっている。器形上の特徴として、底部と接する腰部はややくびれて凹むが、その直上は少し張り出す。軟質化した須恵器で器壁の立上り角度などから古代6～7期（8世紀末～9世紀前半）頃の製品と判じられる。

№110は、土師器（古代）の小壺Dカキ目なしクロロナデ調整のみの小壺である。口縁の一部を除き、ほぼ完形に近い。肩部～体部の張り出し具合や口縁部の傾きなどから古代6期～7期（8世紀末葉～9世紀前半）ごろの製品と思われる。

№111は、土師器（古代）甕Ⅰの破片である。口縁部に面取りが行われるBタイプで、器面外面の頸部付近にはヘラか棒状の道具類を並べて施した叩き目のような痕跡が見られる。頸部から肩部付近にはハケ目調整が残っており、その下の体部には底部方向へのヘラケズリ調整が確認される。よって、外面の調整はクロロナデ→ハケ目→ヘラケズリで施されている。面取りが行われていることや口縁部の外反角が外へ傾くこと、肩部の張り出し具合などを考慮して古代6期（9世紀前半）ごろの遺物と思われる。

№112は、土師器（古代）甕Ⅰの口縁部片である。口縁端部を面取りするBタイプである。外器面はクロロナデ調整後にハケ調整を口縁端部直下より底部方向に向けて行う。その後、ヘラケズリ調整を同じく底部方向に向け施す。内面は口縁部までヨコ方向のハケ目調整を行った後に下方向に向けてナデ調整を行った痕跡が看取される。内面の横方向のハケ目調整はBタイプには少ない可能性がある。口縁部の外反する傾斜角や肩部から体部へ張り出すことなく真っ直ぐに下行する形状によって、時期的には古代6期（9世紀前半）ごろの土師器片と推測される。

## 第VI章 結語・まとめ

3地点の本発掘調査に関する整理成果を踏まえ、明らかとなった遺跡の内容や様相について、最後にまとめて結語としておきたい。

### 1 工業棟 本調査

良好な環境・状況下での調査ではなかったが、判明した成果から調査地点の性格を検討してみたい。

最下層で検出した自然流路跡から元々調査地点は、河川(自然流路)が流れる場所であった可能性が高い。この流路跡の埋没土を地山として古代以降の遺構が構築されていることを考慮すると、奈良平安時代以前にこの流路は離水し人々に利用される環境になっていたと考えられる。

この流路埋没土に構築された長楕円形の溝状土坑について、性格は明らかにできなかった。しかし、人為的に掘削されたものであることを考慮すると、古代以降、人々が開発・利用し始めたことは明らかである。一方で、遺構覆土の大半が細砂層で埋没しており、元々あった流路の影響からか、利用開始後も水害の影響を受けやすい環境にあったと思われる。

出土遺物は、顕著な成果を見出せなかった。その一因は遺物包含層が後世の開発行為によって大きく削平されており、また校舎改築など学校内における開発行為によりカク乱されたためと推測される。しかし、報告した遺物の中に中世・鎌倉室町期の土器片が見出されることは注視される。当該期の遺跡は遺物量が少ないのが一般的である。それにもかかわらず、珠洲焼や山茶碗など北方や南の瀬戸地域からの搬入遺物が検出された背景には、付近に中世の遺跡が残存するか、もしくはそれがあった可能性を示唆する。市中においては中世の文献史料が散見するにもかかわらず、それを反映する中世遺跡がほとんど見出せない。それを解明する雄辯となることを期待したい。

以上、十分な成果を得られなかったため、調査地点の遺跡の性格に言及することは困難であり、ここではその明言は避けたい。今後、Ⅱ期工事にともなう発掘調査も控えており、こうした周辺の状況が少しでも明らかになった上で再考することとしたい。少なくとも何らかの人為的な行為が残される場所であったと推測される。

### 2 温室緊急 調査

試掘結果では遺跡の内容を十分に把握できなかったためか、緊急調査にもかかわらず意外に良好な遺物がまわって出土した調査である。

遺物の時期は厩代編年の古代6期～7期(9世紀前半～中葉)を中心とする。器種構成も土師器の杯や甕類が主体となり、集約的な様相を反映している可能性もある。残存率も高く、器形のほとんどが残っている遺物が見られるなど良好な状況といえる。出土状況は包含層出土で遺構内遺物ではない。出土層が現在の地表面から深くないにも関わらず、陶磁器類の混入もほとんどない。調査対象地は畑地として利用され続けていたためか遺物包含層V層黒灰褐色砂層が後世の校舎改築等によってカク乱されることなく良好な堆積状況にあったことが背景にあるのではないかとと思われる。

各温室の掘削範囲が限られていることもあり、明確な遺構は検出されなかった。土層堆積状況やその断面観察から、調査地点は自然流路の肩部(岸部)付近に近いと推測される。それが、遺構が見られなかった一因であると思われる。他方、こうした調査所見に従うと、出土遺物が本来の位置を喪失している可能性も考慮される。確



かに、出土した遺物は元々川辺で廃棄（遺棄）された土器群でその状況を失わないうまま埋没し、今回出土した可能性もある。しかしながら一方で、他の地点で使用されていたものが川の流れとともに流失・到達した上で、調査によって出土した可能性も考えなければならない。この場合、元の地点がどこになるのかが問題となるが、それを検討する手がかりさえない。仮に流失し、二次堆積としても、出土した土器群が密集して出土し、その破片が広く散乱していないことや各土器片の磨滅があまり観察されないことから、それほど離れた地点から流失したものは考えがたく、近隣にこれらの土器を使用する地点があったと推測される。この地点で廃棄されたとしても、流失・到達したとしても、上述した器種構成をも加味して、土器を使用した人達の集落跡が近隣に所在した可能性は十分に推測される。

具体的な集落跡の可能性の一つを示すならば、最も近くで竪穴住居跡など集落の痕跡が見出されたのは、八幡地区の墨坂神社の南前における国道 403 号拉幅改良工事に伴う発掘調査である。石組みカマドをもつ竪穴住居跡が 1 軒検出されている。この住居跡まで調査地点からは約 500m なので、この住居跡が属する集落か、その付近の集落等からこれらの土器が持ち込まれ遺棄されたか、もしくは同じような他の集落跡から流失した可能性が想定される。

このように、百々川・八木沢川扇状地の扇端部付近に立地し、出土した土器がこの遺跡から遠くない地点に古代の集落跡が存在したことを暗示するとともに、調査地点が大字「須坂」で、「墨坂神社」と関連深いことを考慮すると、出土土器が示唆する集落跡がこの神社と何らかの関係をもって生活を営んでいた集落跡の可能性も推測される。

### 3 食品加工実習棟 本調査

発掘調査自体は平成 2(1990)年度に行われたものと思われ、これまで報告書の刊行がなかったので、この機会に整理調査を行い、遺跡内容を公表するに至った。写真や図面類の一部は既に喪失しており、遺構に関しては確実な事実関係しか報告できていない。土層についても詳細は不明である。よって、記録類がいくらか残る、竪穴住居跡 1 軒と土坑 2 基、遺物の集中的な出土域 2カ所等を中心に報告した。

主要な遺構である SI6・竪穴住居跡の出土遺物を概観すると、2 時期の遺物が混入していると思われる。一つが松原編年という弥生 6 段階から同古墳様相 1～3 段階にあたる時期で、弥生末期～古墳初頭（2 世紀末～3 世紀中頃）の遺物である。遺物の器種構成は、壺甕類や高杯が主となり、それ以外の器種はほとんど見られない。近隣地域における弥生末期～古墳初頭の類似遺跡が、長野市四ツ屋遺跡や松原遺跡、中野市七瀬遺跡や北平 6 号墳などに限られ、少ないため、稀少な遺物・遺跡の可能性はある。ただ、それが比較検討を困難にする一因となり、詳細を明らかにできず、課題として残っている点も多い。

もう一つの時期が温室緊急調査で出土した遺物とほぼ同じ時期、墨代編年という古代 4～8 期で、特に古代 6～7 期を中心とする時期の遺物である。こちらの器種構成は、温室同様に杯・甕類が多い。

このように大きく時期の異なる遺物をどのように理解すべきか、出土状況等に関する確実な資料を失った状況下では明らかにしたい。住居跡に関連して、炉跡かカマド跡に関する記録があれば推測することもできるが、それもなく、2 時期の遺物の埋没過程については確定的なことを言及できない。

ただ、上述した 2カ所の本調査の成果を参考にして、あえて推測するならば 2つの可能性が指摘できる。一つはこの遺構が古代 6～8 期・9 世紀代の住居跡で、平安時代初頭（9 世紀）頃におこった水害などによって、一気に埋没した可能性である。これを示唆するのが、『日本三代実録』にみられる貞観から仁和期の洪水記事で、これに代表される水害が北信地域で他にもおこった可能性が考えられる。実際、井上幸高遺跡群の発掘調査でも

川辺に近接する古代の住居跡が礫石を伴う大規模な水害によって廃絶している資料も検出されている。これらを根拠として推測すれば、付近から流されてきた弥生末～古墳初の遺物が、水害とともに流入し住居跡にあった古代の遺物と一緒に埋没したと考えられる。

もう一つが、この住居跡は弥生末～古墳期の住居跡で、住居跡廃絶とともに廃棄された土器群が当該期の遺物群と考えられる。それがある程度埋没後、上記の水害が近隣の集落から搬入されて住居跡に古代の土器群が入り込んだ可能性も想定される。

弥生～古墳期の遺物の残存率が高いことや、抽出・掲載した土器をはじめ弥生・古墳期の遺物の方が量的に多いことから考えると、住居跡や出土遺物の埋没過程としては後者の推測の方が可能性は高いと思われるが<sup>1</sup>、上述の通り、これを確定するためには、弥生・古墳期の土器と古代の土器の出土状況の差異が認められなければならないが、それを示す明確な根拠・資料を欠くため、可能性の域に止めたい。

時期的な問題は明らかにできないとしても、堅穴住居跡が検出されている以上集落跡に関わる可能性は十分に考えられる。上述の通り、須坂市中で堅穴住居跡が検出されたのは大字八幡の墨坂神社南前であり、これ以外に住居跡が検出されているのは小河原遺跡群や高橋遺跡以北で、その間では今のところ、検出されていない。そうした点では、大字八幡で検出された堅穴住居跡が所属する集落の最も北側に位置する可能性が考えられる。さらに北側にあたる園芸高校内に集落跡があったとすれば、須坂市中の古代の集落跡の様相が、さらに具体的に判明するとともに、それが弥生末～古墳初頭まで遡る可能性が見出された。またこうした集落跡は農耕などに伴う年中行事に際して神社と密接な関係をもっていたので、集落と関係する神社をめぐり新たな可能性が見出されるかもしれない。

<sup>1</sup> 仮に前者とした場合、弥生・古墳期の土器類の破損状況が激しくなり、本報告で記載したほどの残存率を保有していない可能性が考えられる。よって、後者の可能性が高いと思われる。

## 引用・参考文献

- 泉森校 (編) 1992『本郷大塚古墳』
- 加藤学・荒川隆史 1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』(財)新潟県埋蔵文化財事業団
- 春日真実 1999『第4章古代第2節 土器編年と地域性』新潟県考古学会編『新潟県の考古学』高志書院
- 上高井誌編纂会 (編) 1964『上高井誌 (自然編)』
- 上高井教育会 2002『上高井の自然』
- 上高井誌編纂会 1964『上高井誌 (歴史編)』
- 榎原健 1961『長野県須坂市須坂置芸高校校舎出土の弥生式土器について』『信濃』Ⅲ13-8号
- 佐々木清 2005『消費遺跡での土器・陶器の組合せおよび貿易陶磁の編年 中部』全国シンポジウム「中世産業の隆相～生産技術の展開と編年～」実行委員会『全国シンポジウム「中世産業の隆相～生産技術の展開と編年～」資料集』
- 須坂市教育委員会 1977『天神第1号埴輪調査報告書』
- 須坂市教育委員会 1978『行人塚古墳』
- 須坂市史編纂委員会 1981『須坂市史』
- 須坂市教委 1982『須坂市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 榎場遺跡』
- 須坂市教育委員会 1989『坂田遺跡緊急発掘調査報告書』
- 須坂市教育委員会 2014『平成23年度 須坂市内発掘調査報告書』
- 須坂市教育委員会 2004『長野県須坂市 市道置芸高校井上線 (都市計画道路井上線) 道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 井上・幸高遺跡群 井上氏居館址南遺跡』
- 須坂市 2011『須坂市誌』第1巻自然編
- 財)新潟県埋蔵文化財事業団 2008『北越新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 北前田遺跡Ⅰ・北新田遺跡Ⅰ』
- 財)長野県埋蔵文化財センター1997a『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16-長野市内その4-篠ノ井遺跡群』
- 財)長野県埋蔵文化財センター1997b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13-小布施町内・中野市内その1・その2-飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山竊跡・池田堀竊跡・牛出古竊遺跡』
- 財)長野県埋蔵文化財センター1998a『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・縄輪6 弥生後期・古墳前期』
- 財)長野県埋蔵文化財センター1998b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14-中野市内その3・豊田村内 牛出遺跡・菰山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺跡・八号地遺跡』
- 財)長野県埋蔵文化財センター1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡』
- 財)長野県埋蔵文化財センター2000a『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・縄輪3 弥生中期・土器本文』
- 財)長野県埋蔵文化財センター2000b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28-更埴市内その7-更埴糸屋遺跡・墨代遺跡群 (含む大境遺跡・塩河原遺跡)』
- 鳥羽英雄 1998『古墳時代の土器編年』(財)長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28-更埴市内その7-更埴糸屋遺跡・墨代遺跡群 (含む大境遺跡・塩河原遺跡) -弥生・古墳時代編-』
- 鳥羽英雄 1999『第1節墨代遺跡群における古代の土器編年-善光寺平南線の7世紀前半～9世紀後半の土器編年』(財)長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26-更埴市内その5-更埴糸屋遺跡・墨代遺跡群 (含む大境遺跡・塩河原遺跡) -古代1編-』

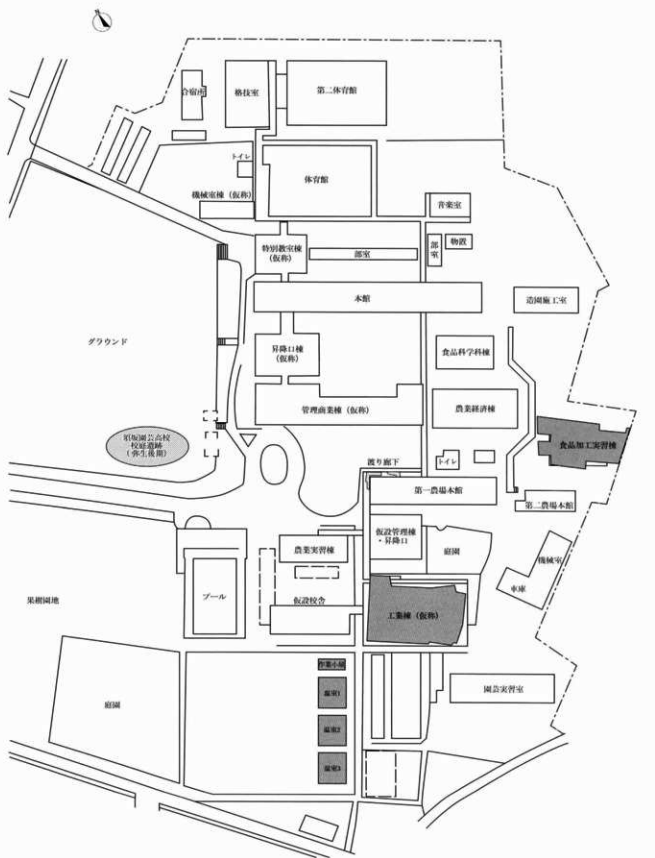
- 鳥羽英継 2000a 「第2節 厩代遺跡群における古代の土器編年—善光寺平南縁の10世紀前半～11世紀後半の土器編年」（財）長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 27—更埴市内その6—更埴条里遺跡・厩代遺跡群（含む大境遺跡・樺河原遺跡）—古代2・中近世編—』
- 鳥羽英継 2000b 「善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の土器編年」（財）長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 28—更埴市内その7—更埴条里遺跡・厩代遺跡群（含む大境遺跡・樺河原遺跡）—総論編—』
- 長野県立歴史館監修 2002 『小河原郷訪 松川原状地の里』 自費出版
- 長野市教育委員会他 1980 『長野市の文化財第9集 四ツ屋遺跡（第1～3次） 徳間遺跡 塩崎遺跡群（第3次）』
- 長野市教育委員会 1993 『洗川原状地遺跡群 本村東沖遺跡—長野高等学校校舎改築事業に伴う発掘調査報告書』
- 永峯光一 1967 「長野県上高井郡東村石小屋洞窟発掘」『信濃（Ⅲ）』9巻5号、
- 永峯光一 1965 「長野県上高井郡東村仁礼山石小屋洞窟の調査について」『信濃考古』14号
- 永峯光一 1967 「長野県石小屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社、
- 永峯光一 1968 「石小屋洞穴発見の微塵起線文土器『古代文化』20巻8・9号、
- 永峯光一 1982 「石小屋洞穴遺跡」『長野県史』考古資料編主要遺跡（北・東信）
- 原田和彦 2007 「千曲川流域における古代寺院」川崎保編『信濃国の考古学』雄山閣出版
- 藤澤良祐 2008 「東濃型山茶碗の型式編年」『中世瀬戸焼の研究』高志書院
- ふるさと須坂歴史と文化財編纂委員会編 1988 『ふるさと須坂 歴史と文化財』須坂市教育委員会
- 吉岡康暢 1995 『中世須恵器の研究』吉川弘文館



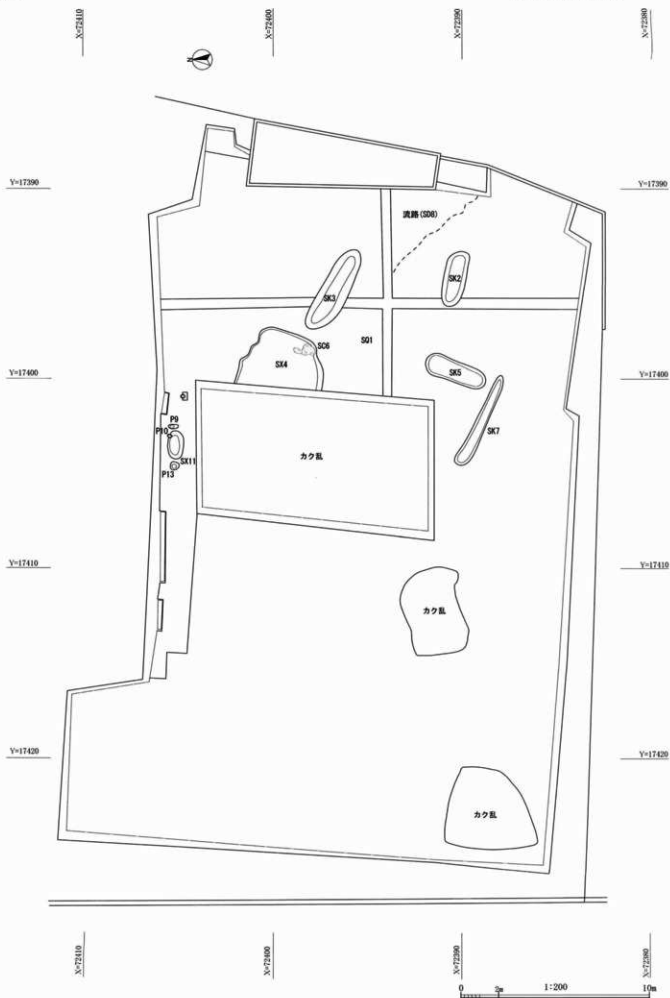
建物観察表(2)

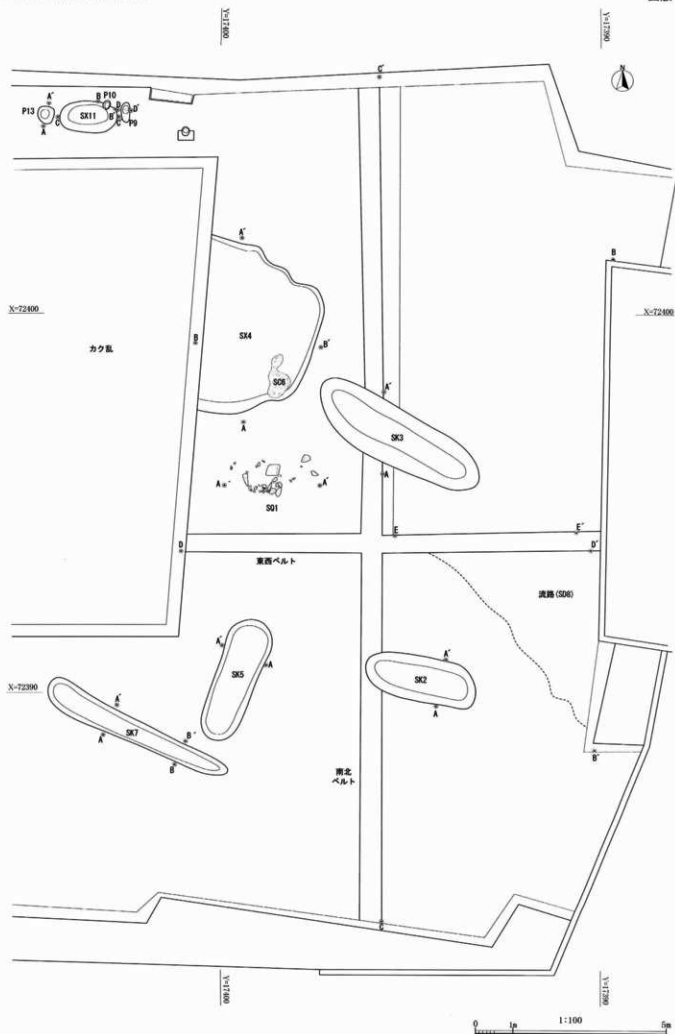
建物番号	種別	出仕位置	面積 (㎡)	建築年	構造	色調	塗土	外壁	内壁	時期	備考
43	事務所	事務所等・階段	13.0	3.7	5.7	145	12/15	中々不良	灰白/白/0	白	古代理議
44	事務所	事務所	—	(2.4)	7.2	30	—	中々不良	灰白/白/1	古代理議	
45	事務所	事務所	11.7	(5.2)	—	220	13/15	良	黒・黒・黒・黒	古代理議	
46	事務所	事務所	20.1	(4.6)	—	20	2/15	良	白・黒・黒・黒	古代理議	
47	事務所	事務所	21.4	28.9	5.0	900	12/15	良	黒・黒・黒・黒	古代理議	
48	事務所	事務所	23.2	20.1	4.0	1000	4/15	良	白・黒・赤・赤	古代理議	
49	事務所	事務所	23.9	31.3	4.0	1200	13/15	良	白・黒・赤・赤	古代理議	
50	事務所	事務所	22.8	(26.0)	—	881	8/15	良	白・白・赤・赤	古代理議	
51	事務所	事務所	22.0	(13.2)	—	322	4/15	良	白・白・赤・赤	古代理議	
52	事務所	事務所	13.1	4.3	5.8	49	2/15	良	黒・赤・黒	古代理議	
53	事務所	事務所	13.3	3.8	5.7	67	2/15	良	白・黒・赤・赤	古代理議	
54	事務所	事務所	—	(2.1)	—	—	2/15	良	白	古代理議	
55	事務所	事務所	12.4	3.9	5.6	30	2/15	中々不良	白	古代理議	
56	事務所	事務所	22.0	(13.2)	—	322	4/15	良	黒・赤・黒	古代理議	
57	事務所	事務所	22.0	(13.2)	—	142	4/15	良	黒・赤・黒	古代理議	
58	事務所	事務所	22.0	(14.0)	—	66	2/15	良	白・黒・赤・赤	古代理議	
59	事務所	事務所	—	(1.1)	6.0	29	—	中々不良	黒/白/0/1	不明	
60	事務所	事務所	22.2	(5.7)	—	181	10/15	良	白・赤・黒	他事務所と同様	
61	事務所	事務所	5.5	8.3	4.0	189	16/15	良	白・黒・赤・赤	他事務所と同様	
62	事務所	事務所	17.8	(5.1)	—	53	2/15	良	白・赤・黒	他事務所と同様	
63	事務所	事務所	20.3	(6.7)	—	68	2/15	良	白・赤・黒	他事務所と同様	
64	事務所	事務所	21.2	(5.9)	—	142	4/15	良	白・赤・黒	他事務所と同様	
65	事務所	事務所	24.2	(5.9)	—	182	1/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
66	事務所	事務所	—	(3.0)	17.8	50	—	中々不良	黒・赤・黒	不明(古代理議)	
67	事務所	事務所	20.2	14.6	10.2	4975	13/15	良	白・黒・赤・赤	他事務所と同様	
68	事務所	事務所	19.2	(11.7)	—	96	2/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
69	事務所	事務所	17.3	(20.9)	—	1015	12/15	中々不良	黒・赤・黒	他事務所と同様	
70	事務所	事務所	12.8	(14.9)	—	540	10/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
71	事務所	事務所	8.8	8.3	3.9	212	16/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
72	事務所	事務所	6.7	5.0	2.8	101	16/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
73	事務所	事務所	10.9	7.5	4.2	240	16/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
74	事務所	事務所	7.9	7.0	3.1	69	8/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
75	事務所	事務所	10.4	7.1	3.6	69	8/15	良	白・赤・黒	不明(古代理議)	
76	事務所	事務所	—	(11.2)	14.3	320	—	中々不良	黒・赤・黒	不明(古代理議)	
77	事務所	事務所	—	(11.2)	14.3	320	—	中々不良	黒・赤・黒	不明(古代理議)	







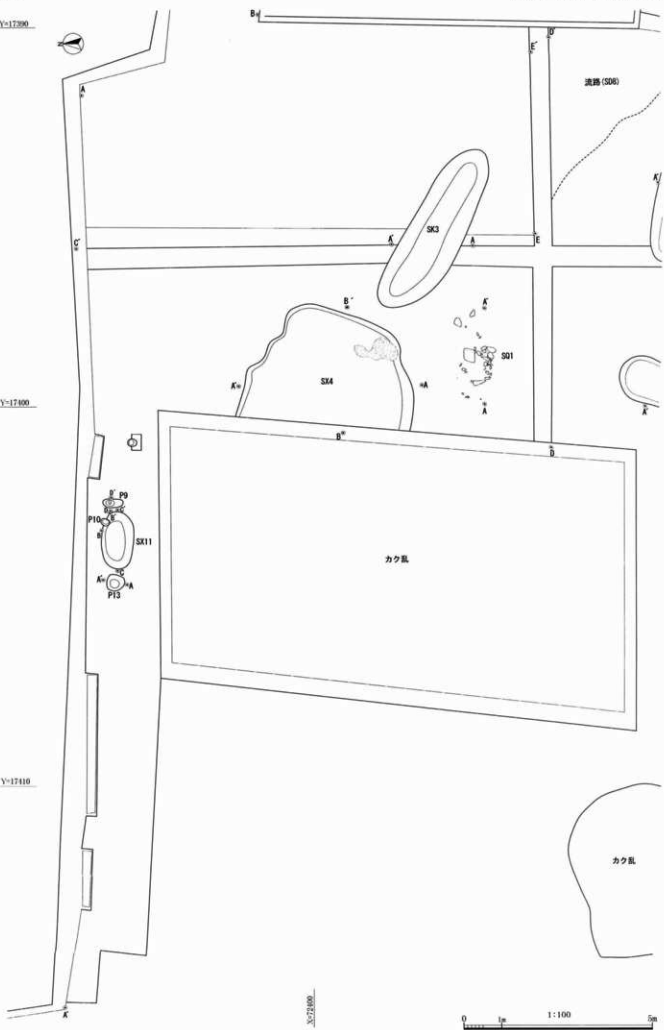


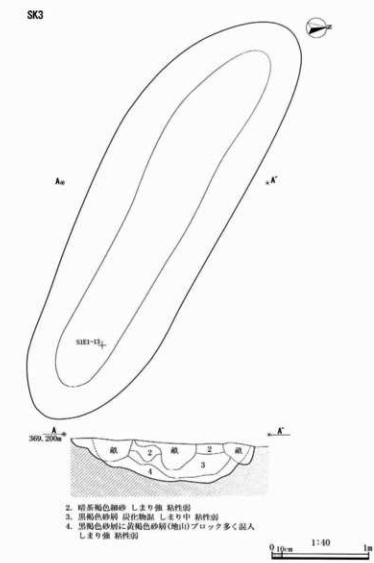
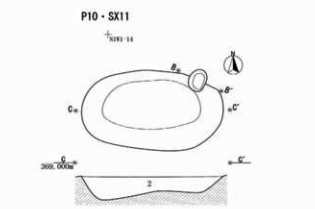
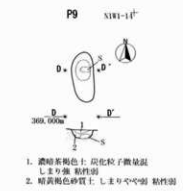
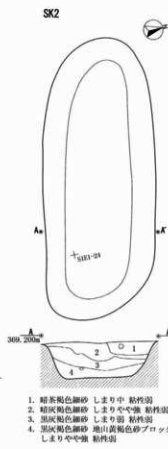
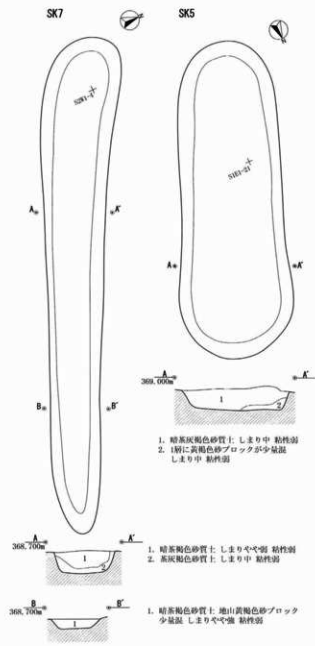


Y=17300

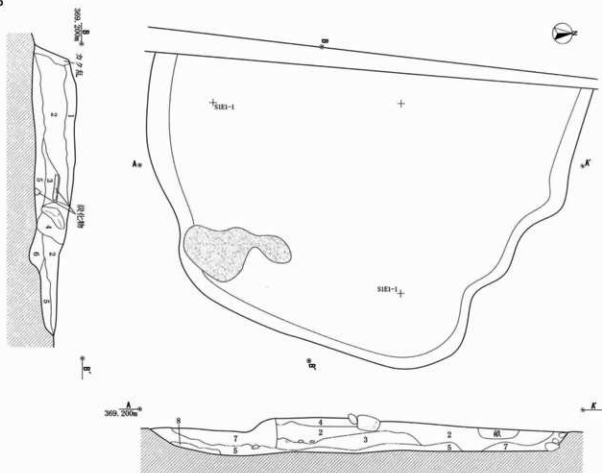
Y=17400

Y=17410





SX4・SC6



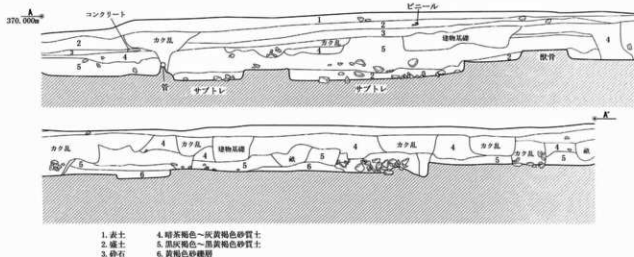
1. 暗褐色砂質土 しまりやや強 粘性弱
2. 暗褐色砂質土 炭化物 少量混 しまり中 粘性弱
3. 灰褐色砂質土 炭化物 炭土粒子多く混 しまり中 粘性弱
4. 暗褐色灰褐色砂質土 しまりやや強 粘性弱
5. 暗褐色砂質土と地山・黄褐色砂ブロックのツミナ状混 しまり中 粘性中
6. 暗褐色砂質土 炭化物・暗灰白色粘質土ブロック多し しまり弱 粘性弱
7. 濃二ヶ色褐色砂 しまり強 粘性弱
8. 暗褐色砂 しまり強 粘性弱

0 10cm 1:40 1m

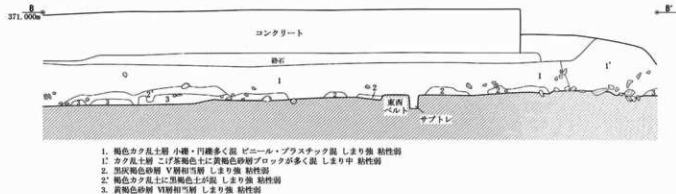
SQ1遺物出土状況図



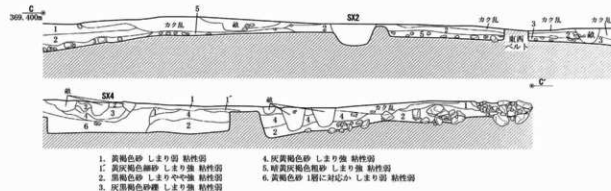
## 北壁



## 東壁



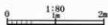
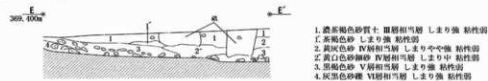
## 南北ベルト



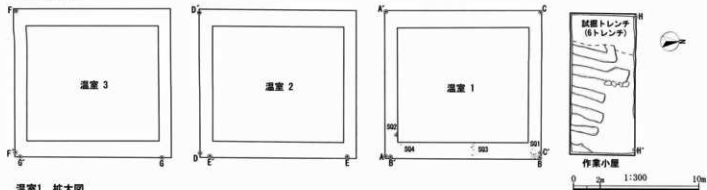
## 東西ベルト①



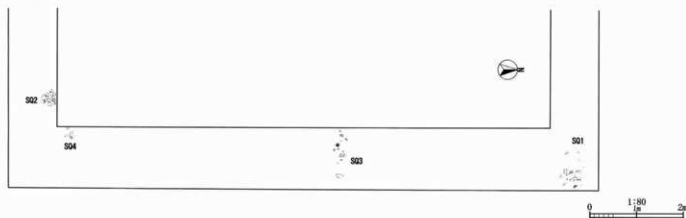
## 東西ベルト②



調査地全体図



温室1 拡大図

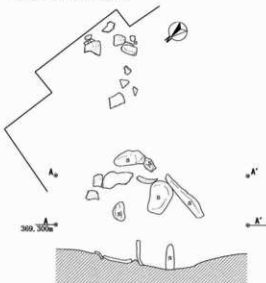


温室1 遺物集中域 (S0) 出土状況図

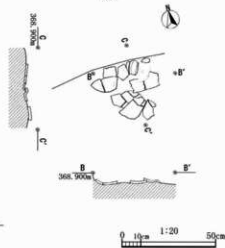
上層 (1回目) 遺物出土状況図



下層 (2回目) 遺物出土状況図



S02



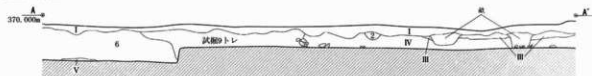
S03遺物出土状況図



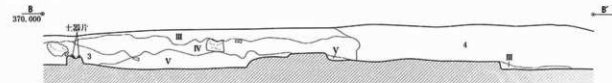
S04遺物出土状況図



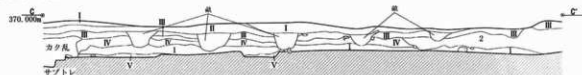
温室1 南壁



温室1 東壁



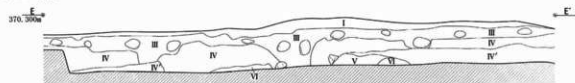
温室1 北壁



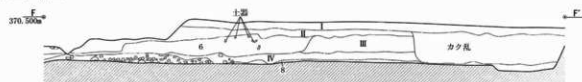
温室2 南壁



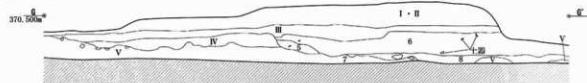
温室2 東壁



温室3 南壁



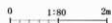
温室3 東壁



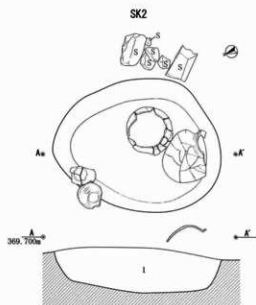
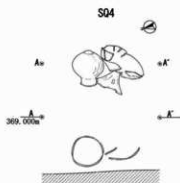
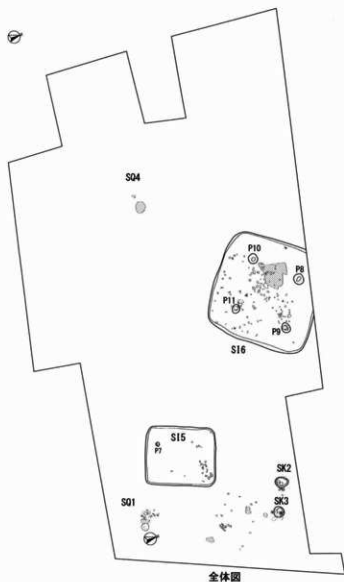
作業小屋 北壁



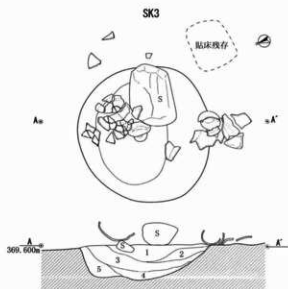
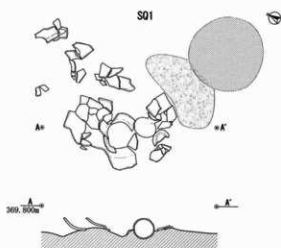
- |   |   |
|---|---|
| <p>I. 表土<br/>                 II. 暗茶褐色土(かく丸土)<br/>                 III. 暗褐色土<br/>                 IV. 褐色～黄褐色砂もしくは礫<br/>                 IV'. 暗黄褐色小礫<br/>                 V. 灰茶褐色砂質土(古代遺物包含層)<br/>                 VI. 黄褐色砂礫</p> | <p>1. 灰茶褐色砂面粘質土 円礫混 しまりやや強 粘性やや弱 河川堆積物<br/>                 2. 黄褐色粘質土 砂礫混 しまり弱 粘性やや強 遺物集中出土(V層の一部)<br/>                 3. 暗褐色～暗茶褐色砂質土 小礫微量混 しまり強 粘性かなり弱 遺物はIV層よりほとんどなし<br/>                 4. 茶褐色土 黄褐色砂質土混 しまり強 粘質弱<br/>                 5. 灰茶褐色土 細砂礫混混 しまり中 粘性弱<br/>                 7. 暗茶褐色砂 しまりやや強 粘性弱<br/>                 8. 黄褐色砂 しまり中 粘性弱</p> |
|---|---|







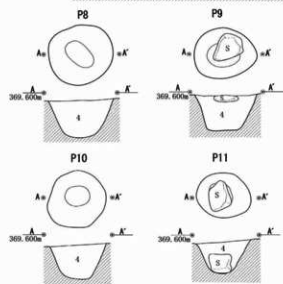
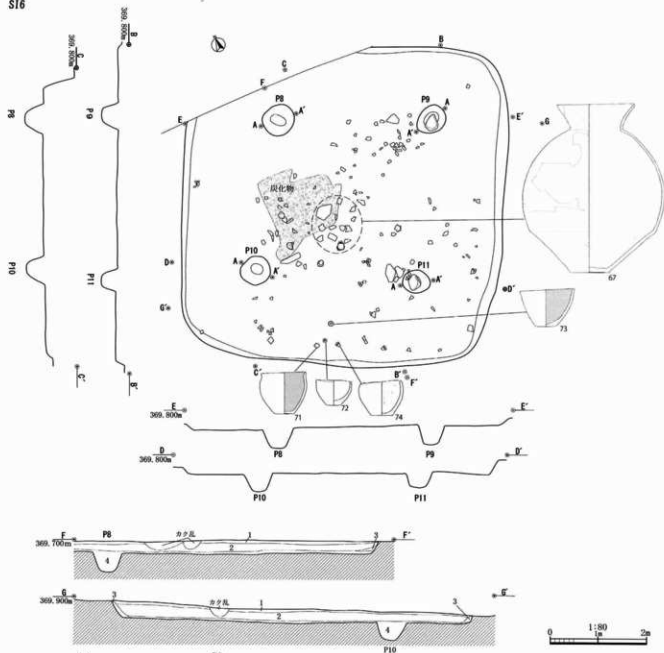
1. 灰黄褐色砂質土



1. 灰黄褐色砂質土
2. 灰黄褐色砂質土・黄褐色砂ブロック層
3. 黒灰褐色砂質土
4. 黒灰褐色砂質土・黄褐色砂ブロック多く混
5. 黄褐色砂

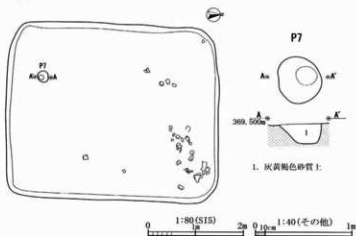


S16



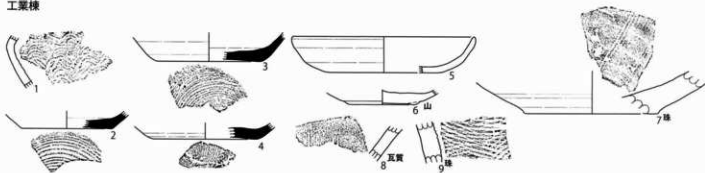
1. 茶褐色土(Ⅰ) 砂含む。2よりやや硬くしまりあり
2. 茶褐色土(Ⅱ) 砂と腐植土
3. 暗茶褐色土 砂含む やや硬っぽい
4. 粉色土 全体として蒸っぽくかなり固い

S15



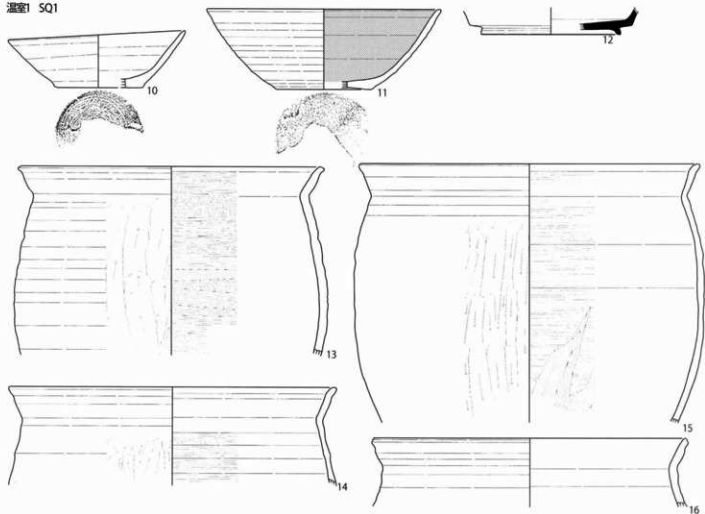
1. 灰黄褐色砂質土

工業棟

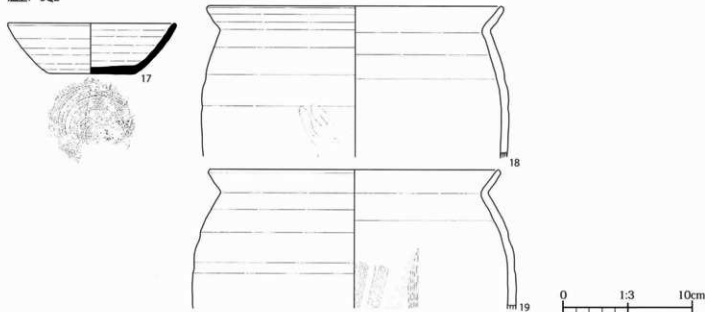


温室緊急調査(1)

温室1 SQ1

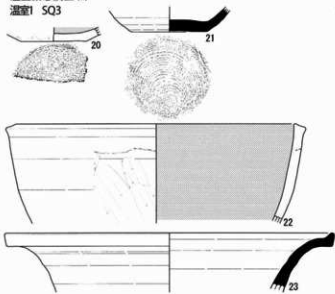


温室1 SQ2

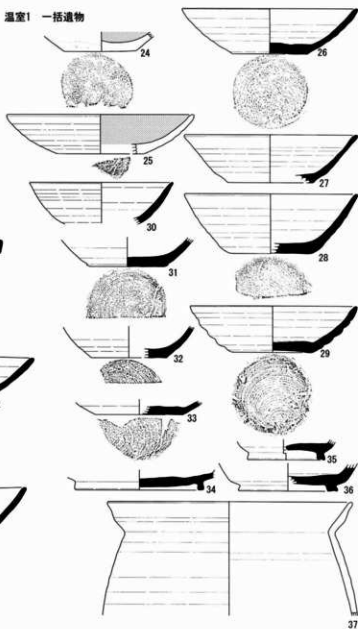


温室緊急調査(2)

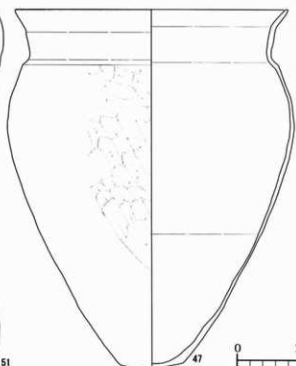
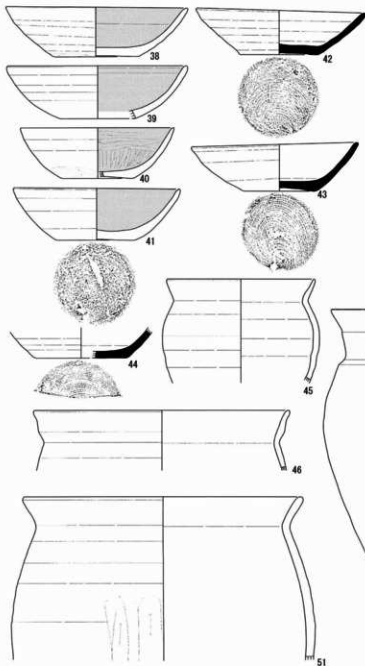
温室1 SQ3



温室1 一括遺物

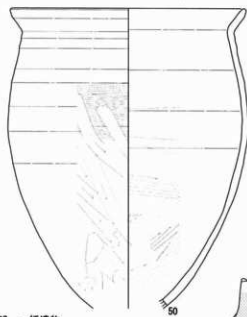
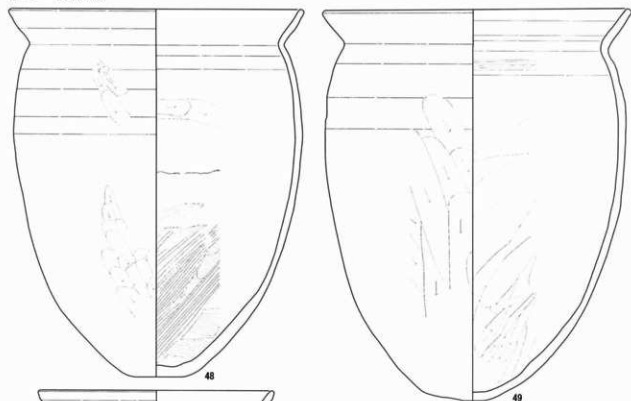


温室2 一括遺物(1)

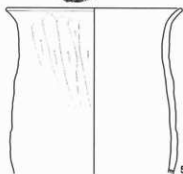
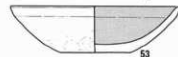


温室緊急調査(3)

温室2 一括遺物(2)

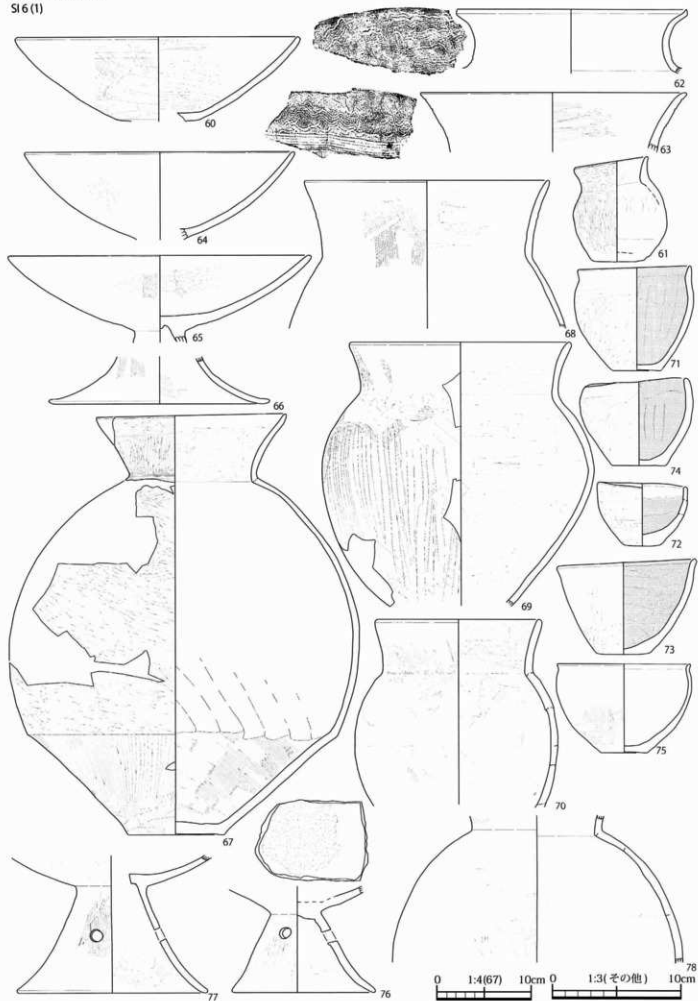


温室3 一括遺物



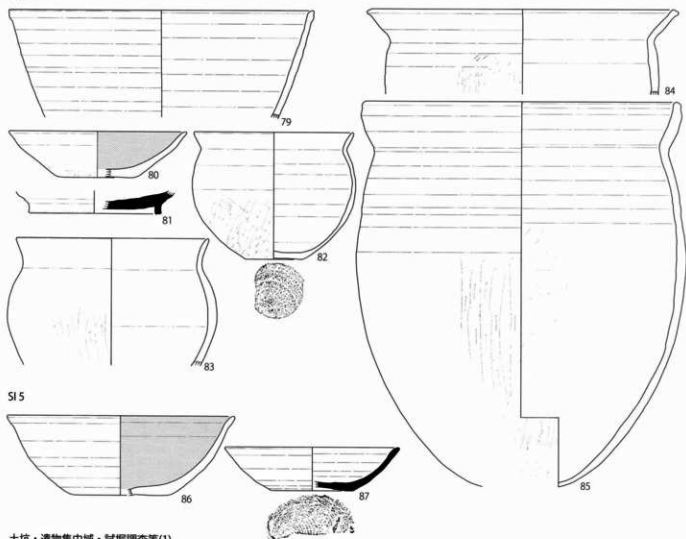
食品加工実習棟(1)

SI6(1)

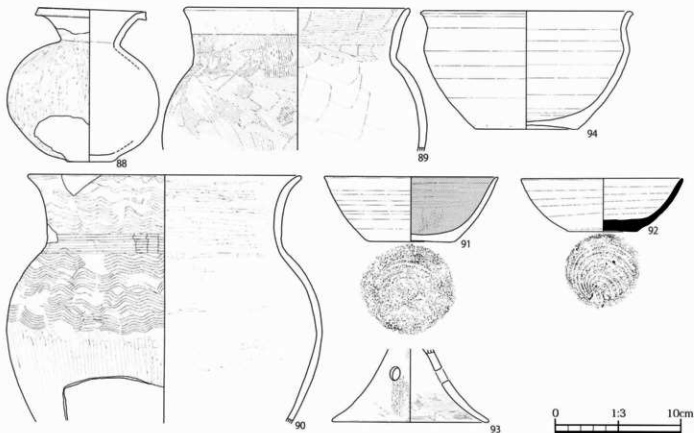


食品加工実習棟(2)

SI 6 (2)

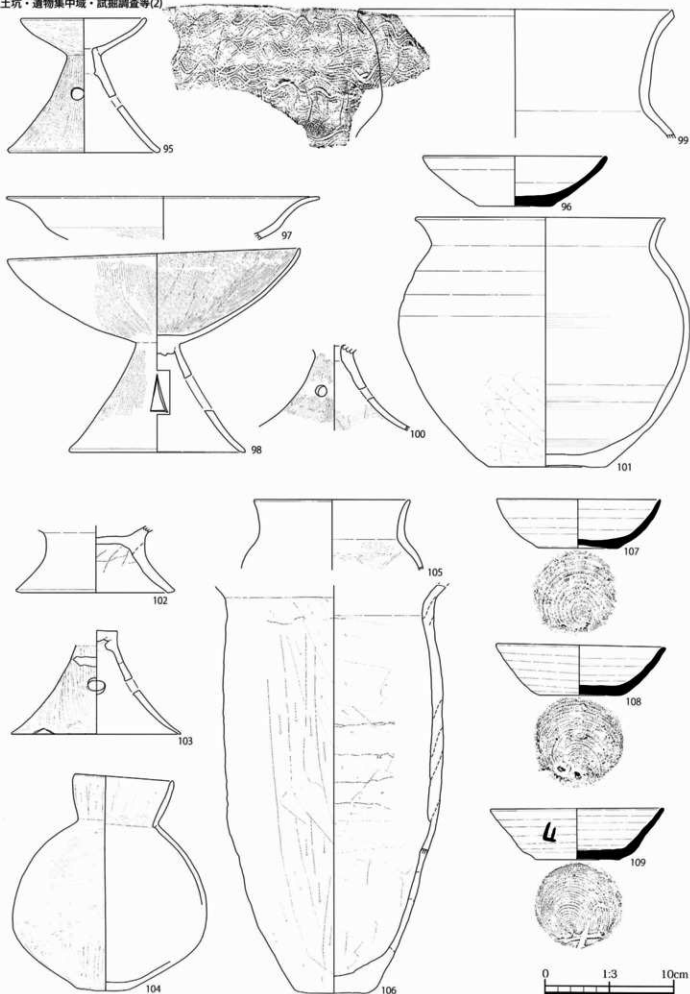


土坑・遺物集中域・試掘調査等(1)

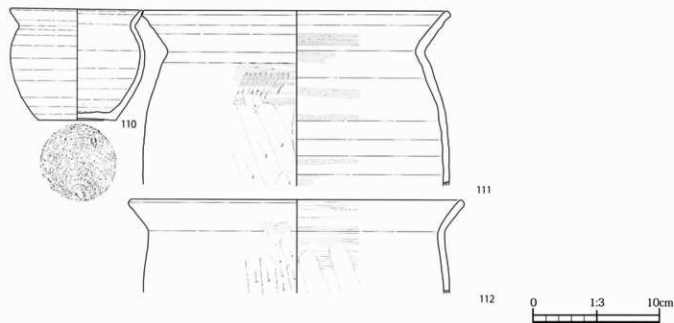


食品加工実習棟(3)

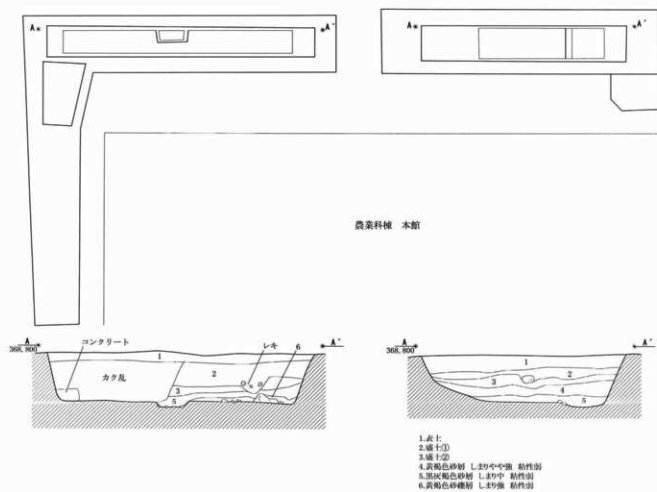
土坑・遺物集中城・試掘調査等(2)







渡り廊下部分 全体図・断面図



農業科棟 本館

- 1.表土
- 2.盛土①
- 3.盛土②
- 4.黄褐色砂層 L.主りや平強 粘性弱
- 5.黒灰褐色砂層 L.主り中 粘性弱
- 6.黄褐色砂層 L.主り強 粘性弱



工業棟 遠景 (西から)



工業棟 近景 (北西から)



工業棟 完掘 全景



調査区東半部 完掘 全景 (北西から)



SQ 1 ①〔上層〕 検出状況 (南から)



SQ 1 ②〔下層〕 検出状況 (西から)



SK2 セクション (南東から)



SK2 完掘 (南から)



SK3 セクション (北東から)



SK3 完掘 (東から)



SX4 東西ベルトセクション① (南西から)



SX4 東西ベルトセクション② (南西から)



SX4 東西ベルトセクション③ (南西から)



SX4 南北ベルトセクション① (南東から)



SX4 南北ベルトセクション② (南東から)



SX4 南北ベルトセクション③ (南東から)



SK4 南北ベルトセクション④ (南東から)



SK4 完掘 (北西から)



SK5 セクション (北から)



SK5 完掘 (西から)



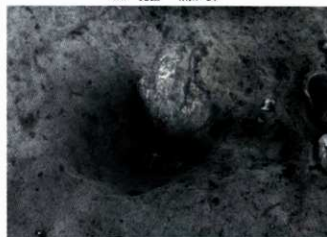
SK7 セクション (東から)



SK7 完掘 (南から)



P9 セクション (南から)



P9 完掘 (南から)



P10 セクション (南から)



P10 完掘 (南から)



SX11 完掘 (南から)



P13 セクション (東から)



P13 完掘 (東から)



P10~P13 遺構検出状況 (南東から)



P10~P13 遺構検出状況【アップ】 (南東から)



獣骨出土状況





東西ベルト セクション① (南から)



東西ベルト セクション② (南から)



東西ベルト セクション③ (南から)



東西ベルト セクション④ (南から)



東西ベルト セクション⑤ (南から)



東西ベルト (S08) セクション① (南から)



東西ベルト (S08) セクション② (南から)



東西ベルト (S08) セクション③ (南から)



東西ベルト【SD8】 セクション④ (南から)



南北ベルト セクション① (南東から)



南北ベルト セクション② (南東から)



南北ベルト セクション③ (南東から)



南北ベルト セクション④ (南東から)



南北ベルト セクション⑤ (南東から)



南北ベルト セクション⑥ (南東から)



南北ベルト セクション⑦ (南東から)



南北ベルト セクション⑧ (南東から)



南北ベルト セクション⑨ (南東から)



南北ベルト セクション⑩ (南東から)



南北ベルト セクション⑪ (南東から)



南北ベルト セクション⑫ (南東から)



南北ベルト セクション⑬ (南東から)



南北ベルト セクション⑭ (南東から)



南北ベルト セクション⑮ (南東から)





南北ベルト【SD8】 セクション⑩ (南東から)



南北ベルト【SD8】 セクション⑪ (南東から)



南北ベルト【SD8】 セクション⑫ (南東から)



南北ベルト【SD8】 セクション⑬ (南東から)



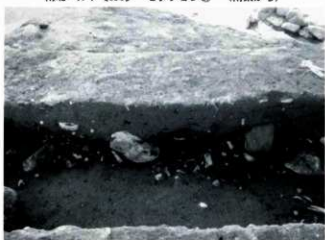
南北ベルト【SD8】 セクション⑭ (南東から)



南北ベルト【SD8】 セクション⑮ (南東から)



南北ベルト【SD8】 セクション⑯ (南東から)



南北ベルト【SD8】 セクション⑳ (南東から)



南北ベルト【S08】 セクション② (南東から)



南北ベルト【S08】 セクション② (南東から)



調査区東壁 セクション① (北西から)



調査区東壁 セクション② (北西から)



調査区東壁 セクション③ (北西から)



調査区東壁 セクション④ (北西から)



調査区東壁 セクション⑤ (北西から)



調査区東壁 セクション⑥ (北西から)



調査区北壁 セクション① (南西から)



調査区北壁 セクション② (南西から)



調査区北壁 セクション③ (南西から)



調査区北壁 セクション④ (南西から)



調査区北壁 セクション⑤ (南西から)



調査区北壁 セクション⑥ (南西から)



調査区北壁 セクション⑦ (南西から)



調査区北壁 セクション⑧ (南西から)



調査区北壁 セクション⑨ (南西から)



調査区北壁 セクション⑩ (南西から)



調査区北壁 セクション⑪ (南西から)



調査区北壁 セクション⑫ (南西から)



調査区北壁 セクション⑬ (南西から)



調査区北壁 セクション⑭ (南西から)



調査区北壁 セクション⑮ (南西から)





調査対象地 完掘 近景 (南西から)



温室1・2 完掘 近景 (南から)



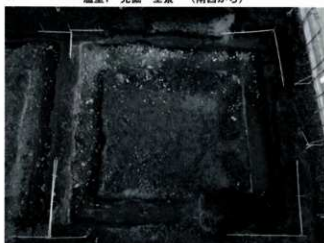
温室2・3 完掘 近景 (北から)



温室1 完掘 全景 (南西から)



温室2 完掘 全景 (西から)



温室3 完掘 全景 (西から)



作業小屋 完掘 全景 (南から)



温室1 S01~4検出状況 (南西から)



S01② 検出状況 (南西から)



S01② 検出状況【アップ】 (南西から)



S01① 検出状況 (南西から)



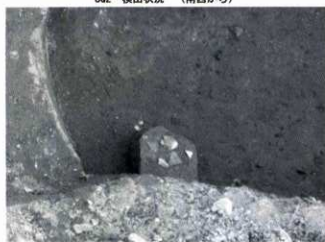
S01② 検出状況【アップ】 (南西から)



S02 検出状況 (南西から)



S03 検出状況 (南から)



S04 検出状況 (西から)



S04 検出状況【アップ】 (東から)



温室1 南西隅遺物 出土状況 (北東から)



温室1 調査区東壁 セクション① (西から)



温室1 調査区東壁 セクション② (西から)



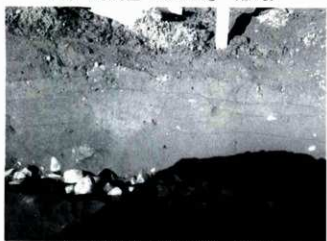
温室1 調査区東壁 セクション③ (西から)



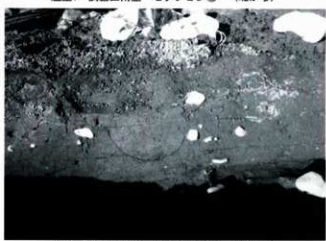
温室1 調査区南壁 セクション① (北から)



温室1 調査区南壁 セクション② (北から)



温室1 調査区北壁 セクション① (北から)



温室1 調査区北壁 セクション② (北から)



温室2 調査区東壁 セクション① (西から)



温室2 調査区東壁 セクション② (西から)



温室2 調査区東壁 セクション③ (西から)



温室2 調査区南壁 セクション① (北から)



温室2 調査区南壁 セクション② (北から)



温室3 調査区東壁 セクション① (西から)



温室3 調査区東壁 セクション② (西から)



温室3 調査区東壁 セクション③ (西から)





温室3 調査区南壁 セクション① (北から)



温室3 調査区南壁 セクション② (北から)



温室3 調査区南壁 セクション③ (北から)



作業小屋 屋根出状況 (西から)



作業小屋 調査区北壁 セクション① (南から)



作業小屋 調査区北壁 セクション② (南から)



作業小屋 調査区北壁 セクション③ (南から)



調査対象地 全景 (南から)



S16 遺物 出土 (東から)



S16 遺物出土状況〔アップ〕(南から)



S16 遺物出土状況〔アップ〕(西から)



SK3 土層断面 (北から)



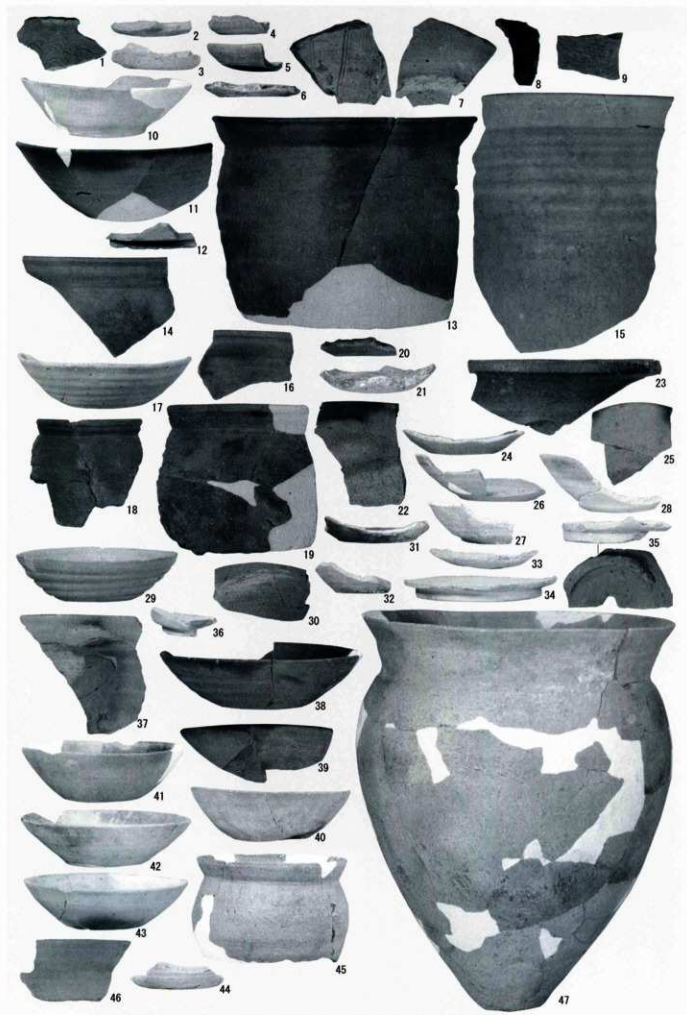
SK2 土層断面 (北から)

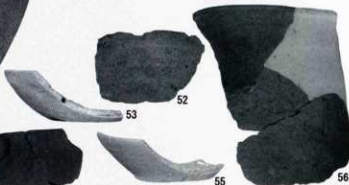


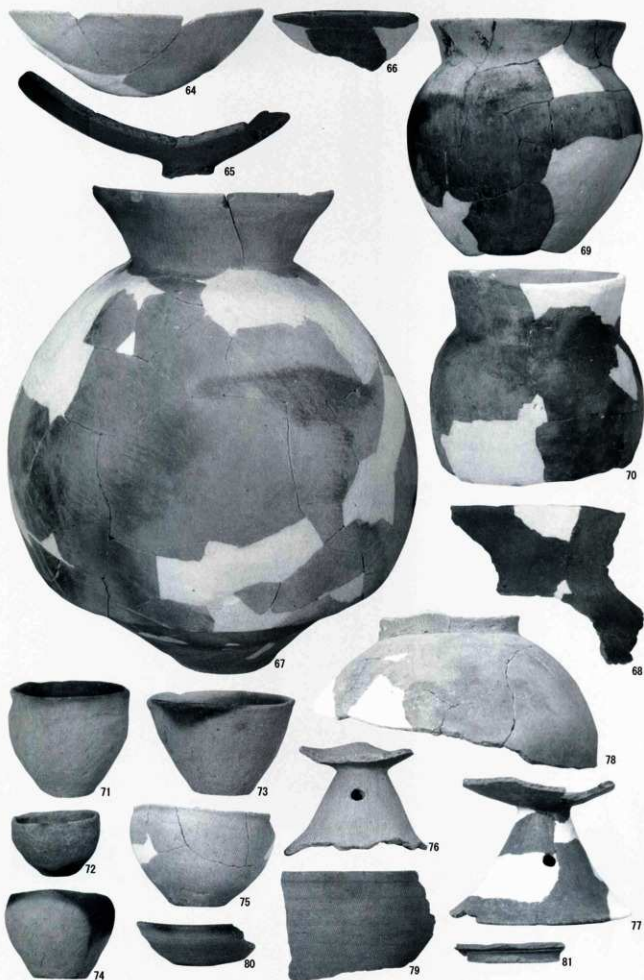
S16 完備 (東から)



S01 検出状況 (南から)













101



102



103



104



105



107



108



109



106



110



111



112

# 報告書抄録

ふりがな	すざかえんけいこうとうがっこうないまいぞうぶんかざいほくつちようさほうこうしよいち							
書名	須坂園芸高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ							
副書名	須坂創成高等学校高校建設Ⅰ期工事・工業棟建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	須坂市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	田中 一穂							
編集機関	須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課							
所在地	〒382-8511 長野県須坂市大字須坂1528番地1 TEL026(248)9027・FA026(248)8825							
発行年月日	2015(平成27年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
しほがわ すざか 塩川・須坂・ 小山遺跡群	ながの県須坂市 すざか 須坂1616番地 他	202070	19	36° 65' 23"	138° 30' 52"	2013.7.12 ～ 2013.10.15	864.2 ㎡	県立高校新校舎 建築工事
要約	塩川・須坂・ 小山遺跡群	<p>新校舎建築にともない溝状土坑4基・土坑1基・ピット1基・自然流路跡1条を検出した。遺物は奈良平安期の須恵器片・土師器片を中心として、珠洲焼や瀬戸美濃など中世陶磁器片が、出土した。カク乱が広範囲にかつ、深く入っており、元々の土層（遺物包含層V層を含む）が喪失していることもあって、良好な出土状況の遺物は唯一の遺物集中域だけである。</p> <p>むしろ、平成23年の温寒移動にともなう緊急調査では、遺構は検出されなかったが、土師器甕8点・須恵器杯5点など多くの遺物の出土が確認された。土層上では、基盤砂礫層の直上の砂質土から出土し、近隣の集落遺跡から持ち込まれたものでなければ、流路内か、それに伴う二次堆積遺物の可能性が高いと考えられる。遺物の損傷が少ないので、二次堆積遺物としても、近傍の集落遺跡から流失したと推測されるので、集落が近くに所在したことを示唆する。</p> <p>併せて平成2年（1990）ごろ、食品加工実習棟建築に先行して行われた発掘調査の出土遺物を整理し、竪穴住居跡1軒・土坑3基などについて報告した。弥生末期の節描文を施す甕類や、赤彩をもつ高杯・器台などの出土が確認される。弥生終末期～古墳初頭（北信地域の古墳出現期）の土器を検討する上で、好例の資料・遺跡である。</p>						



須坂園芸高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書 I

発行日 平成 27 年 3 月 3 1 日

編 集 須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課

発 行 須坂市教育委員会

印 刷 株式会社オフセット